

---

# ストライクウィッチーズ 私、恋しちゃってます

夢幻遊戯

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ストライクウィッチーズ 私、恋しちゃってます

### 【Nコード】

N1232P

### 【作者名】

夢幻遊戯

### 【あらすじ】

19歳の普通…ではない大学生はある日の夜、燃え盛る街で小さな女の子を助けるといふ、不可思議な夢を見た。そして夢から覚めた時、そこには自分が知る世界ではなく、違った世界が広がっていた。そう、ストライクウィッチーズの世界へと来ていたのだった。

## キャラクター設定その1（前書き）

はじめまして、私今回このサイトにて小説を執筆させて頂くことになりました…夢幻遊戯と申します。

このサイトにある小説を読ませて頂いて、私も執筆してみたい、と執筆衝動に駆られたのが切っ掛けです。

何分初挑戦となる執筆、駄文ではありますが見て下さり楽しんで頂ければこれ幸いです。

最後に一つ、お願いがあります。感想についてなのですが…あまり強い言葉は書かないで下さい（焦）。

何分作者夢幻遊戯の心は硝子で出来てて脆いので…いやマジで（真）。

長々とスイマセン、それではどうぞ…お楽しみください

## キャラクター設定その1

名前：儀國 雅史

性別：男性

年齢：19

身長／体重：177cm／67kg

特技：料理

### 【詳細】

19歳の青年、とある過去の出来事により普通の人間として逸脱し、“魔術師”となる。

現在は大学生として（とりあえず）普通の生活をしている。

普段はどこかチャラチャラとした態度を取っているが、困っている人が居たら相手が何者であろうと必ず助ける。仲間と認めた相手を絶対に見捨てるようなことはしない優しさ、そして周囲の人間を惹くカリスマの持ち主である。

一度戦闘となれば死神の如き無慈悲さを持って相手を殲滅する。

## キャラクター設定その1（後書き）

今作主人公のデータです。物語が進むにつれて追加していきます。

## A c t 1：邂逅「壱」（前書き）

初本編投稿です。まだサイトの扱い方に不慣れですので、投稿と修正を繰り返すと思いますが、よろしく願います。

## Act 1：邂逅「壱」

二〇一〇年… 八月 初旬、季節は言うまでもなく真夏。

去年を上回る猛暑続き、ニュースでは夏バテ予防の料理の紹介や、熱中症に対し気を付けるようにと…、そんな内容ばかりが流れている気がする。

今より昔、電気やガス…今の文明がなかった頃、即ち自分達のご先祖様はどうやってこの夏を乗り切っていたのだろうか。  
そんな事をふと思いながら、過去の記憶を呼び戻していた。

あれは今から四年ほど前だったか…。あの時は確か、今日の様に猛暑の夏とは対極の寒い真冬だった。

雪が毎日絶えず降り注ぎ、街はクリスマス色鮮やかに飾られ、ミニスカートのサンタ服を着た可愛い女の子が頑張ってケーキを販売している…そんな冬だった。

そんな冬のある日、非日常への誘いが自分の元に来た。

「……………で、だけど……………」

怪物、魔法、未知の物質…。人間が作り出し、現代となった今でも

衰えを見せない架空の存在達。

実際にそんな物はこの世には存在しない、そう思っていた時期が俺にもあった。

あんな物を見せられるまでは…。

「おい雅史！聞いてるのかって！」

「……え？」

俺を呼ぶ声に、我へと帰る。四人の青年がおいおいと、呆れた様子でこっちを見ている。

…そうだ、すっかり忘れていた。今は会議中だった。

「おいおい夏バテか？しっかりしてくれよ？」

「あ、ああ……ゴメン」

とりあえず謝り気持ちを切り替える。今は会議の方に集中集中と…。



「それでだ、今度のゲームだけど……ストライクウィッチーズを題材にして何か考えようと思うんだ」

一人がそう口にした。ストライクウィッチーズ、通称“パンツじゃ  
ないから恥ずかしいもん”。または“穿きません、勝つまでは  
”。

各国の英雄たちをモデルとし、ネウロイという謎の存在とウィッチ  
と呼ばれる少女達が闘う二次作品。  
主に女性キャラが活躍するアニメであり、男達は殆ど出ない上に活  
躍もあまりない。

そんな作品でいったいどんなゲームを作るのか、それが今各々与え  
られた課題だ。

「俺は恋愛ゲーで主人公がいいな」

一人が意見を述べた。ストライクウィッチーズは女性キャラが多い  
からそれもアリと言えばアリだろう。  
だが、男主人公という点で問題が幾つか湧き出てくる。

「でもさ、それかなりキツくないか？」

「かなり難しいだろうな」

他の面子も難しいと発言。それもそうだろう、ミーナは魔女の魔法力を弱めない為に男性との接触を固く禁じている。必要以上の会話やコミュニケーションも勿論禁止。

俺だったらそんな生活耐えられないけど…。入って即刻脱退しかない。そんな設定が在るのに男主人公を出してもどうやって恋愛に結びつけるのか…。

それにキャラ自体が皆男に眼中なし、って感じもするし…。

まあハッキリ言つと…

…ムリダナ（・×・）。

「ムリダナするなよ！」

「じゃあシューティングは？やっぱりストライクウィッチーズだし、シンプルにシューティングゲームがいいと思うんだけど」

確かに、それは俺も賛成した。シンプルなゲームが一番いいと思う。

「そうだな…それもいいかもな」

うんうんと頷く一同。ただ一人、首を縦に振る事はなかった。そう、恋愛ゲームにしたいと言った奴だ。

首を横に振るい、何やら鞆を漁り出す。そして何かを取り出した。

取り出したのは一冊の本、表紙には「ストライクウィッチーズ ドキッ！私恋してます」と書かれてあった。  
まさかとは思うが…それは台本か？

「俺、徹夜でシナリオとかイベント考えてきたんだよ！一回読んでみてくれ！！」

そう言っただけ俺を含めて他のメンバーに台本を渡す。かなりのページがある、100ページぐらいはあるんじゃないだろうか。

それにしても、よくこれだけ書き込めたものだ。その情熱には感服するが、もっと違う方面で生かせないのか？

「ま、まあ分かったよ…。じゃあ恋愛ゲーの方向もとりあえず保留で。それじゃあ他に意見は…」

「

とりあえず、一段落話し合い、今日は解散することになった。明日

まだ集りどんなゲームにするのかを話し合う。

そして、今日中に渡されてしまった恋愛ゲームのシナリオ本を読破しなければならぬという、課題を与えられてしまった。

憂鬱ではあるが、仕方ない。今日中に何とか読みきるとしよう。

分厚いシナリオ本を鞆の中に押し込み、バイクに跨ると家を目指して帰路を走った。

深夜零時過ぎ、机にある照明の灯りで薄暗く照らされた部屋。机に向って手渡されたシナリオ本に眼を通していく。

読み始めたのは午後十時過ぎ頃、二時間近く経過しているがまだ半分にも到達しない。

細かく書かれた内容と解説、そしてご丁寧に感想も添えろと赤字で書かれてあった。これならもっと早く読んでおくべきだったとひたすら後悔。

とりあえず今分かっていることを纏めると

1：男主人公で役割は整備兵

2：人には言えない過去を持っている。

3：なんやかんやで皆にバレる。

4：なんやかんやでラブラブハーレム展開に。

ということまで。後は全然頭の中に入っていない。  
どうやったら恋愛フラグが成り立つのか、結ばれるのか細かく書いてあった：気がする。兎に角文章が多すぎと細かすぎで憶えられない。

他の皆は無事読み終えたのだろうか…。多分俺と同じ、頭に入っていないだろう。

「あゝ…頭マジで痛い」

流石にこれ以上は読めない、開けていたシナリオ本を閉じベッドの上に寝転がる。

もうこれ以上細かい字を見たくない、感想を書けとか書かれてあったがそんなもの書く気すら起きない。

明日の会議では読みきれなかったと報告するしかない。

今日はもう休みたい…。

ベッドの上に寝転がった途端、急激に睡魔が襲ってくる。シナリオ本と睨めっこしていたのが予想以上に身体を疲れさせていたようだ。

寝る前にクーラーのタイマーをしないと…、そう脳では思っ  
ても身体は言う事を聞かない。ダメだとは分かりつつも、そのまま睡魔に身を任せ眠りへと就いた。

不思議な夢を見た。

何処か見知らぬ場所、崩壊した建物、紅蓮の炎に包まれる何処かの街。空は赤き炎により赤く輝いている。

周囲には破壊された戦車、血を流し亡き者となった兵士達やこの町の住民であろう人々の骸。聞こえてくるは炎が激しく燃え盛る音だけ。

瞬時に理解する、ここは…何処かの戦場なのだと。

まさに地獄絵図だ…。多くの人が死に、そして最後は跡形もなく無くなる。

こんな夢を見るのは、やはりあっち側での影響だろう。

それにしてもどういうことが、夢だと言うのに感覚がとてつもなくリアルだ。

足に伝わる地面を踏み締める感触、焼け付くような炎の熱気、全てがリアル過ぎる。

と、一人の少女が視界に入った。小さな女の子だ、年齢は十にも満たない幼い少女。その顔は悲しみに溢れていた。

泣きながら、ゆっくりと此方にやってくる少女。ふと、少女が顔を上げる。

少女と眼が合う、その顔は悲しみに溢れていた。

この子は一体誰だ？この夢は…この戦場はいつたい何処なんだ？

そんな疑問を抱いている時、何かが上空から落ちてくるのを感じた。

上を見上げる。戦火で赤く輝く夜空、その夜空から地上へと落ちてくる白い物体、仄かに発光する巨大なソレは雨の如く炎に包まれたこの地上へと落ちてくる。

彼方此方で大きな落下音が鳴り、砂煙が舞い上がり、地響きを発生させる。

その物体の一つが少女と自分との真上に落ちてきた。

「ちいつ

！！」

すぐに身体が反応し動く。あの白い物体が何なのか、それは後回しだ。いずれにせよ、このままでは二人共押し潰される。

マジックコード オープン  
「魔力回路、開放」

意識を集中させる。人間の中にあるもう一つの神経、魔力回路。別にこれは不思議なことではない、人間…動物にだって魔力回路はあり、魔力を持っている。

ただ深く眠っているのを起こせたか起こせてないか、それだけの話。



「脚部への強化、開始」

魔力回路に魔力を巡らせる。

あの巨大な白い物体を砕くのは危険だ、砕けば更に細かな破片となつて降り注ぎ負傷するリスクを高める。  
小さなパチンコ玉とて高い所から落とせば、その威力は凄まじいものとなる。

尤も、それをするだけの時間がなさすぎるが。

ならばどうするか。簡単な話、ここから離脱すればいい。

「掴まれ　　！！」

少女を抱き抱え、その場から離脱する。僅かに遅れて、そこに巨大な白い物体が落下した。

間一髪、後少しでも遅れていたなら地面に挟まれサンドイッチが出来上がる場所だった。

が、安心はしてもらえない。空からは白い物体が振り続けている。

兎に角、この街からあの白い物体が降り注がない場所まで逃げる、それ以外に方法がない。

「はあ……はあ……っ

！」

なんとか白い大きな物体の雨の影響を受けない場所まで逃げる事が出来た。乱れた呼吸を整えている時、少女が小さく口を開く。

「あ……あの……」

「…どうした？」

「助けてくれて、ありがとう……」

ニツコリと微笑む少女。先程の悲しみはもう消え去っていた。

「気にしないでいいよ」

少女の頭を撫でる。と、意識が急速に薄れてきた。

ああ、夢から覚めるのか…。少女が何か叫んでいるようにも聞こえるが、どうやら現実世界へと帰らなければならない。

二度とこんな夢を見たくない…見たくないが、この子とはもう一度逢いたい、そう思った時意識は完全に闇の中へと落ちていった。

## A c t 1：邂逅「壺」（後書き）

初投稿でした。駄文ではありますが…最後まで責任を持って頑張っています。

## Act 1：邂逅「弐」

「ッ

」

ふと眼を覚ます。そして開いた視界に飛び込んできたのは見知らぬ世界。

「じじは……」

ベッドから跳ね起き、辺りを見回す。

レンガ造りの壁や天井、今自分が横になっていたベッド以外何も無い殺風景な部屋。

開いた窓から吹く、緩やかな風。その風に吹かれ靡く白のレース。その窓にゆっくりと近づく。と、その窓の向こうの世界…全く知らない世界が広がっていた。

「これは…」

「お、ようやく起きたかコイツ。遅いぞ新人」

誰かが部屋の中に入ってくる。黒い軍服に黒の半ズボン、黒い帽子と…黒ずくめの格好をした男が近付いて来る。

「お前だろ？昨日扶桑からこっちに配属されっていう整備兵は」

「…何？扶桑？整備兵？」

「何って…寝惚けているのか？」

まあ長旅で疲れているのは分かるが、今日からお前もここの部隊の正式なメンバーだ。

気を引き締めろ、儀國」

「おいおい、アンタさっきから何を…っ！か何で」

「いいから…ミーナ中佐がお前を呼んでいるんだ、早く行くぞ！」

「…ミーナ…中佐？」

“基地”内を安藤という先輩整備士に案内されながら、ミーナの

元へと向う。

「間違いない…これは、ストライクウィッチーズの基地だ」

どうも自分とはんでもない現象に巻き込まれているらしい。何の因果か、俺は今あのストライクウィッチーズ基地にいる。

第二期の方のあの基地。地下に古代ウィッチの遺跡があったりするあの…。

どうしてこんな所にいるのか、それは全く分からない。夢かと思えば古典的ではあるが頬を抓った、殴ってみたが痛みはハッキリとある。だからこれは夢じゃない。

「お前、何で自分の頬殴ってるんだ？」

「いや、虫が引つ付いたからグーパンで仕留めただけ」

「グーパン？」

「グーでパンチってこと。知らない？」

ここに来る前俺は何をしていたか…。ストライクウィッチーズを題材にした恋愛ゲーのシナリオ本を読んでいて…それで途中で諦めて寝た。

それで嫌にリアルで変な夢を見て、そこで少女を助けた。  
そして夢から覚めると、意識が急速に薄れていつて

「今に至る…か」

それにしても、まさか自分がストライクウィッチーズの世界にトリップしてしまうとは…。

世界というのは現実と言う名の顔と、幻想と言う名の顔を持つ。  
それはあの時、世界魔術協会に初めて入門した時に学んだ。けれど  
も二次作品の世界が実在するとは…、これは新たな発見である。

もし今この場に居るのが俺ではなく、アイツだったならばメチャク  
チャ喜んでいただろう。

何はともあれ、俺はストライクウィッチーズの世界いる。そしてこ  
の世界での俺は新しくこの基地に配属された新米整備兵。  
よりによって整備兵か…まあ機械を弄るのは嫌いではない。



それにここはウィッチーズ基地だ、戦場へと赴くのはウィッチ達。自分が戦線へ出る必要はない。

何はともあれ、この世界で俺、儀國 雅史という人間は存在しない。そんな俺の衣食住はここだけ、ここを追い出されたら終わりだ。暫くは新米整備兵としてこの基地でやっていくしかない。

理由はどうであれ来れたのならば、帰れる方法もある筈。それを見つけ出すまでは…。

「ほら、ボサツとしてないで早く歩け」

「へい、了解ですよっ」と

「お前…少し口が悪いぞ」

「それはスイマセン」

「……それにしても」

先程から感じる身体への違和感。何故かいつもと違って動きづらい感じがする。ストライクウィッチーズの世界にいる為か、身体が重くすら感じる。

嫌な予感がしつつも、魔力を通し身体の異常を調べていく。

身体機能：正常…但し性能は120%から70%に低下。

魔力回路：エラー。87%回路に異常発生。

CODEE:SATAN

「煉獄の赤」…使用可能。但しエラーにより制限あり。

・ランク A++ランクからDランクに低下

・消費魔力増大

CODEE:BLUE

「終焉の蒼」…術式工程時にエラー発生、よって使用不可。

CODEE:EATER

「暴蝕の黒」…上記と同じくエラーにより使用不可能。

ソードサマナー

「剣極の調」…使用可能。エラーにより制限あり。

・剣の製作可能 製作時間延長及び現界時間短縮。

・ランク AランクからD-ランクに低下。

・製作した剣による掃射可能 「ルーン」の付加可能。

・「ルーン」 使用時、通常製作時間より更に延長。

・強化：使用可能。但し効果は15秒、再度使用時には一分間の集中が必要。

・ルーン魔術：使用可能。

「なんじゃこりゃ…なんじゃこりゃ…なんじゃこりゃ…!?!?」

「おい、さつきから何一人で叫んでるんだ!？」

「いや、何でもないッス」

エラーだらけ、最悪としか言いようが無い今の俺の状態。  
本来の力が完璧に出せない上に、使用できる魔術もかなり限られてしまっている。

CODE...BLUE CODE...EATER  
「終焉の蒼」と「暴蝕の黒」が使用できないもはかなりの痛手だ。

CODE...SATAN  
何とか通常の「煉獄の赤」が使用出来るが...まさかランクがDランクまでガタ落ちしているとは。

これでは火炎瓶程度の炎しか発現することしか出来ない。

これが人間相手ならまだしも、ネウロイ相手に通用するかどうか...。  
傷口を焼き、再生能力を封じることぐらいは出来そうな気はする。

ソードサマナー  
「剣極の調」もエラーだらけ。

ランクダウンに加えて製作時間の延長と現界させておける持続時間の短縮。戦闘を得意とする魔術師にとっては致命傷だ。

「おい着いたぞ、ココだ」

安藤の声で我に帰る。どうやら知らぬ間に着いていたらしい。三回の軽いノックの後、部屋の中から「どうぞ」、と聞いた事のある女性の声がする。

「くれぐれも、失礼のないようにな」

「分かってますよ                      失礼しまゝす」

ドアを開け中へ、そしてこの基地の隊長であり…二次作品ストライクウィッチーズの登場人物が一人、ミーナ・ディートリンデ・ヴィルケ中佐との邂逅を果たした。

そしてその隣、白い軍服の下にスクール水着を着用した眼帯ウィッチ、坂本 美緒の姿もあった。

「貴方が昨日から配属された新しい整備士ね？私はミーナ・ディートリンデ・ヴィルケ中佐よ。」

右にいるのは坂本 美緒少佐。貴方と同じ扶桑皇国の出身よ」

「坂本 美緒少佐だ。儀國 雅史と言ったな、これからよろしく頼

む」

「えっと…はい、こちらこそ」

とりあえず頭を下げる。本当なら頭なんて下げたくないが、役割が役割だ。ここは我慢。

尤も、俺が頭を下げる時は大切なヤツ等に関する時だけだな。

「それじゃあ、最初の内は慣れるのに精一杯だろうけど、頑張ってるね」

「は、はい。それじゃあ失礼します」

静かに頭を下げ、踵を返し部屋を後に

「ああ、少し…待ってくれるかしら」

ドアノブに手を掛けようとして、ミーナに呼び止められる。

「…何ですか？」

一旦ドアから離れて、再びミーナに向き直る。真剣な表情で、少し考える様な仕草を取った後、静かに口を開いた。

「貴方：カールスラントに行ったことは？」

「…いや、ないですけど」

「…そう。ごめんなさい、引き止めて」

「いえ……」

改めてドアへと向きドアノブに手を伸ばす。扉を開け、出る前に一礼した後閉める。その扉に背を預けながら大きく溜息を吐いた。

「ヤバい…これメチャクチャしんどいぞ」

これから自分がしていく軍隊生活。最初の内は慣れるのに大変だとミーナも言っていたが…一生を費やしても慣れそうにない。

「話は終わったか？それじゃあさっさと仕事に行くぞ新米」

「…へい」

「…ちゃんと返事しろ」

「はいはい」

「はい、は一回でいい」

安藤に連れられながら兵舎へと再び向う。果たして、俺はこれからどうなってしまうのか…。不安で仕方なかった。

その日の夜、人気のない森の中で実験を行っていた。

「ソードサマナー 剣極の調」起動：「剣」の製作、工程開始  
「

3分後、右手に剣が現れる。

錬金術という魔術カテゴリーがある。錬金術は某マンガでもお馴染み、等価交換を以って物を成す。しかし自分の場合は錬金術ではない。

自分の想像した物を具現化する“錬想術”と呼ばれる上級魔術の一つ。

魔力という対価を支払うことで、自分が想像した物を作り出すことが出来る。そして自分が想像によって作りだせるのは「剣」というカテゴリー。

他の物は一切創造することが出来ない。あくまで「剣」のみを想像によって創造することが出来る。

「剣」とはどうかやら相性がいいらしい。

確かに、ゲームでも魔法メインで戦う魔法使いよりも、剣等の武器で戦う戦士の方が好きだ。魔法メインで闘うのは性に合わない。

どれも俺が想像し製作したオリジナル。無銘の武器ではあるが、それらの一つ一つは神話時代の聖剣だろうと魔剣であろうと退けは取らない…つもりだ。

しかし万能ではない。あくまで自分が想像するものを具現化させる



のであり、元よりある物を作るのに特化したものではない。

マンガやゲームに登場したような物も創造出来ると言えば出来る。

だが、そういった類の物はみな対価とする魔力も通常の消費よりも増大し、製作時間が倍掛かる上に現界させておける時間もごく僅かとなってしまふ。

言ってしまうえば一回きりの使い捨て。一発撃てばそれでおしまい。燃費も悪いし使い勝手も悪い。

それに神霊レベル的なものも作り出せない。

例えるのならば神様を殺せる剣だとか、世界を切り裂く剣だとか。それ等は規格外とされ創造することが出来ない。

あくまで普通の「剣」を生み出すことが出来る、それが俺の錬想術であり、錬想術の本質。

魔術師の中には想像によって創造するぐらいならば、初めから良い物を所持するという輩も少なくは無い。

確かに、持ち運びという点ではいいかもしれないが、実用性を考えると元から所持していた方がいいかもしれない。

それを補う為にルーン魔術であったり、強化魔術があったりするのだが…。考え方は人それぞれである。

協会に在籍していた時に「ソードサマー剣極の調」と名付けられた。毎度のことながら協会にはいい名前を付けてくれたと思うし、何よりこの名は気に入っている。

しかし今はエラーだらけの状態。製作し、一振りを具現化するまでの時間に3分も費やす。

本調子ならば一瞬にして1000を超える剣を生み出すことが出来たと言うのに…。

現在、エラーにより100本程度しか製作出来ない。十分の一程度の力しか出せないとは…。後メチャクチャ疲れる。

そして、創造した剣を現界させておける持続時間。

「っと……ジャスト1分だな」

右手から剣が消えたのと同時に、左手に持っていた時計を見て確認

する。

持続させておける時間は1分丁度。1分すると消えてしまう、その度に製作しなければならないとは…。

敵との激しい打ち合いになった時、近距離での戦闘だと長期戦は圧倒的不利になる。

そして剣の掃射…、空中に剣を展開し一斉に標的に向けて撃ち放つ。放たれた剣は木々に突き刺さり、たまに幹を打ち砕く。

やはり、ランクが低下している分威力も落ちてしまっている。

「ハア……憂鬱だな」

近くの木に凭れ掛かり、夜空を見上げる。とても澄んだ夜空、数多の星が煌き、神々しい輝きを地上へと放つ満月が浮んでいる。さながら、それはまるで宝石箱のよう。

「  
」

ふと、あの世界にいるアイツ等の顔が浮かび上がった。

今頃どうしているだろうか、一人だけサボッたと言われているだろうか…。

「…あいつ等、元気にしてるかな…」

誰に聞くわけでもなく、呟く様に言った後夜空を暫く眺めていた。

## A c t 1：邂逅「式」（後書き）

ん…小説執筆するということはとても難しいですね。

後魔術については、もう私の想像と妄想による完全オリジナルです。矛盾が生じたりする可能性もありますが…笑って許して下さい。

追伸：11月26日、能力名を一部変更しました。やっぱりこっちの方がカッコイイかって…。スイマセン。

## Act2：襲撃「巻」(前書き)

初戦闘描写です。自信ないですが、どうぞ。

## Act 2：襲撃「壱」

ストライクウィッチーズ基地で始まる第三の新たな人生。魔術師兼大学生である儀國 雅史は整備兵として生きていくことになった。

「まったく…この服なんか知らないのか？」

ダサい作業服にケチを付けながらストライカーユニットの整備に当たる。とりあえず安藤の指導の下、ストライカーユニットのメンテナンス作業を学んだ。

だが不思議なことに、ストライカーユニットが分かる。

外観ではなく中身の話。初めて見る構造、パーツ。

なのにもまるで長年も整備し続けてきたかのような感覚がある。そして安藤の教えもなしにパーツを組み直し、メンテナンスが終わる。

安藤も新米とは思えない程の熟練された動きだと驚いていたが、俺自身も驚きだ。

いったいどうなってる？初めて見るストライカーユニットを、何の説明もなしに整備出来る、こんな事ってあるのか？

尤も、有り難い話ではある。ストライカーユニットの整備なんて出来ない、なんて言ったら怪しまれる。

「はあ……やつと終わった」

初めてで初めてでないストライカーユニットの整備を終えて時刻は昼過ぎ。そろそろ腹も減ってきた頃、食堂に我先へと向う。

ここは日本…扶桑皇国ではないが食卓に並んでいるのは和風。まず日本人にとって絶対に欠かせない白い炊き立てのご飯、豆腐とネギの味噌汁、焼き魚、お浸し、そして…納豆。

なんて贅沢、なんで豪華なお昼ご飯…。どんな料理が出るのかと思っていたが自分が大好きな日本のご飯。

米の軟らかさも自分好み、味噌汁も大好きな赤だし。

無論、箸は進む。空腹の状態にいるから尚進む。

お代わりも当然、二杯だろうと三杯だろうと、胃袋の中に入る限りはするつもりだ。



他の席に着いている整備士達は納豆が出ていることに嫌そうな声を出している。

まあ外人さんだからしょうがないとは思うが…ただ一つだけ言うと納豆舐めるな。つか喰わないんなら俺にくれ。納豆は好物だ。

そう言った途端に次々と俺のも食ってくれと納豆が集ってくる。

こんなに嬉しい事は無い、有難く頂くとしよう。

「どうだ？この基地は。少しは慣れたか？」

隣の空席に安藤が腰を下ろす。

「ええ、大分は」

「そうか、それならいい。しかし、アレだな。新人にも関わらず長年もこの整備士を務めてきたかのように見えたぞ」

納豆をかき混ぜながら安藤が言う。

「ガキの頃から機械とか弄るのが好きだったからなあ、まあ慣れてるからッスよ」

刹那、基地内に警報が鳴り響く。警報が鳴り響いた途端、楽しく話し合い笑みを浮かべていた整備士の表情は真剣なものへと変わる。

どうやら敵さんのお出まらしい。食事中だというのに襲ってくるとは何とも礼儀知らず。

折角沢山貰った納豆で納豆丼にしようとしていたのに…。

「雅史！ハンガーへ急ぐぞ！」

「了解」

安藤と共にハンガーへ急いだ。

ハンガーへ行く。ストライカーユニット出撃前の最中チェックを行う。と、同時に我が隊のウィッチ様がやってきた。

ゲルトルート・バルクホルン大尉、エーリカ・ハルトマン中尉、フランチエスカ・ルツキー二少尉。シャーロット・E・イエーガー大尉、坂本 美緒少佐、の計五人が出撃準備に入る。

遅れて残りのメンバー。

サーニャ・V・リトヴァク中尉、ペリーヌ・クロステルマン中尉、ミーナ・デイトリンデ・ヴィルケ中佐、エイラ・イルマタル・ユーティライネン中尉、リネット・ビショップ曹長。

そしてストライクウィッチーズ主人公…宮藤 芳佳軍曹、が後からハンガーへやってきた。どうやら今回は全員で出撃しないとヤバい相手のようだ。

「行くぞ、全機出撃！！」

「了解！！」

坂本の号令の下、一斉に空へと飛び立つウィッチーズ。その後ろ姿を白いハンカチを振って見送った。

「さてと、それじゃ俺達はさっさと昼飯…」

「馬鹿、ここで待機だ」

「やっぱりッスか…あゝ腹減った」

「お前散々食ってただろ！いい加減にしろ！」

「イテッ！！……殴ったね、親父にもぶたれたことないのに！」

自分にしか分からないネタを披露した所で相手に通じる筈もなく。  
結果もう一度拳骨を頭にお見舞いされた。ジンジンと頭が痛い、触  
れば小さく膨れたタンコブが二つ…。

「……………」

ふと、出撃したウィッチ達が気になる。ここからでは見えないだろ  
うか？

「すみません、少し手洗いに行きたいんですけど」

「何！？…たく…40秒で戻ってきな！」

「……ジブリ？」

安藤から一応許可を貰いハンガーを後にする。トイレなんて勿論嘘、目指すは屋上…建物の頂上だ。

「ここからだと見えるかな…」

天使像の頭の上に乗る、出撃していった方向に視線を向ける。

「視力への強化、工程開始

」

強化を用いて五感の一つである視覚を強化する。

普段なら当たり前のように使用出来る強化魔術が、今では一回使うのに1分間も時間を費やしている。

これでは魔術入門者と変わらないぞ…。

「お、見えた」

1分後、ようやく強化魔術が発動し視力が強化される。

強化された視覚は通常の人間の何倍以上もの先の景色を映し出してくれた。

空を飛行するウィッチ達、手にした銃火器でネウロイを撃つ。

対し敵：超大型ネウロイ。全く堪えていない。

幾ら銃弾を浴びようと黒い装甲には傷一つ付いていない。固有魔法「怪力」を持つバルクホルンが両手にした銃火器MG42の銃身を持つ。

そして己の怪力と合わせ、本来握るグリップでネウロイのボディに叩き付けた。

銃をハンマーのように扱い敵を倒すバルクホルンの戦術、銃の耐久の方が心配だが壊れない所を見るとバルクホルンの怪力に耐えられる設計になっているのだろう。

が、それでもネウロイには効いていなかった。何事もなかったかのようにこの基地に向かって飛行し、ウィッチ達に強力なビームを撃ち放つ。

ウィッチ達の動きが鈍くなる、動揺しているのが丸分かりだ。敵に自分達の攻撃が効かない、ネウロイにこの基地への侵攻を許している。焦るのは無理も無い。

「こりゃ…まずいかな」

きっかり15秒、強化の効果が切れ視力も通常通りに戻る。同時に、強化なしでもネウロイの姿を肉眼で捉えることが出来た。

この基地も危ない、いつネウロイがビームを放って吹き飛ばやら…。

「仕方ない…」

本来関わるべきではないのだが…、状況が状況だ。見られたら質問攻めを受けるのは眼に見えている。バレないように、誰にも見られないように。

周囲への細心の注意を払いつつ、魔力回路を開放する。

「ソードサマナー「剣極の調」起動、製作及び空中展開、「ルーン」付加、工程開始」

あの距離ならここからでも充分に行き届く。だが、相手にただ剣を放つだけではウィッチ達と結果は同じ。だからこそ「ルーン」が自分にはある。

あの世界で学んだ内の一つ…「ルーン魔術」。「ソードサマナー剣極の調」によって創造した剣全てにルーン文字を刻み込む。

相手の装甲はウィッチの魔力を込めた銃弾やバルクホルンの怪力すら受け付けない、それ程強固な身体。ならば刻めばいい、如何に強固な装甲であろうと貫く、“貫通”という効力を発揮するルーンを。

剣の一つ一つにルーン文字を刻み込む。

「ぐっ

」

疲労感が身体に現れ始める。

やはり、不完全なこの状態だと相当の負担が掛かるようだ。只でさえ剣を製作するのに3分間の時間を費やすというのにそれに、今集中を解けば全て一からやり直しとなる。

この状態である時俺は完全に無防備、もしこの時を狙われたら確実に俺は絶命する。



「工程完了」

5分後、頭上に100本の剣が生まれる。、「ルーン」を付加しただけでその倍の時間…5分以上も時間を費やしてしまうとは…本当に悲しくなってくる。

「空中展開、現状態を維持、待機」

剣の全ての刀身…切先から根元まで掛けて蒼く刻まれたルーン。狙いを定め、ギリギリまでネウロイを引き寄せる。

「…今だ！待機解除、」ソードサマナー「剣極の調」…一斉掃射用意  
射撃シュート  
っ！！」

待機している剣達に命ずる。命じた剣は一斉に敵ネウロイへと向って放たれた。

宮藤 side

「くそっ！このままだとマズイぞ！！」

坂本さんの声がインカムを通して聞こえる。その声には焦りが孕んでいた。

無理もない、坂本さんだけじゃなく自分を含めて皆焦っている。

上空に現れた、過去大型クラスの巨大なネウロイ。全員で出撃するなんて久し振りだと思う。

「コイツ…なんて硬さだ！」

バルクホルンさんが口を開く。そう、このネウロイは今までに出遭ったことのないタイプだった。

幾ら私達が攻撃しても全く効いていない。坂本さんの烈風斬、ペリー又さんのトネール、リーネちゃんの射撃でもネウロイには傷一つ付けることが出来なかった。

ネウロイはゆっくりと、少しずつ、確実に、私達の基地へと向っていく。そしてビーム攻撃も絶えることなく放ってくる。

防戦一方、このままでは基地が危ない。基地には沢山の整備兵の人们がいる。

なんとしても守らないと...！

「おい！基地から何か飛んでくるぞ！」

シャーリーさんが不意に叫んだ。その言葉に皆が基地の方を向いた途端、白銀に煌く何かが勢いよく飛んできた。

「な、何だ！？」

「あれは……剣！？」

飛んできたのは沢山の剣。基地の方から突然沢山の剣が銃弾のように飛んできた。それは全部ネウロイの方へと向っていく。

そして、あれだけ攻撃しても傷一つ付かなかったボディを次々と貫通していく。

そして内の一本が坂本さんが言っていたコアのある場所を貫いた。

コアが碎け、ネウロイは白い破片となって四散する。その光景に誰

もが啞然とし、四散するネウロイの破片を眺めていた。

## Act 2：襲撃「壱」（後書き）

初、戦闘描写でした。

ルーン魔術は現在勉強中です。貫通の効果を付与と書きましたが…大丈夫かな。

ルーン魔術がカッコイイと言う理由から主人公に装備させてしまっただが…ハードルが高すぎたのかも知れない。

と、とまあこんな感じでした。

## Act 2：襲撃「貳」

目標の破壊を確認、ネウロイは白い破片となって海へと落ちていく。ウィッチ達も全員無事、ただその顔は皆啞然としていた。

まあそうだろう。いきなり剣が飛んできて、自分達が攻撃しても全く効いていなかったネウロイを難なく倒したのだから。

「さてと、バレル前にさっさとハンガーに戻るか」

約束の40秒をとうに超えているが、まあ大丈夫だろう。そそくさとハンガーへと戻った。

…疲れてるし今日は仕事したくないな。このままベッドで寝たい…。

ハンガーへ戻ると何処に行っていたと安藤に怒られ、本日三発目の拳骨をお見舞いされた。頭に三つのタンコブが出来上がる。

それから数分後、出撃していたウィッチ達が帰還してくる。

皆無事、怪我もなくストライカーユニットにも傷一つない。ただ、

ウィッチ達の表情は皆複雑そうな顔をしていた。

複雑そうな顔をしたまま、ウィッチ達はハンガーを後にする。  
それを見送った後、早速メンテナンス作業へと入った。

ウィッチ達がハンガーを後にする際、坂本と少しだけ眼が合った。  
何か言いたそうな顔をしていたが、すぐにハンガーを去っていった。  
そんな坂本に首を傾げながらも、ストライカーユニットと銃火器の  
整備に入った。

「うわ、この銃メチャクチャ重っ！！??」

その日の夜、滑走路に赴く。

「っ

」

ソードサマナー

「剣極の調」にて製作した二振りの剣を持ち、中空に向かって仮想の  
敵に斬りつける。

シャドーボクシングならぬ、シャドー剣術。

夜になると暇だ、あの世界にいた時はパソコンで夜遅くまでインターネットをしたり、徹夜でゲームをしてたりしていた。

が、この世界にはそんな娯楽はない。夜になると寝るか、それとも夜間哨戒に出るかの二つ。

夜間哨戒の方はサーニャ・V・リトヴァク中尉ぐらいか。

俺達整備兵も何人か夜勤で、いつウィッチ達が出撃してもいいようにハンガー付近で待機している。

俺はまだ新米という事で夜勤の仕事はないから有り難い。

「はっ

！ふっ

」！

剣を振るい続ける。と、海の波打つ音に交じり誰かの足音が聞こえてきた。

「ん？」

鍛錬を止め、足音が聞こえた方を振り向く。

「アンタは……」



「こ、こんな時間に鍛錬か？随分頑張ってるなお前」

そこにはあのムリダナ（・x・）      でお馴染み、エイラ・イルマタル・ユーティライネン少尉が立っていた。

なんです。思わず某運命と言う名のゲームに出てくる主人公の真似をしてしまった。

エイラ      s i d e

夕食後、ミーティングルーム      。

「それにしても、いったい何だったのかしら……」

中佐が真剣な面持ちで口を開いた。

今日の午後の出来事だ、全く攻撃が効かなかったネウロイを、突然飛んできた沢山の剣が斃した。それも基地の方角から。

「何故私達の攻撃が効かず、あの飛んできた剣はネウロイを貫くこ

とが出来たんだ？」

大尉の言葉はもつともだ。私達ウィッチの攻撃が効かない程硬度の機体をしていたと言うのに、飛んできた剣は難なく貫いていった。何であんな普通の剣がネウロイを斃せたのか、今でも不思議だ。

基地への被害は避けられたものの、釈然としない気持ちでいる。

「……………」

「?どうしたの少佐？」

先ほどから真剣な表情で考えている仕草を取っていた少佐に、中佐が尋ねる。皆の視線が少佐に向けられる。

暫くして、少佐がゆっくりと口を開いた。

「…あの時、基地の方を見たんだが…」

少佐の固有魔法は「魔眼」。遠距離の敵を捉えたり、ネウロイのコアを見つける力を持っている。

「この基地にある像の頂上、そこに一人の男がいた」

「男？」

「ああ、その男…この部隊の整備兵の服を纏っていた。顔は帽子で隠れて見えなかったが…」

少佐の言葉に一同がざわつく。まさか、男があの新ウロイを斃して私達を助けた？男って魔力を持たないんじゃないのか？

「リーネちゃん、男の人で魔力持つてる人だって！凄いよね！」

「そ、そうだね芳佳ちゃん」

興奮気味の宮藤、なんでそんな嬉しそうなんだ？リーネは男が苦手だから少し困惑している。

「やはり…彼が？」

「中佐？」

「……もし、少佐の言っている事が事実だとしたら」

「ああ、人類初：男性でありながら魔力を持った者がこの基地内にいる、ということだな」

「どうする？中佐？」

大尉が中佐に尋ねる。暫く考えた後、ゆっくりと口を開いた。

「そうね……。とりあえず明日、調査してみましょう」

明日一人ずつ聞き込みを開始するということを決まり、今日は解散となった。

男で魔法が使えるヤツ…か。まあ興味ないけどナ。でも、居たらいったいどんなヤツなんだろ…。

皆が解散した後、この場に残ったのは美緒と私だけとなった。

「ミーナ、少しいいか？」

「何かしら？」

「先の件、彼が…と言っていたが、誰が見当が付いているのか？」

「…そうね。見当が付いていると言えば付いているわ」

美緒の言う通り、男性でありながら魔力を持ち魔法が使える。

そんな人物に私は心当たりがあった。正確に言えばあの場にいたトゥルーデとフラウもある。

あの燃え盛るカールスラントの街で、トゥルーデの妹のクリスちゃんを助けた青年。

凄い速さで燃え盛る街を駆け抜け、落ちてくるネウロイの破片と燃え盛る炎の海からクリスちゃんを護りながら安全な場所まで避難させた。

私達はすぐさま彼の後を追った。彼がクリスちゃんを避難させた小

さな丘へと降り立つ。

クリスちゃんを助けた青年は倒れていた。

その横では目頭に涙を浮かべながら倒れている彼の身体を揺らし、必死に助けを求めているクリスちゃんの姿。

急いで救護班のいる所まで運ぼうとした。トゥルーデの妹を助けた恩人を死なす訳にはいかなかった。

けれど、私達はそこで信じられないものを目にした。倒れている彼の身体が徐々に光となって消えていく。

こんな現象今までに出遭ったことがない私達はどうする事も出来ず、ただ困惑とした表情で消えた彼を見ていた。

そして現在に至り…私は驚いた。扶桑から配属された整備兵の書類、その顔写真を見て…言葉を失った。

間違いない、あの時の彼だ。あの時の彼がこの基地へとやってきた。

しかしいざ出会ってみると、彼はカールスラントには行ったことはないと答えた。

様子からして嘘を言っているようにも見えなかった。  
けれども間違いない、今日のネウロイを撃墜したのも…数多の剣を  
放ったのも…恐らくは彼。

「明日、彼について聞き込みをしましょう」

「そいつは？」

「…儀國 雅史、先日配属された整備兵よ」

ミーナ エイラ side

その日の夜、何故か全く眠れなかった。

「うゝ…寝れない」

時刻は午後十時過ぎ。皆はとうに寝静まっているし、サーニヤも既に夜間哨戒任務に行っている。  
私だけが起きているこの状況…あまりにも退屈だ。

「…しよ〜がないな」

ベッドから起き上がり、いつもの服に着替える。こんな時は夜の散歩にでも行つて気を紛らわせるのがいい。夜の散歩なんて、どれぐらいしてなかったかな…。

夜の海岸沿いを歩く。聞こえてくるのは波打つ音と自分の足音。何となく滑走路に来ていた。と、そこで何かが視界に映った。

「ん？あれは…」

滑走路に居たのは一人の整備兵、こんな時間に何を

「工程完了」

突如、整備兵の両手に二本の剣が現れた。

「えっ！？」

思わず自分の眼を疑つて擦った。間違いない、確かにあの整備兵は今両手から剣を出した。



ふと、少佐の言葉が頭の中に甦る。

『人類初…男性でありながら魔力を持った者がこの基地内にいる、ということだな』

男で魔力を持つてる…じゃあ、アイツが？

「ふっ

！はっ

」！」

ソイツは両手にした剣を振るい始めた。少佐も朝早くからよく素振りをしている、けどアイツのは少佐とは全く違う。

滑らかで綺麗、まるでダンスをしているように魅入る動作。

けど、本当に目の前に敵がいるかのように真剣で…覇気のある一撃を繰り出す。

「……………」

もっと近くで見たい、この時私はそう思っていた。男なんてどうでもいい、そう思っている私が。剣を振るっているあの整備兵に興味を持っている。

少しずつ近付く。と、整備兵が動きを止め此方に振り返った。

「ん？…アンタは」

「こ、こんな時間に鍛錬か？随分頑張ってるなお前」

緊張しながらソイツに話しかけた。私らしくないな…なんで緊張してるんだ？そ、そりゃ男と話すなんて殆ど機会がなかったけど…。

「眠れないんで…暇つぶし程度ですよ」

そう言つてソイツはまた剣を振るいだした。近くで見れば見るほど魅入る何かがある。

近くに腰を下ろし暫く眺めていた後、私は聞いてみることにした。

「なあ…」

「…何か？」

剣を振り続けたまま、聞き返してくる。気にせず私は質問をした。

「お前さ…魔法、使えるのか？」

「…え？」

剣を振るっていたソイツの動きが止まる。やっぱり…コイツか。

「惚けるなよ、さつき剣を出したの見たぞ。あれ、お前の固有魔法だろ？それに昼間のネウロイを斃したのもお前なんじゃないのか？」

「…何をいきなり」

言うんだ？そう惚けようとしたのだろう。けど、先程まで振るっていた剣が光の粒となって両手から消えた。

やっぱりそうだ、あの剣はアイツの魔法によって作りだされた物。普通の剣ならこんな事は絶対に起きない。

「どうなんだ？」

「……………」

言い逃れ出来ない、そう観念したのかソイツは大きな溜息を吐いた  
後口を開いた。

「…やれやれ、やっぱり見られてたか。バレないようにしたつもり  
だったんだけど」

「お前…何者なんだ？なんで男なのに魔力が…魔法が使えるんだ？」

すると予想外の反応を示した。何を言っているんだコイツ、そう言  
わんばかりの顔を浮かべて私を見た。…何かムカついた。

「こっちの台詞だけだな。女しか魔力を持っていない、その考えは  
改めるべきだろ。」

魔力って言うのは誰しもが持っている物。男だから、女だからとか  
は関係ない」

「それ、どういう

」

「おっと、もうこんな時間か。そろそろ寝ないと」

そう言つてソイツはそそくさと去つていこうとする。思わず立ち上がつて引き止めようと手を伸ばす。

「…今はまだ、話すべきじゃないな。時が来たら必ず話す。だから…他の連中にはまだ黙つていてくれないか？」

それだけ言い残すと信じられない速さで滑走路から走り去つていった。あれも魔法による賜物なんだろうか…。

「…何だつたんだよ、アイツ……」

立ち去つていったアイツの背中を見送つた後、私も部屋へと戻つた。納得出来ない、まだまだ聞かないといけないことが沢山ある。

顔は覚えた、また明日会つた時にでも聞けばいい。そう思いながら服を着替えて再びベッドの中へと入つた。

今度は不思議と早く眠りに就くことが出来た。

**A c t 2：襲撃「弐」（後書き）**

A c t 2：襲撃「弐」です。

何度も思いますが…やはり書くという事は難しいですね…。

### Act3: 遭遇「志」(前書き)

Act3「志」です。今回はちょっぴり短い…です？

### Act 3：遭遇「壱」

翌朝、いつもの様に起きて食堂で朝食を摂る。

今朝はパンとスープ、サラダとハンバーグだった。朝から意外とボリュームあるな。

「頂きますつと」

焼きたてのパンに手を伸ばす。昔の俺なら絶対に朝はご飯と味噌汁、と言っていただろう。

ご飯とパンどっちが好きかと問われれば間違いなくご飯を選ぶ。

が、今更ながら、パンって意外と美味しいことを知った。パンも悪くない。

そんな、朝から豪華な朝食を堪能した。

朝食後、いつもの様にストライカーユニットの整備作業に入る。いつもと同じ、ストライカーユニットを解体してメンテナンスして再び組み立て直す。それだけで約三時間程度の時間が経過。

メンテナンスをしながら、今朝の出来事を思い出す。それは朝、安



藤に叩き起こされた時だった。

昨日と違って、ほんの少し身体が軽くなった気がしたのだ。気のせいだろう、最初はそう思っていた。だが、気になったから一度調べてみることにした。

身体機能：正常：但し性能は120%から73%に低下。

魔力回路：エラー。82%回路に異常発生。

CODE:SATAN

「煉獄の赤」：使用可能。但しエラーにより制限あり。

・ランク A++ランクからD++ランクに低下

・消費魔力増大

CODE:BLUE

「終焉の蒼」：術式工程時にエラー発生、よって使用不可。

CODE:EATER

「暴蝕の黒」：上記と同じくエラーにより使用不可能。

ソードサマー

「剣極の調」：使用可能。エラーにより制限あり。

・剣の製作可能 製作時間延長及び現界時間短縮。

・ランク AランクからD+ランクに低下。

・製作した剣による掃射可能 「ルーン」の付加可能。

・「ルーン」 使用時、通常製作時間より更に延長。

・強化：使用可能。但し効果は15秒、再度使用時には一分間の集中が必要。

・ルーン魔術：使用可能。

微々たるものだが、ほんの少しだけエラーが発生していた機能が回

復していた。

CODE:SATAN

「煉獄の赤」のランクと、剣のランクが少しだけ上がったのは嬉しい。

何で回復したのかは分からない。けれども嬉しいことに変わりはない、このまま一刻も早く完全回復してくれるのを願うばかりだ。

ストライカーユニットの整備が終われば今度は昼食タイム。

今日の昼食はパスタ、ペペロンチーノ…だろう。ガーリックスライスと赤唐辛子入ってるし。

味は言うまでもなく美味い、衣食住が揃っている。仕事も楽と言えば楽な方。

ウィッチ達のように訓練もなければ出撃する必要もない。仕事と言えば整備、整備、ひたすら整備。

退屈と言えば、まあ退屈だろう。けれども目立たないし文句は言うまい。

昨晚、まさかエイラに見られたとは予想外だった。

まあ言わないでくれって頼んだから多分大丈夫だとは思うが…。

「おい儀國、ミーナ中佐がお前を呼んでるぞ。早急に來い、だそう  
だ。お前…何かしたのか？」

…噂をすれば何とやら、か…。やっぱりエイラは喋ったんだろうか  
…。

呼び出しをくらい、早速質問が始まる。

目の前にはミーナ、左隣に坂本、右隣にバルクホルン。エイラの姿  
は見当たらなかった。

「それで、俺に何の用ですか？」

只ならぬ空気がこの場を支配していた。ミーナはとてもいい笑顔を  
浮かべているが、その裏では隊長としての覇気を感じる。

嘘が通じるかどうか…尤も、ここまで来たら嘘を貫く以外の選択肢  
はない。

「貴方に聞きたい事があるの。昨日、私達が出撃した後、貴方は何をしていたのかしら？」

「何をしていたって…そりゃハンガーで待機ですよ。

でも途中で腹痛に襲われて…それで我慢出来なくなっただから少しだけ抜けさせてもらいました。

勿論許可は貰いましたよ？」

一応安藤には嘘だがトイレに行くということは伝えてある。他の整備兵にも食べすぎだと言って笑われた。周囲がそう証言しているのだ、大丈夫だろう。

「そう、それは他の整備兵からも聞いているわ」

「ええ、情けない話、少しばかり食べ過ぎたようで…。以後気を付けます」

「…率直に聞くと、貴方は魔法が使える…そして昨日、ネウロイを撃墜したのも貴方じゃないかしら？」

「いやいや、ちょっと待って下さいよ。俺が？中佐たちを？今日はエイプリルフルじゃないですよ？」

ハッハッハと笑って誤魔化する。やっぱりエイラが言ったのか？

とりあえず、誤魔化し切る。これしかない。

「それに、俺は男ツスよ？男の俺が魔法使えるワケないじゃないツスカ」

「……………」

暫くの沈黙、ミーナは軽く息を吐くと口を開いた。

「……そう、それもそうね。ごめんなさいね、いきなり呼び出した  
りして」

「いえ、それじゃあ失礼します」

敬礼をミーナにし、部屋を後にする。

「ふう……」

思わず安堵の溜息が漏れる。何とか嘘を通し切ることが出来た。

エイラはやっぱりミーナに言ったのか…。

それにしてもヒヤヒヤさせてくれる…。普段は笑顔を作っているのにいざとなれば覇気ある態度で接してくるミーナは、やはり凄いらしいと言いだした。

「さてと、早く戻って昼飯の続きを…」

「あつ」

「ん？」

戻る途中、エイラと出会う。一人ではない、その横にはペリーヌ、宮藤、リーネ、ルツキー二もいる。

「……………」

「……………」

そのまま何も言わず、ただ通り過ぎる。エイラも特に感心を示さな  
いと言った表情で横切っていく。

「…今夜もまた剣の練習か？」

と、不意にエイラが尋ねてきた。首だけを振り向かせる。

エイラは背中を向けたまま、他のメンバーはエイラをジロジロと見ている。

大方、あのサーニャ一筋のエイラが…とか思っているんだろう。

此方も背中を向けたまま、エイラの質問に答えた。

「…気が向けば。退屈と感じたらまたしますよ」

それだけを言い、この場を後にする。

その後、宮藤やリーネがエイラに質問攻めしている楽しそうな声が後ろから聞こえていた。

その日の夜、またも滑走路にて鍛錬を行う。

「工程完了」

やることは昨日と一緒に。両手に剣を生み出す、後は時間切れになるまで剣を振るう、これだけだ。

多少機能が回復したとしても、やはり性能は昨日とほぼ変わらない。

剣を製作するのにも3分程時間があるし、1分したら綺麗さっぱり消滅する。

どうすればこの鬱陶しいエラーを取り除けるのか、それを考えながら次の剣の製作へと入る。

「やっぱり、今日も鍛錬か」

エイラが滑走路に姿を現す。昨晚と一緒にの場所に腰を下ろし、ぼんやりとした表情で眺めている。

「…何しに来たんだ？夜更かしは美容の敵だと思うぞ」

「べ、別にいいだろ…。なんとなくだ。そう、なんとなく…」



「…まあいいけどな」

剣の製作が終わる。それが終われば剣の鍛錬を再開させた。

「なあ、お前俺が魔法…魔術使えること言っただか？」

「はあ？言っていないぞ、だってお前が言うなって言っただじゃんか」

「…そうだったな、有難う」

「べ、別に礼なんて言われる覚えなんてないし」

今日は珍しく、俺が鍛錬が終わるまでエイラはずっと見ていた。

何度も帰って寝るように促したが本人は眠たくないと拒否。

結果最後まで居続けた。

何もしない、何も喋りかけてこない、ただジッと鍛錬している所を見るだけ。

何が面白いのか、エイラにとって俺の鍛錬など何も面白く無いと思うのに。

…明日もエイラはやってくるのだろうか、そんな事を考えながら今日という日を終えた。

### A c t 3：遭遇「壱」（後書き）

今回ちょっぴり短かったですかね…。

さて次回、A c t 3「弐」でオリジナル型ネウロイの登場とガチンコバトルの開幕です。

頑張って執筆していきたいと思います！すわっ！

Act3：遭遇「弐」（前書き）

いよいよ、オリジナルネウロイの登場です！

どうぞー！

## Act 3：遭遇「貳」

エイラ side

最近、どうも私は可笑しい。

久し振りに夜の散歩へと出掛けたのを切っ掛けに、アイツの存在が頭から離れない。

滑走路で出会った一人の整備兵、名前はまだ聞いてないから知らない。

この基地には沢山の整備兵がいる。けど、滅多に…それこそ全くと言っていい程会話をしない。

魔女は純潔を失うと魔力を失う、そう伝えられている。

だから純潔を護る為に、ウィッチとしての寿命を少しでも長く伸ばす為に。

必要最低限の会話しかこの基地では許されていない。

そうと分かっているのに、夜になると私は滑走路へと赴いてしまう。

毎晩アイツがいるかなんて分からないのに、今私がしているのは軍規違反なのに…。

それでも気になって足を運んでしまう私がいる。

そして、アイツは必ずそこにいる。両手に剣を持って鍛錬を行うアイツが。

相変わらずキレのある動きを見せてくれる。

最初の内はただ眺めて、暫くして帰った。でも最近だと……

「お前さ、いつから魔法使えるようになったんだ？」

「んゝ…今から大体四年前…15の時だったかな。

まああの頃は色々とあってな、それから使えるようになった」

「色々ってなんだよ…」

「色々は色々だ」

今では会話も交わしたりしている。初めて出会った時に言葉を交えてからは会話は一切なかったけど、今は私から話しかけてる事が多い。

アイツは剣を振るいながらの会話、それでも私の質問に答えてくれる。

はぐらかされる事が殆どだけ…。

私は最近可笑しい。サーニヤも大切だけど、今ではアイツの存在がサーニヤと同じぐらい大きな物となって気になっている。

サーニヤからも最近ぼんやりしていると心配させてしまった。

…私は最近可笑しい。今日の夜もアイツのことが気になって滑走路へと足を運ぶ。

今日こそは名前ぐらい聞いておこう、そう思いながらいつもの場所に腰を下ろした。

「今日も来たのか…。昼夜逆転の生活になってないか？ちゃんと充分な睡眠は取れてるのか？」

「五月蠅いな、余計なお世話だ」

今日もエイラがやってくる。ここ最近、ほぼ毎晩エイラは鍛錬場所  
にしているこの滑走路に足を運んでくる。

いつもと同じ場所に座り、いつもぼんやりとした表情で暫く眺めて  
帰る。

初めて出会った時以外、お互い会話を交えることはなかった。

剣を製作し、振るい、また新たに製作する自分。黙って見つめて暫  
くすると帰るエイラ。

けれども今では会話も交えたりしている。

と言っても、会話の殆どが俺に対する質問ばかりだ。

何故魔法が使えるのか、なんでこの基地に来たのか等。真実はまだ  
話していない、いつかは…話す時がくるだろう。

…正直な話、エイラがここにやってくる事が密かな楽しみでもあつ  
たりしている。

ストライクウィッチーズの中でエイラは一番好きなキャラクターだ  
ったりする。



好きなキャラクターと共にいる、絶対に実現不可能な事が可能となっている今。コミュニケーションを図っておきたいと思っている。

こんな経験、もう二度と味わえそうにない。

そして今日もまた、エイラがやってくる。

いつもと同じ場所に座り、ぼんやりとした表情で鍛錬を眺めた。

「工程開始

」

1分経過、手にしていた剣が消える。四度目の製作に

、

「ん？」

入ろうとして、その作業を中断させる。何処からか綺麗な歌声が聞こえてくる。

ぼんやりと眺めていたエイラも歌声に気付き、顔をそっちに向ける。

「ああ、この歌は中佐だな」

「中佐？ああ…なるほど」

エイラに言われて思い出した。ミーナは第一期で歌を唄うシーンがあった。

そして聞こえてくるこの歌、あのリリン・マルレーンだ。

やっぱり生で聞くと全然違う。とても綺麗で、ずっと聞いていたくなるような…それ程の素晴らしい歌声をしている。

エイラも歌が聞こえてくる砂浜の方をじっと見つめていた。

「綺麗な声だな…」

「そうだな…」

鍛錬を止め、ミーナの唄うリリン・マルレーンに耳を傾けていた。

その綺麗な歌声が突如悲鳴に変わる。

「今の悲鳴は!?!」

「行くぞ！」

砂浜の方へと走る。嫌な予感がする、一刻も早くミーナの元に急がないと……！

砂浜へと着く。

「な、何だアレ！？」

最初に口を開いたのはエイラだ。砂浜に二つの影、一つは先程までリリン・マルレーンを唄い、そして悲鳴を挙げたミーナ。

もう一つは見たことも無い物体。全身黒く、甲冑を纏った騎士と思わせるフォルム。

人間の形をしているがあれは人間では無い。黒い身体をした人間もどき。

アレが何者なのか…冷静になって考えれば誰だって分かる。

この世界はストライクウィッチーズの世界、そしてこの世界での敵は未知の存在…ネウロイ。

従って、ミーナの前にいるあの黒い騎士もどきは…

「ね、ネウロイか!？」

「だろうな…」

第一期より登場した人型ネウロイ。宮藤に自ら心臓…コアを見せコミュニケーションを図り、ウォーロックの存在を教えた。

ウィッチ型でなく、騎士型と言うのは初めて眼にする。

あんなネウロイ設定資料集やアニメには一切登場していない。

「つてまずい!」

騎士型ネウロイがゆっくりと手を振り翳す。手刀の形を作っている手から赤い刃が飛び出す。

ビームを放出するのではなく、あの様に形状を刃とするとは…。今までのネウロイとはレベルが違うことが理解出来た。

「中佐!!」

エイラが叫ぶ。その声に気付きミーナが此方を向いた。

「エイラさん!」

振り下ろされる赤い刃、肉を切り裂く音が静かに鳴り、砂浜に数多の血痕が付着する。

「イッテ…」

左腕から血が流れ出る。大きく皮膚を切り裂かれた左腕、焼かれている様な熱さと痛みが同時にやってくる。  
切断されてないだけマシ、痛むが動かせることは動かせる。

何とか間に合わせることが出来た。ミーナには傷一つない。

「……………」

右腕で抱き抱えているミーナの身体は少し震えている。

幾らストライクウィッチーズの隊長としてもまだ19歳の女性だ。それに、本来ならば戦場に出る必要なんてない。

それなのにネウロイがいるから…ウィッチの力を持っているが為に戦場に出て闘う。

誰しも戦場に出るといふ行為にはとてつもない恐怖を持つ。ミーナとて例外ではない。

「……逃げる」

今この状況下で闘えるのは俺だけ。だから、俺が護る。ミーナを…コイツ等を死にはさせない。

「えっ？」

「アイツと一緒に逃げる、ここは俺が引き受ける」

「な、何を言っているの！？それに私を庇って怪我を」

「こんなの日常茶飯事だったよ」

あの頃の俺はこんな傷よりも酷い傷を何度も負っていた。  
何度も死に掛けそうになり、その度に死の淵を這いずり上がってきた。

この程度の傷、擦り傷と変わらない。

…でもメチャクチャ痛い。

「ユーティライネン少尉！中佐を連れて早く行け！」

「お、お前はとうするんだよ！？」

「言っただろ？俺はお前達が充分逃げれるまでの時間稼ぎをする」

抱き抱えていたミーナを下ろし、背中を押してエイラの元へと向かわせる。

「し、死ぬ気かよ！？」

「なに、心配はいらない。それにいざって時、野郎は女を護らなきゃいけないんだよ。だから早く行け…！」

「だ、ダメよ！貴方を置いて逃げられるワケが…！！」

ミーナが渋る。分かっている筈だ、隊長として…今自分が何をすべきなのかを。

それでもミーナは冷静な判断が出せていない。

ミーナが冷静な判断が出来ないのは、あの忌まわしき過去を投影しているからか？

確かに、ミーナから見ればこの状況は最悪と言っていいだろう。満足に闘えない自分、左腕は動くものの傷を負っている。

武装もしていないしましてやウィッチでもない。ただの整備兵…。

が、あくまでそれは其方側の視点。

「グズグズするなこのバカ！！」

「ッ！？」



「お前はこの部隊の隊長だろうが！一方俺はただの整備兵だ、アンタと俺…この先どちらが生きるべきか。  
どちらが重要なのか俺が言わなくても分かるだろ！？」

「け、けど…！」

「……死なない」

「えっ…？」

「必ず生きてアンタ達の元に戻る。だから行け、約束は…必ず果たすのが俺なんだよ。アンタは…アンタ達は俺が護る」

「……………っ！」

「…ユーティライネン少尉ッ！！行けっ！！」

「…っ！絶対に…死ぬなよ！？」

エイラがミーナの手を引いてこの場から撤退する。砂浜を踏む二人分の足音が消えたのを確認し、改めて騎士型ネウロイを見据える。

「さてと…約束は果たさないとな」

### A c t 3：遭遇「弐」（後書き）

以上、オリジナルネウロイの登場でした。

何故このオリジナルネウロイを登場させたのかですが…それは次回のA c t 4にてご説明したいと思います。

そしていよいよ、初ガチンコ戦闘描写の回です！

…明日ぐらいに投稿出来るかな…。

以上、A c t 3「弐」でした！

## Act 4：魔術師（偽）「壱」（前書き）

いよいよ初ガチンコ戦闘描写の挑戦です！ご覧下さい、どうぞー！

## Act 4：魔術師（偽）「壱」

「工程開始

」

剣の製作に入る。3分後、一振りの剣が両手に製作される。

不思議なことに、製作している際騎士型ネウロイは一切攻撃してこなかった。

特撮物に登場する敵もヒーローが変身している時には絶対に攻撃しない、それがお約束。

ネウロイは知的生命体である事は知ってはいるが…、どうやら空気を読むという知識も兼備えているようだ。

右手に製作した剣を持つ。

左腕が負傷している状態では満足に二振りを操る事は出来ない。唯一無事であり満足に動く右だけが頼りだ。

「さてと…待たせたな」

剣の柄をしっかりと握り締め構える。対し、騎士型ネウロイも右手からビームブレードを出し、構えた。

どうやらかなりの剣術の腕前を持っているようだ。構えを見ていれば分かる。

あれは素人の構えではない。幾多の戦場を駆け抜け、剣を振るい、敵を倒し続けた者の構えだ。

元より油断をしてはいないが…余計に油断出来なくなった。

「……行くぞっ!!」

先手必勝。まずは小手調べ、手にした剣を袈裟に振るう。

金属音が鳴り響く。袈裟に振り下ろした剣は騎士型ネウロイのビームブレードによって防がれていた。鏝迫り合いには持ち込まず、雅史はすぐに剣を引いて間合いを取る。

とりあえず、何とかなりそうだ。雅史は心の中で安堵の息を漏らした。

ネウロイの主な攻撃方法は破壊力のあるビーム砲だ。

騎士型ネウロイがブレード状になっているのも元はあの赤いビーム通じるか否か不安だったが、防がれたことによってそれが証明された。

ビームであろうと、あれは普通の剣と変わらない。普通に打ち合える。

そうと分かれば安心して闘える。問題は時間。

剣を留めて置けるのは1分、それが過ぎれば剣は消滅する。

それにネウロイはコアを破壊しない限り何度でも修復する能力を保持している。

何処にコアがあるかある程度は思いつくものの、かなり難儀ではあ

る。

だがやるしかない。1分以内でケリを着ける。それを頭に置き、雅史は騎士型ネウロイに向って地を駆けた。

「はあああああああつ!!!」

「  
ツ!!!」

騎士型ネウロイが獣のような咆哮を上げ跳躍、落下速度を加えた唐竹が繰り出された。

剣を逆風に振るい迎え撃つ。ぶつかる剣とビームブレード、信じられない衝撃と力が剣に加わる。

「ぐっ…なんて馬鹿力なんだよ!」

ぶつかり合う度に剣が軋む。騎士型ネウロイの力と嵐の様な猛攻、エラーによる製作した剣のランクダウン。

防ぐのは良策ではない。それでは剣が耐え切れず粉々に破壊されてしまう。

だから防がず受け流す、そしてカウンターを狙うしかない。

「やれやれ…さっさとエラーなんかなくなってくれってんだ!!」

エイラ side

「ハア…ハア…!!」

中佐と一緒に走り続ける。最初は何度もアイツが居た方を振り返って見て、立ち止まりそうになった所を私が手を引いて走っていた。今は冷静な判断が下せる前に落ち着きを取り戻している。

アイツが命を賭けてまで逃がしてくれたから、私も中佐も生きている。けど、一人あの場所に残ったアイツが代わりに殺されてしまう…！

だから急いでハンガーへと向った。あそこならストライカーユニットも武器もある。この基地を護るのは、ネウロイを斃すのは私達ウイッチだ。だから…アイツ一人危険な目には合わせさせない。

「皆！」

ハンガーへ行くと、既に皆が集まっていた。

「ミーナ！サーニヤがこの基地内にネウロイがいるのを」



「ええ、分かってるわ！そして今…私とエイラさんを逃がす為に…  
たった一人で闘っている人がいるの！」

「何！？それはまさか」

「話は後、全機出撃準備！ネウロイは海岸沿いの方よ！」

「了解ッ！！」

中佐の指示の元、皆迅速に出撃準備に移る。私もストライカーユニットを装着して武装する。

これで満足に闘える。待ってるよな…私が、私達が行くまで死ぬんじゃないぞ  
！！

50合目の打ち合い。

未だに一撃を与えることも、与えられることもなく。ただ激しい打ち合いが続いている。

剣とビームブレードがぶつかり合う度に金属音を響かせ、激しく火花を散らす。

「ハア…ハア…」

雅史は焦っていた。残り時間までかなり少ない、恐らく20秒程度…或いはそれ以下か。  
いずれにせよ、このままでは負ける。

この騎士型ネウロイは自分の予想よりも遥かに強い。  
受け流してからのカウンターを叩き込もうとしたが、高い反応速度を以って避けられる。  
更に相手も受け流してからのカウンターを繰り出してきたのだ。

知的生命体であるとは言え、ここまで知能の高い…そして剣術の実力があるネウロイがいることに雅史は驚いた。

このネウロイは後にウィッチ達の最大の障害となるのは間違いない。  
何としても今、この場で仕留めなければ…！！

「……………」

雅史は構えを解いた。

剣の残り時間ももう数秒程度、次の剣を製作し打ち合う事は恐らくない。

そうなる前に自分が斬り伏せられている。

仮に出来たとしても結果は変わらない。

長期戦は此方が不利なのは分かりきっている。

…勝てる策が一つだけ残されている。これが成功しなければもう手はない、失敗は即ち死。  
だが…やるしかない。この程度のこと、何度もあの世界でしてきたでは無いか。

恐れるな、護るモノの為に力を振るえ、命を糧とし突き進め。  
。

「行くぞ…これがラストだ!!」

魔力回路を開放、「煉獄の赤」CODEE:SATANを起動

発動させる。

紅蓮の炎がネウロイへと放たれる。無論これが通用するとは思っていない、案の定放った炎はネウロイのビームブレードによって両断、左右へと別れ消滅する。

だが間合いを詰めれるだけの時間は稼げた。

後は渾身の一撃、一気に剣を唐竹に打ち落す

！

砕ける音が聞こえた。砕けた剣の破片が目の前を舞っている。  
その奥、ビームブレードで刺突を繰り返そうとしている騎士型ネウロイの姿が映った。

刹那、身体に衝撃が走る。同時に腹部に鋭い痛みが走る、誰が言うまでも無い…騎士型ネウロイのビームブレードが腹部を貫いたのだ。内蔵が損傷し、血が逆流し口から外へと吐き出される。口内に鉄の味が広がる…。

上空からは悲鳴、誰の物かは知らないがウィッチ達が…エイラ達が来たようだ。

「これ…で…いい!!」

突き刺さっている騎士型ネウロイの腕を掴む。

「エ…程…完了! うおおおおおおつ!!」

負傷している左腕を振り上げる。その手には剣が製作される。そして一気に騎士型ネウロイの心臓部へと剣を突き刺した。

自分に残されていた策はコレ。左腕は騎士型ネウロイに斬られ負傷、満足に動かせることは難しい。

だからこそ、この左腕を使った。満足に剣を振るうことは出来ないが、この一撃を出すぐらいのことは出来る。

剣は右手の剣が時間切れで消滅すると同時に製作するようにさせていた。

タイミングも完璧。そして右手だけで闘ったのも左手は使用出来ないと思わせる為。

全てはこの為の布石……！！

人型ネウロイのコアは心臓部にある。

突き刺した剣は完璧に騎士型ネウロイの心臓部を捉えている。

深々と突き刺さっている剣、赤い鮮血が勢いよく噴出す。

「えっ！？」

雅史は驚いた。ネウロイの身体を傷つけたら白い破片となる。それは何度も見ているから分かっている。

だが、この騎士型ネウロイは血を噴出した。

真っ赤な色と血の独特の臭いからして間違いない、これは……本物の血。

ネウロイが黒板を引っ掻いたかのような声を上げながら身体を突き飛ばした。

砂浜を数回転がり、何とか体勢を立て直す。

深々と突き刺さっている剣を引き抜き、騎士型ネウロイは咆哮を上げながら空へと上昇。

そのまま姿を煙のように消した。

「……………」

新たなネウロイとの遭遇。いや、そもそもあれは本当にネウロイだ

ったのか？

血を噴出すネウロイなんて見たことも聞いたこともない。  
ウォーロックのようにまた新しい軍事兵器か、それとも…。

新たな疑問がまた一つ増えた。

「……………」

だが、まあいい。謎が増えたものの結果としてこの基地を…皆を護れることが出来た。上空を見上げればこの隊の全ウィッチが飛んでいる。

皆啞然としている。まあ無理もないだろう。

「ぐ……………」

力が急速に抜けていく。視界が薄れ、だんだん眠たくなってくる。  
オマケになんだが寒い…。

慌てふためくウィッチ達の声が聞こえた様な気がしたが…それを確認する前に意識は深い闇の中へと落ちていった。

#### A c t 4：魔術師（偽）「壱」（後書き）

以上、初ガチンコ戦闘描写でした。

いやあ、メチャクチャ考えに考えました。その結果こんな感じになったんですけど…如何ですかねえ。

さて、後編の「弐」ではいよいよウィッチ全員との邂逅を果たします。

まだまだ頑張って執筆します、すわっ！！

Act 4：魔術師（偽）「貳」

頬を優しく撫でる心地のよい微風に…ふと、眼を覚ます。

最初に視界に入ったのは天井…ではなく、心配そうに顔を覗き込んでいるエイラとミーナの顔だった。

「あ、気が付いた！」

「よかった…」

目が覚めたことで、エイラとミーナの表情から心配が消え、安堵の笑みが浮んだ。

「…あれ？ここって……」

「ここは医務室よ。宮藤さんが貴方を治療した後、安藤さんにここまで運んでもらったの」

「お前三日間も眠りっぱなしだったんだぞ」



「…そうツスカ」

ベッドから上半身を起こし、身体の具合を確認する。  
手足はきちんと動く、騎士型ネウロイのビームブレードに突き刺された腹部には傷一つない。

宮藤の治癒魔法の凄さを身を以って知る事が出来た。

身体的には特に問題はなさそうだ。さて、中身の方は…

身体機能：正常…但し性能は120%から76%に低下。

魔力回路：エラー。68%回路に異常発生。

CODE::SATAN

「煉獄の赤」…使用可能。但しエラーにより制限あり。

・ランク D++ランクからC+ランクに回復。

・消費魔力量 エラー解消により消費量軽減。

CODE::BLUE

「終焉の蒼」…術式工程時にエラー発生、よって使用不可。

CODE::EATER

「暴蝕の黒」…上記と同じくエラーにより使用不可能。

ソードサマナー

「剣極の調」…使用可能。エラーにより制限あり。

・エラー解消により製作時間3分から1分に短縮。持続時間1分から5分に延長。

・D+ランクからC-ランクにまで回復。

・剣の掃射 可能。

- ・「ルーン」の付加 現状通り。
- ・「ルーン」使用時の製作時間、エラー解消により製作時間短縮。
- ・「強化」の効果時間、エラー解消により30秒に延長。再度使用時は一分の集中が必要。
- ・ルーン魔術、使用可能。

あの騎士型ネウロイとの戦いから、三日間の間で少しはエラーが解消してくれていた。

不完全でかなりの制限付きではあるものの、ある程度は力が使えるようになった。

「ソードサマナー剣極の調」による剣の製作時間が1分までに短縮してくれたこと、持続時間が5分にまで延長してくれたことはとても有り難い。

ランクも・付きではあるものの、Cランクにまで回復してくれている。

Cランクともなれば、今度はちょっとやさつとじゃ壊れはしない。

未だに蒼と黒の二つの炎を使用することは不可能だが、赤はある程度まで回復してくれている。

今度はより強力な炎を生み出すことが出来る。

「それにしても、三日間も寝ていたのか…。通りで」

腹が減っている筈だ。時計がないから分からないが、多分今昼前くらい。

起きて早々だが昼飯を食いに行こう。

「もう動いて大丈夫なのか？」

「…ええ。とりあえず飯でも食ってきます、腹減りましたから」

「それなら、私達の食堂に来なさい。今宮藤さんとリーネさんが昼食を作っているわ」

「いいんですか？で、昼食兼尋問タイム…ですか？」

「さあ？でも、貴方には色々と聞きたいことがあるわ」

ニツコリとスマイルを浮かべるミーナさん。笑みを浮かべているのにとてつもなく…怖いです。

お前に拒否権はないぞと、そう物語っている。

ここで拒否すれば後でどんな目に遭うか…。怖すぎで考えたくもな

い。

「了解ッス」

仕方なく首を縦に振った。俺だって命は惜しい。

ふとエイラを見ると、お前も大変ダナ…と言いたげな表情を浮かべていた。  
同情するなら助け舟を出してくれ、そんな思いを込めた眼差しを送る。

「ムリダナ（・x・）」

お馴染みのアレで速攻拒否された。

重苦しい空気が食堂に流れている。

「あ、あの…お口に合いませんか？」

宮藤が心配そうに尋ねて来る。

味は誰が言うまでもなく美味。昼食は肉じゃが、肉じゃがなんて食うのは何年振りだっただろう。

それに加えて、これ程美味しい肉じゃがは食ったことがない、そう断言していい。

「いや、物凄く美味しいデスヨ。ウン…ハハハ」

ただ…この場での食事でなければもっと味を堪能出来るのだが。

自分以外全員女性、そしてその全員の視線が突き刺さる。

なるべく顔を合わせないようにしているが、それでも尚視線は此方に向けられたまま。

ミーナは皆に一切注意しない。何故ならミーナも皆と同様…ずっと此方を見ているからだ。

普通そこは行儀悪いとか、料理が冷めるとか皆に注意すべきではないのか？

見世物じゃないぞ、と本来ならば怒鳴っている所だが生憎この中で  
は自分が一番下っ端。

そんな事を発現する権限もないし、何より勇気がない。

故に、楽しんで食事が出来る筈もなく。突き刺さる皆の視線に耐え  
ながら何とか肉じゃがを堪能した。

普段なら絶対にするお代わりも、この時ばかりはする気になれな  
った…。

重苦しい空間での昼食を終え、そそくさと整備業に戻ろうとして

「あら？何処に行くのかしら？」

「お前はコッチだ」

ブラックスマイルを浮かべるミーナに見つかり、怪力のバルクホル  
ンに襟を掴まれミーティングルームへと引き摺られていく…。

ミーティングルームでは既に他のメンバーが集っていた。

「立ち話もなんだ。とりあえず腰を下ろすといい」

「ウツス…」

とりあえず椅子に座る。昼食時の食堂同様、またも重苦しい空気が流れていた。

「さてと…お前には聞きたいことが幾つかある。私が言つまでもなく理解はしているだろうが…」

「何故魔法が使えるか？」

「そつだ。お前は男性でありながら我等ウィッチと同じく魔法が…魔法が使える」

「以前エイ……ユーティライネン少尉にも言つたが、魔女でなければ魔力を持たないって言う認識は改めるべきだと思う」

「？…どういうことだ？」

「…ちよつと失礼」

試しに坂本の手を握る。握るとは言っていないが、一応声掛けはした。

手を握られたことに若干驚き頬を赤くした坂本。

義理堅い軍人とは言え、やはり異性と触れることには恥ずかしいと感じるようだ。

そんな坂本の反応を可愛いと思い…ペリーヌにメチャクチャ睨まれる。が、無視。

手を握ったのは坂本の魔力回路を見る為、以前から気になっていたウィッチ達の魔力について。

二十歳を過ぎると魔力を失うというメカニズムについて、それが知りたかった。

擬似アクセスし坂本の魔力回路を調べる。

「……なんだコレ」

擬似アクセスして分かった。思わすなるほど…、と納得してしまう。



「ど、どうかしたのか？」

「……ちよい失礼」

「えっ！？こ、今度は私ですか？」

宮藤のも調べる。宮藤の家系は年齢が過ぎても魔法が使える家系、もしかしたら…。

「…やっぱり」

宮藤の手を離す。離れた際、なんか残念そうな顔をしていたのは…気のせいかな？

「ちょっと！いったい何をしているの！？」

「…こんな状態で闘ってたのか。そりや常に危ないしガタが来て魔力も尽きる筈だな」

「キイイイイイツ！貴方私を無視し

」

ペリーヌが吼える。でも無視する、うるさいから。

「…なんで二十歳を超えると魔力が失われるのか…その原因が分かった気がするよ」

その言葉に誰もが驚いた。吼えていたペリーヌも黙り込む。

「そ、それはどういうことだ!？」

「今…少佐の魔力回路を調べたら…」

「し、調べたら…どうなんだ!？」

「…いや、もうよそう。こんな話!」

「…」  
「…」  
「…」  
「…」

全員からのツツコミ。まさかあのサーニヤまでもがツツコミを入れるとは予想外だった。

新たな一面を見せてくれたサーニヤにご褒美のつもりで頭を撫でる。

すると気持ち良さそうに眼を細めた、使い魔も黒猫だけあり反応も猫のようだ。

「何故だ！？もったいぶらずに早く言え！」

バルクホルンが食って掛かる。

ド迫力のバルクホルンが視界一杯に映る、流石はカールスラント軍人のバルクホルン大尉。  
メチャクチャ怖いです。

「…どうしても言わないとダメか？」

「…どういう意味だ」

「…まあいずれは言わないとダメだろうし。でも信じるか信じないかはそっち次第…。」

後条件として、バレる以外で他の誰かに喋ることは絶対にしない、これが護れたらで…おk？」

全員が顔を見合わせる。そしてミーナが坂本に頷き、ゆっくりと口を開いた。

「…いいでしょう。その代わり、包み隠さず全てを話すことを…此方からも条件として提示します」

「元よりそのつもり。…さて、どこから話せばいいやら」

ある程度は包み隠さず、ミーナ達に話すことにした。

## Act 4：魔術師（偽）「貳」（後書き）

ようやく全員と邂逅させました…。まあ次話で更に深く、関わらせて行きたいと思います。

あ、オリジナルネウロイを出した理由ですけど…。まあ個人的な意見として、人型ネウロイとの戦闘ってなかったんですよね。

皆でつかい飛行機みたいなのばかりだったし。

そこで今作ではオリジナル…人型ネウロイを出して戦闘描写を書いて行こうと思った訳であります。

そんな訳で…すわっ！！

## Act 5：正体「巻」（前書き）

Act 5です。

いやあようやく全員との邂逅まで行き着きましたよ…。

## Act 5：正体「壱」

エイラ side

扶桑皇国出身、名前は儀國 雅史。年齢は19歳で私より3つ年上。

新米の整備兵としてここ、ストライクウィッチーズ基地に転属となった。これがアイツの…儀國 雅史の経歴。この場でようやく知ったアイツの名前。

な、なかなかカッコイイ名前してるな…顔もカッコイイし…。

そして…男性でありながら魔力を持ち魔法が使える存在でもある。少佐が言ったように、儀國 雅史という人間は人類初と言える。

何故魔法が使えるのか、その理由が今明らかに

「昔々あるところに、おじいさんとおばあさんが

「それ昔話じゃないですか!？」

…明らかに、

「よし分かった、話をしよう。あれは今から364000年前の出来事だったか…いや、昨日の出来事だったか…。まあイー ック（笑）」

「誰だよイー ックって!？」

……全然明らかにされない。

そんなおふざけが暫く続いて、中佐がブラックスマイル浮かべたら儀國は即座に本題へと入った。

「まあ扶桑の整備兵って言うのは、この世界での俺の役割らしい」

「この世界での…役割？」

「そう、正確に言えば俺はこの世界の人間じゃない。  
並行世界…別の次元に位置する地球から来た人間とでも言うておく」

…儀國の話はあまりにもスケールが大き過ぎた。



並行世界から来ましたなんて言われたって誰も信じない、私だってそんな話信じないぞ。

「おっと、質問コーナーはまだだ。で、俺の住む世界は2010年、ネウロイなんか居ないし戦争もない。  
日本…この世界で言う扶桑でのほほんと暮らしていた」

2010年って…随分と先だな。それにネウロイがいないって…本当かよ。

「はい、一旦質問コーナー入ります。質問のある方は元気な声で挙手の方を」

「ハイハイハッイツ!!」

ルッキーニが誰よりも早く手を上げる。何だかメチャクチャ楽しそうだな…。

「マサはどうして魔法が使えるの?」

「マサ?せめて最後まで言い切ってくれ。…厳密に言つと魔法じゃなくて魔術、まあ呼び方はどっちでもいいんだけど。  
世界魔術協会って所に入門して四年間ぐらいそこで頑張ったかな」

「私からも質問だ。その、魔力回路というのは何だ？教えてくれ、魔法力の消失についていったい何が分かった？」

少佐が土下座せんばりの勢いで儀國に尋ねる。

少佐はもう二十歳だ、二十歳になれば魔法力は失われる。

それでも少佐はまだ飛び続けなきゃいけない…前にそう中佐に言っていたのを聞いたことがある。

だから誰よりも必死に儀國に尋ねていた。

「やっぱり、それを知らずに魔法を使ってたんだな…」

魔力回路って言うのは魔力の生成に始まり、魔術を行使する為に必要な工程…習得した魔術の術式の選択及び形成、魔術の発現する機関だ。

でだ、坂本に限らず、宮藤を除くメンバー全員魔力回路の殆どが機能してない筈だ」

儀國曰く、インストールされているプログラムを起動させるパソコンみたいなものでもあるらしい。

…パソコンって何だ？

それに宮藤以外……てことは私も含まれてるんだよな。

「さっき坂本を調べたら魔力回路の殆どが機能してない状態なんだよ。

そんな状態で固有魔法と言う膨大なデータ量のプログラムを起動させるんだ……。

本来担う情報処理作業に更に余分な作業まで押し付けることになる。そんな事を続けてみる、いずれ回路自体がついていけなくなり結果ジャンクヤード行きだ」

少佐の質問に儀國は答える。

更に分かりやすく言えば人材不足で過重労働している人間が、やがて過労で倒れてしまうのと同じだという事。

そして宮藤の場合、さっき言った魔力回路がちゃんと働いているから二十歳を超えても魔力がある、と儀國は付け加えて言った。

「で、では！私も開いていない……作動してないその、魔力回路がちゃんと機能さえすれば……！？」

「ああ、魔力を失わないで済む。つか、アンタの魔力回路もう少

しでジャンクヤード行きだったぞ、間に合ってよかったな」

それを聞いた少佐の表情が明るくなった。

そして儀國の両肩を力強く掴み、後数cmで口と口が重なりかねない距離まで顔を近づけた。

中佐と大尉が顔を赤くしていた、そして私はイラッときていた。

「頼む！教えてくれ、どうすればその魔力回路を機能させる事が出来る！？」

「と、とりあえず顔近い…後肩痛い」

儀國が言って、少佐は慌てて両肩を掴んでいる手を離し顔を離れさせる。

それを見て私は安堵の息を漏らした。

「…………ん？」

思わず、自分の取った行動を思い返す。

少佐が儀國に顔を近づけたのを見て、何で私は苛立ったんだ？少佐

が儀國から離れたのを見て、何で私は安心したんだ？

自分でも分からない感情が沸々と心の奥底からやってくる。

この気持ちは何だ？私は…どうしたんだ？

「で、どうすればいい!？」

少佐の声で我に帰る。儀國は少佐に掴まれた肩を痛そうに擦りながら答えた。

「…方法は簡単。機能していない魔力回路に魔力を通して無理矢理作動させる。一度通してしまえば後は大丈夫だ」

「そ、そうか！礼を言っぞ儀國！」

「でもさ…それ、誰がやるんだ？」

シャーリーの言葉に誰もが頷いた。そんな高等なこと私達じゃ出来ないぞ。

そもそも魔力回路の擬似アクセスとか…以前に魔力回路っていう物自体知らなかったし。

他の皆も同じだろう。

そんななのに、一体誰が……

「って儀國が出来るだろ？」

そうだ、並行世界から来たという儀國なら出来るじゃないか。  
さっきだって少佐の魔力回路……に擬似アクセスとか言うのしたぐら  
いだし、それぐらい出来るだろ。

私の言葉に皆が儀國の方に視線を向ける。すると儀國は心底嫌そう  
な顔をし……

中佐のブラックスマイルによつて首を縦に振った。  
魔術が使える儀國でも、やっぱり中佐のあの笑みには勝てないら  
しい。

「でもさあ、今の俺エラーだらけなんだよ」

「エラー？」

「そうそう、何かこの世界に来た時何の因果か本来の力が出せない

状態にいるんだよ。そんな状態でやって失敗して魔力回路が壊れちゃいました、なんて可能性もある」

「…では、現時点では無理…ということか」

「もうちょい回復してからの方がいいかもね」

「そうか…ならば仕方ないな」

少佐が少し残念そうにした。けど直ぐにいつもの表情に戻り、儀國の肩を掴む。

「ではそのエラーが解消された時は是非頼むぞ！」

「えっ!?!」

「何だ、ダメなのか？」

「いや、まあダメじゃないけど…ねえ？」

「あ、それなら私も!?!」

シャーリーが手を挙げて言った。

「魔力回路つてのがちゃんと機能したらさ、もっと速度が出せるだろ!？」

「まあ出せるかって聞かれたら…出せるんじゃない？」

「じゃあ私もその魔力回路を早速作動させてくれよ」

「人の話聞いてたか？今やったら危険だって言っただけど俺は…。つーか俺面倒だからそろそろ帰りたいんですけど…つーかも帰らせてもらいます！」

信じられない速さでミーティングルームから逃げ出した儀國。  
追い掛けるシャーリーとルッキーニと大尉、面白そうと中尉も走って追い掛ける。

少佐も儀國を追いかけてミーティングルームを飛び出していった。  
その後ろ姿を中佐は苦笑いを浮かべながら微笑ましく見つめていた。

ペリー又は何かよく分からないけどブツブツと怒ってた。



多分少佐の手を握られたことが原因だと思う。でもどうでもいいから放置。

リーネと宮藤は今の状況をどうすればいいか困惑中。そして私は…

「エイラ？」

「…私も、ちょっと行ってくる」

「…じゃあ私も行く」

サーニヤと一緒に儀國を追い掛ける。

追い掛ける前、一旦部屋に戻って“アレ”を取りにいった。

## Act 5：正体「壱」（後書き）

Act 5「壱」でした。

魔力回路のシステムについてですけど…これはもう完全に夢幻遊戲の妄想による設定です。現段階ではこれで行きますよ。

…また修正するかも。ま、まあその時はよろしくお願いします！

あ、後どうでもいいことですけどタイトルの後につく「壱（弐）」は前編後編みたいな意味です。

それでは後編を頑張って書いてきます、すわっ！！

12/2 21：21分少し修正しました。

A c t 5 : 正体「弐」(前書き)

今回少し短いです。

## Act 5：正体「弐」

「ハア…なんでこうなるのかね」

自室にてベッドの上に寝転がり大きく溜息を吐く。

バルクホルン、ハルトマン、シャーリー、ルツキーニ、坂本の5名に追いかけれ何とか撒いて自室へと逃げ込んだ。

未だにあの5人は俺の事を探しているだろう。

坂本とシャーリー&ルツキーニは兎も角として、何故バルクホルンとハルトマンまで追いかけれなきやいけないのか不明だ。

「はあ…案外早くにバレたな」

とりあえずある程度の真実は話した。けど、肝心な部分はまだ話していない。

「言ったらショックのあまりぶっ壊れるかもしれないし…」

この世界はストライクウィッチーズと言う名の二次作品、架空の物として作られていること。

これを言ったらもう…全員啞然としてネウロイとの戦いに支障が出るかもしれない。

これは決して言わないようにしておこう…。

そんな時、ドアを数回ノックする音が聞こえ

、

「ここに居たか」

たと同時に扉が開きバルクホルンが入室、その後ろからはハルトマンも入ってきた。

「…なんでここにいて分かったんだ？」

ここに来るまでに誰にも見られないようにしたんだけど…。

「なに、勘だ」

勘でここを一発で当てるとかどんだけですか、バルクホルン大尉さん。

「それよりも、お前に聞きたいことがある。以前、お前はカールスラントで小さな女の子を助けなかったか？」

「女の子？んゝ……あつ、もしかしてアレかなあ？」

過去の記憶を呼び戻す。脳裏に映し出される映像、この世界へと来る前の出来事が鮮明に甦る。

今思い返せば、あの燃え盛る街はカールスラントじゃないか。それにあの助けた女の子は…バルクホルンの妹のクリス。

アニメ本編、第一期ではバルクホルンが斃したネウロイの破片により意識を失い、病院で治療を受けていた。それでバルクホルンは給料の全てを妹の治療費に回し、宮藤に妹の面影を重ねて見ていた。

結果意識を取り戻すんだけど…俺がそのフラグをぶち壊した？

「やはりそうか！」

バルクホルンはいきなり俺の手を取ると強く握り締め頭を下げた。

「妹を…クリスを助けてくれて感謝する！」

万力によって手が圧縮される。なんか耳と尻尾が出てるし、固有魔法の怪力が無意識に出ちゃってるな。

「って手ッ！！潰れる、潰れるから！！！！」

「えっ？あ、ああ！すまない！」

バルクホルンの怪力から解放され、赤くなった手をヒラヒラと振る。熱が手全体に広がりおまけに痺れる。暫くは満足に握れそうにない。

「すまない…お前には悪い事をした」

「いやいや、いいッスよ別に…ハハハ」

「この世界に来る前に一度カールスラントに来てたんだ。でも…何で？」

「そりゃ俺が知りたい」

誰よりもその事については俺が一番知りたい。

何故この世界へと…整備兵としているのか、ハルトマンが言うように何故カールスラントに居たのか…。

カールスラントに居たのは…まあ妹のクリスが助かったからいいでしょう。

「それと…お前に少し頼みがある」

「頼み？」

「お前の言うエラーが解消されてからで構わない。私も…魔力回路と言うのを開いてくれないか？」

真剣な眼差しでバルクホルンが尋ねてきた。

「あの時はお前が居てくれたお陰で妹は…クリスは助かった。だが、あの時のようなことは二度としたくない。その為にも力が必要だ。

だから…儀國！頼む、私の魔力回路を開いてくれ」

「……………」



「見つけた」

「ここに居たのか」

今度はダウジングを手にしたエイラとサーニヤが登場。何故に？

「…ハア、お前達は何しに来たんだ？」

「わ、私はだな…その…アレだ。私も魔力回

」

「おい儀國、お前またミーナ中佐に呼ばれてるぞ。お前本当に何やらかしたんだ？」

三人目の来訪者、安藤が伝言をしにやってきた。

バルクホルンとエイラ、サーニヤの姿を見るや否や、慌てて敬礼し部屋を出て行った。

今度はいったい何の用だ？まあ、ある程度は検討がつくけど…。

場所は再びミーティングルーム。行くのを渋っていたらバルクホルンと後から合流したシャーリー達によって引き摺られ、ミーティングルームに赴く。

正面には坂本とミーナ、出入り口の方はバルクホルンとシャーリーによって固められている。今度は逃がさんと眼で訴えるバルクホルンと、不適な笑みを浮かべるシャーリー。

「で、何の用スか？」

「これからの貴方の処遇についてよ」

「処遇？ああ、出て行けとかそっち方面ですか」

「違います。明日を以って整備兵を改め、私達ウィッチ同様“ウィザード”として務めてもらいます」

やっぱりか…、そう心の中で呟いた。

「嫌ですよ、俺の役割は整備兵。それ以上逸脱したことはしたくないです」

「何を言っている。お前のその力、使わずにしてどうする？」

「…ぶっちゃけ面倒なんですけど」

「面倒だと！？情けない、貴様それでも扶桑皇国の軍人」

「じゃないぞ、俺は至って普通…じゃないけど大学生だったんだよ。おk？」

うつ…と言葉を詰まらせるバルクホルン。何度も言うが俺はこの世界で整備兵という役割を与えられただけで、本当なら大学生活をのほほんと満喫している最中だ。

魔術師だからと言って、毎日がアスレチックな生活を望んでいるわけじゃない。

「それじゃあ貴方に聞くわ。あの時、貴方はこう言ったわよね？アンタは…アンタ達は俺が護るって」

「あれ？そんな事言っただけ俺」

「……………」

「嘘ですスイマセン、言いました確かに、認めます」

やはりミーナの怖さは尋常ではない。あの眼に睨まれたが最後、白旗振って降伏したくなる。それぐらいにミーナは怖い。

確かに言っただのは言った。でもアレは隊長格を失わない為の台詞であって深い意味は何もない。

「それじゃ、是非護ってもらおうかしらね。あの時、本当に嬉しかった…。それに、またあのネウロイが出たら私…怖いわ」

ヨヨヨ、と泣く真似をするミーナ。ミーナってこんなキャラクターだっけ？

後、棒読み&下手くそな演技有難う御座います。そんな思いをこの一言に乗せて…。

「バルス」

「……………」

「…失礼しました」

バルスって意味分かってんのか？それとも本能的に馬鹿にされてるって気付いたんだろうか。

「じゃ、護ってくれるわよね？」

「…OK、BOSS」

こうしてミーナのブラックスマイルの前に平伏した俺は渋々引き受けることにした。

整備兵としてのあの楽しかった日常は…もう二度とやってこないだろう。

これから先、俺はどうしていけばいいのやら…。

「それじゃあよろしくね、儀國 雅史さん」

「……………はい」

「うむ、これからよろしく頼むぞ儀國！ハッハッハッハ！」

もっさんの笑い声が今はメチャクチャウザく感じた。

**A c t 5：正体「忒」（後書き）**

以上A c t 5でした。

いよいよウィッチ達との本格的な関わりがスタートします…する予定です。

どうしようかな…まあそんな訳です。次話に乞うご期待。

すわっ！！

## Act 6：新生活「巻」(前書き)

Act 6です、今回もちよつと短いです。



## Act 6：新生活「壱」

起床時間を知らせるラッパの音色で目が覚める。

「朝か…」

身体を起こし欠伸を噛み殺しながら身支度を整える。

クローゼットを開く、ハンガーに掛かっている二種類の服。

一つは整備兵としての作業服。

もう一つは自分が所持していた私服、クローゼットを開くと何故か何着かあった。お気に入りの白のレザージャケットもある。本当ならばこれに着たいところだが…。

ミーナのあのブラックスマイルが脳裏に甦る。休日のに絶対に着てやると誓い、とりあえず置いておくことにした。

いつもの服装である整備兵の服に手を伸ばす。今日から形は整備兵だが、実質はウィッチ達と同じウィザードとして務めることになった。

立場的には元と変わりない。だが、ウィザードとしてウィッチ隊に配属されてからは宮藤の後輩となった。

宮藤は自分に後輩が出来たと喜んでいた、そんな宮藤に誰もが笑みを浮かべて暖かく見守っていた。

そんなことよりも…そんなに後輩が出来ることが嬉しかったのか？

「ハア……」

一応ミーナや坂本は自分の上司、この基地に居る以上は上司の命令には従うしかない。

大きな溜息を吐いた後、整備兵の服装に着替えて部屋を後にした。

昨晚を以って俺はウィッチならぬウィザードとして務めることとなった。それは安藤達にもミーナから伝わっていたようで、朝の食堂では質問攻めを受けた。

それが終わり次第、早速自室へと向う。一先ず、自分ができることを行うことにした。

坂本に訓練を誘われたが面倒だと拒否、後で宮藤に訓練に参加しないとダメだと早速先輩面してきたので「煉獄の赤」CODE: SATANを発動させ、脅して撤退させる。

顔面スレスレに炎を放ったら慌てて逃げていった。それを宮藤がミーナにチクリ、ブラックスマイルを浮かべて無闇に魔術を使うなど怒られた。

ミーナに怒られたが俺は悪くない、調子に乗った宮藤が悪いのだ。

一方で、私もそれを教えてくれと坂本に頼まれた。その時のミーナはやはりブラックスマイル、笑みを浮かべているが全く笑っていない。

流石の坂本もこれには恐怖を感じたのか、咳払いした後そそくさと訓練へと向った。

「よし出来た、これでいいだろう」

手にした弾丸を見て一息つく。

弾丸にルーン文字を刻んでいた。先のネウロイのように装甲が固い

相手にでも通用するように、かつて自身の剣に刻んだ 貫通 の効力を現すルーンを一発、一発に刻んでいく。

と言っても、全員分ではない。流石に疲れるし面倒だ。だからリーネにのみこの作業を行うことにした。

リーネの所持する5連発ボルトアクション型、ボーイズMk1対装甲ライフル。

55口径の弾丸を使用する分反動は凄いが、その分威力は期待できる。

尤も、リーネは魔法により反動を無効化しているから関係ない話だが…。

だからこそ弾丸にルーンを施していた。何より装弾数が少ないのが主な理由であつたりする。流石に何千発という銃弾にルーン文字を刻むという作業はしたくない。

一先ず十発分、ルーン文字を刻み終えた。後はリーネの固有魔法で魔法力が付加された際自動的に発動する。これならば再びあの硬い装甲のネウロイが現れても大丈夫だろう。

……多分、いやきつと大丈夫！

な筈。

「よし、届けに行くか」

後はこれを本人に手渡し、説明するだけ。ルーンを刻み終えた弾丸をマガジンに装填し、部屋を後にした。

滑走路へと赴く。そこでは大きく息を切らした宮藤とリーネが地面に寝転がり、そんな二人を見据えている鬼教官と化した坂本の姿があった。

「今訓練が一段落ついたって感じだな」

「ハア…ハア…あ、儀……國さん」

「バテバテだな宮藤、お前はスタミナをもっとつけろ。それよりもリネット」

「は、はい!？」

名前を呼ぶと慌てて起き上がった。男性が苦手なのは分かるが、幾らなんでも緊張し過ぎだ、顔色は悪いし手が震えている。

「落ち着け、お前に渡したいものが」

「渡したい物！？ら。ラブレターですか！？そんなダメです！わ、私」

「」

熱暴走しているリーネの頭に手刀を落とす。はにゃっ、と情け無い声を出しようやく冷静さを取り戻した。

「違う、渡したいのはこれだ」

目的の物をリーネに渡す。リーネは眼を丸くしてキョトンとしていた。

「えっと…弾倉……ですか？ラブレターじゃなくて？」

「そう、ラブレターじゃなくて弾倉だ」

からかうと面倒になりそうだから止めて、今は本題のみをリーネに話す。

「ちょっとオプションを付け加えさせてもらった、ホレ」

予めポケットに入れていた弾丸を取り出し、リーネに見せる。

「あれ？リーネちゃん、弾に何か刻んである」

「ほう、これは確か、ルーン文字…と言ったものだな」

「そうだ。前に装甲が硬いネウロイが現れただろ？対ソレ用の特殊な弾丸だ、敵の防御を無効化するルーンを刻んでおいた。魔法力を付加するとルーンが発動するシステムになってる、これで大丈夫だろう。」

「あ、有難う御座います…儀國さん」

「気にするな。それと、どうやらリネット・ビショップ曹長どのは特性弾丸よりもラブレターの方が御所望のようで。今度熱の籠ったものを送らせてもらうとするかな」

「／／／／ツ！！！！？？？」

本題を話したので、冗談でリーネをからかう。

途端に顔を真っ赤にし、煙を昇らせるリーネ。比喻ではなく、本当に顔から煙を出している。マンガみたいな現象、本当に出来たんだな…。

「さてと、それじゃ用事が済んだから俺はこれで」

「待て儀國、実は私もお前に頼みたいことが」

「だが断わる」

坂本の願いを速攻で拒否。どうせ坂本が言う事など決まっている。

「まだ何も言っていないぞ」

「私にも魔術を教えろ…とかじゃないの？」



「そうだ、分かっているじゃないか。ハッハッハ！」

「…だが断わる」

「何故だ!？」

「面倒だから。それに、教えるといつても一〜二週間で習得出来ないぞ?」

「そ、そうなのか?」

「そうだ。才能とかもあるけど…坂本の場合半年ぐらい掛かるんじゃない?」

「何だと!？」

魔術を何だと思ってるんだ、このもっさんは。そんなちょっと学んだから完璧に出来るようになりました、なんて馬鹿な話あるわけがない。魔術ナメるな。

魔術師としての才能や血統によって左右はされるが、少なくとも一

つのカテゴリーを習得するのに一ヶ月以上は掛かるし、酷い場合は半年以上は掛かる。

俺の場合強化やルーンは二週間ぐらいで習得することが出来た。

錬想術：「ソードサマー剣極の調」は約半年ぐらい。

CODE...SATAN

「煉獄の赤」と名付けた炎は、魔力回路の存在を知ってから直ぐに出来た。

理由は俺も未だに分かっていない、ただなんとなくで…感覚で使えた。

CODE...BLUE

CODE...EATER

「終焉の蒼」と「暴蝕の黒」は計三年程の月日が掛かった。

それでも“ババア”曰く、短期間の内にここまで習得する方が奇蹟だと言われた。

「そういうこと。それに俺は教えるのが下手だし…何より…坂本は今自重してろ」

「クッ……」

「いいだろ、調子戻ったら魔力回路直してやるんだからそれで我慢しなさい。」

それと、暫くは魔力行使：烈風丸を使うのは避けるよ。  
ジャンクヤード行った物はもう直せないからな。それじゃ」

ヒラヒラと手を振りながら俺はその場を後にした。

オロオロとする宮藤、熱暴走し今だに顔を赤くしたまま煙を上げて  
いるリーネ、悔しがる坂本、三人が織り成す混沌な状況を残して…。

## Act 6：新生活「壱」（後書き）

Act 6「壱」でした。今週の更新はこれが最後です。

次話は来週の…水〰金辺りで投稿したいと思います。

では皆様、その日まで…すわっ！！

あ、そうそう。主人公の他にもオリキャラ登場させますよ（予定）  
。でもまだまだ先の話なんで、あしからず。

Act 6：新生活「弐」（前書き）

小説投稿出来ちゃいました。

## Act 6：新生活「貳」

滑走路を後にした後、特にやることもないから基地内を適当に歩いていた。

本当に特にやることなし、やることが見つからない。整備業に戻りたいところだが、自分はもう整備兵ではない。

ウィッチ同様ネウロイと闘うウィザードという役目を負わされてしまった。

どうやって闘えと言うのだ？ウィッチはストライカーユニットがあるが、自分は持っていない。

空を飛ぶ術を持っていないのだ。そんな状態でどうやって闘えと？

仮にストライカーユニットがあつたとしても…丁重にお断りさせてもらおう。

半ズボンはまあ我慢できると言えば我慢出来る。

問題は使い魔だ。ストライカーユニットを装着…及び固有魔法を使用すると、自分の契約した使い魔の耳と尻尾が生える。

仮に自分の使い魔が犬系統だったでしょう。

ストライカーユニットを装備し、獣耳と尻尾が生えてくる自分の姿を想像してみる。

「…うえ、やっぱりダメだ」

想像しただけで嘔気が起きた。脳裏に思い描いた仮の自分の姿を消し、深く深呼吸する。

そして改めて、ストライカーユニットを装着して闘わないと、固く誓った。

「あ、儀國だ」

エイラの声に足を止める。原っぱに寝転がり、その上に置いたタロットカードを見つめていた。

「こんな場所でタロット占いか？」

「まあな、ここで占うのが好きなんだ」

「ふん…」

「そうだ、折角だから占ってやるよ」

「いや、いい」

占いなんてものは信じない性分だ。エイラがしているタロット占いに始まり、星座占いから血液型占いまで、どの占いにも一度として当たったことがない。

かと言って占い師に見てもらっても結局ハズレばかり。だから占いなんてものを信じるのは止めた。

占いなんかには頼らなくても、自分が進むべき道は自分で見つけて切り開いていく。

「そ、そっか……」

占いを断わるとエイラは少し残念そうな顔を浮かべた。

意外だった。エイラのことだから断わるとふぐん、と言った程度に済ませると思っていたのに。

「…いや、やっぱり気が変わった。頼んでいいか？」

「そ、そうか！仕方ないな、それじゃあ占ってやるか」



占いを頼んだ途端元気になるエイラ。一先ず元気を取り戻したので安心した。

「それじゃあ何を占う？」

「うゝん、テーマか……」

これと言って占って欲しいことはないんだけど……適当でいいか。

「じゃあ恋愛系統で」

「れ、恋愛！？ほ、他にあるだろ！？」

いきなり顔を赤くし怒るエイラ。自分から聞いておいてそれはないのでは？

「いいだろ別に。恋愛だ恋愛」

「うゝ、うゝ…分かったよ。まったくしょうがないな」

ブチブチと文句を言いながらも占いを始めるエイラ。占っている時  
眼は真剣だ、真剣なんだが…未だにブチブチと文句を言い続けている。  
る。

「じゃ、結果を見るぞ」

不機嫌な感じでエイラが言ってくる。

生命の樹形式で置かれた九つのカードが展開され

「あ、いたいた!」

「おゝい雅史」

突如乱入してきたシャーリーとルッキーニによってカードは蹴飛ば  
された。

「なっ!?!」

「なんだよルッキーニ」

「ねえねえ！私にも魔術教えてよ！」

「だが断わる。この儀國 雅史が最も好きな事の一つは、魔術を教えると言ってくるヤツに「NO」と言って断わってやる事だ…」

「なんだよそれ、性格悪いな。いいだろ？別に減るもんじゃないんだしさあ、何かこう、もっと速度が出るような魔術教えてくれたっていいだろ」

だんだん面倒になってきた。しつこく言ってくるシャーリーとルツキーニ、占いも結果を見る前に終わった。別に興味はなかったからいいけど…。

エイラはプルプルと身体を震わせながら、蹴飛ばされ散らばったタロットカードを見ている。

「お、お前らー！！！」

遂にエイラの怒りが爆発。立ち上がり二人を追い掛ける。

「わゝ怒ったゝ！」

「につげろー!!」

二人は笑いながら逃げていく。エイラが怒ったのも二人にしてみれば面白いことなんだろう。

それにしても、シャーリーとルツキー二は本当に仲がいいな。まさに姉妹と言っても過言じゃない。

「まったく！何なんだよアイツらは！折角人が儀國と」

「まあそう怒るな。占いなんてものはいつだって出来る。今日はあの二人に乱されたから止めておくとして…。また今度頼む」

「…分かったよ。ハア……」

深い溜息を吐き、散らばったタロットカードを拾い集めるエイラ。一緒にタロットカードを拾うのを手伝った後、また当てもなくブラブラと基地内を歩き出した。

その日の夜、いつもの様に鍛錬を行っていた。今日は気分転換も兼ねていつもの滑走路ではなく、あの騎士型ネウロイと剣を交えた砂浜。

「工程完了っ」と

1分、二振りの剣が現れる。剣を作るのにまだ1分という時間を必要とするが、これでも大分楽になった方だ。現界させておける時間も5分へと延びた、これで少しぐらい闘いが長引いても問題は無い。

しかし、もしかまたあの騎士型ネウロイと剣を交える時が来た時…やはり速攻戦で攻めなければならない。あのネウロイは自分が知るネウロイの中では異常過ぎる存在だ。

ビームをブレード状にし、心臓部を貫いたにも関わらず生きている。そして何より…赤い血を噴出させたことも。

謎が多い存在であるが故、早急に斃した方がいい。こんな時に肝心の二つの炎が使えないことと、通常の炎ですら本来の力を発揮出来ないことが痛い。

次合間見えた時、この状態で勝てるかどうか…。

「ふっ

！」

手にした剣を振るう。とりあえず、今は訓練に集中する。

ふと、エイラのことが脳裏に過ぎった。今日も滑走路へと来るのだろうか？しかし今日は滑走路で訓練をしていない。その事は勿論エイラは知らない筈…。

「…やっぱり滑走路に戻って訓練した方

ッ！！」

気配を感じ、岩場に向って剣を投擲する。岩に突き刺さる剣、その岩の陰から何者かが姿を現す。

「誰だ！？」

「わ、私です！」

「あ、なんだ中佐か」

慌てて出てきたのはミーナだった。

「なんで中佐がここに？」

「それはこっちの台詞です。貴方はこんな時間に何を？」

「何って…鍛錬、後眠れないから。そっちは？」

岩に突き刺さった剣を引き抜き、ミーナに尋ねる。

「私は…散歩よ。貴方と同じ、少し眠れなかったから」

「早く寝た方がいい、夜更かしは美容の敵だし」

「ふふ、そうね」

そう言って宿舎へと戻る  
して此方を見つめた。

かと思えば、手頃な岩に腰を下ろ

…エイラの時もこんな感じだった気がする。

「…帰るんじゃない？」

「帰っても寝れないのなら意味無いでしょ？眠気が来るまで、ここに居るわ」

「そ、そうか…」

まあ別にいい。ミーナが何処に居ようと俺には関係ない。俺は俺の事をするだけ、精神を集中させ鍛錬を再開させる。

「工程開始」

「

5分が過ぎ、新たに剣の製作に入る。そして1分後、新たに製作した双剣を持って再び中空に仮想の敵を描き、剣を振るう。

「……………」

剣を振るいながら、度々ミーナの方を横見する。ミーナは相変わらず岩に腰を下ろしてジッと見ていた。その顔は優しい顔を浮かべているが、何処か悲しい顔をしていた。



一時間ほどして鍛錬を終了する。と同時にミーナも腰を上げる。

「さてと、私もそろそろ眠るわ。おやすみなさい」

「ああ……」

ミーナが宿舎の方へと帰っていく。と、途中で足を止めた。

「ねえ……」

背を向けたまま、ミーナが話しかけてきた。

「何か？」

「貴方は……いえ、何でもないわ」

気になる様子を見せて、ミーナは再び宿舎の方へと歩いていく。もう足を止めず、そのまま真っ直ぐ帰っていった。

「……何だったんだ？」

ミナナの行動に疑問を感じながら、自分も兵舎の方へと帰った。

## Act 6：新生活「弐」（後書き）

どうも。前話で次の更新は水／金曜の辺り…って書きましたけど今日の投稿出来るので投稿しましたw。

次話こそ、水／金曜日間に投稿すると思います。すわっ！！

Act7：平穩「巻」（前書き）

Act7「巻」です、遅くなつてすいませんです！

## Act 7：平穩「壱」

静かな海岸、そこで鋭い風切り音と共に白銀の一閃が打ち落とす。

それを迎え撃つは二つの白銀の一閃。交差する形で打ち落された一閃を力により押し返す。

「くっ

！！」

扶桑刀を構えた坂本が僅かに顔を歪めた。

扶桑刀の柄を握っている両手が痺れる、そして目の前には双剣を携え向ってくる儀國の姿が。

「はっ

！！」

右、左と連続して斬撃が飛んでくる。その一撃一撃はとても重く、扶桑刀で防いだとしてもその衝撃は凄まじい。現にこうして、手が痺れている。

外観的に見れば、儀國の筋肉量は普通。土方等と同じぐらいか…あるいはそれより少し上と言ったところ。

しかし、その身体から繰り出されるとは思い難い一撃を放ってくる、しかも連続でだ。

途切れない連撃、それは流水の如く私へと襲い掛かってくる。

防戦一方、私に攻撃させてくれるチャンスは与えてくれないらしい。

「ハア…ハア…ハア…」

「どうした？もうバテバテか？」

そしてスタミナの差。開始してから早一分弱、既に私の呼吸は乱れているというのに、儀國は一切息を切らしていない。平然とした態度で私に切先を向けて見据えている。

これが魔術師…儀國 雅史の力。

「　　」

坂本は何とか呼吸を整え、改めて手にした扶桑刀を構え直す。

と、そこで起床時間を知らせるラッパの音が基地より流れてきた。

「　　と、もうこんな時間か。早いもんだな」

基地の方へと視線を移す儀國。儀國からは既に闘志は消えていて、また構えも解いていた。それに伴い、両手にしていた剣が小さな光の粒となって儀國の手より消滅した。

「やはり…勝てなかったか」

自分の非力さを恨む。儀國に勝利する事が出来なかった、それがとても悔しかった。

「まあそう落ち込むなよ。結果として俺も坂本に一撃も与えることが出来なかったからな」

「しかし…これではあのネウロイに勝てん」

あの日の夜、今までに出遭ったことのないネウロイと遭遇した。夜の砂浜で儀國と激しい剣戟を繰り広げていた…騎士の姿に似たネウロイ。

本来ならば放出する筈のビームを剣や刀のように刃状に形成し、儀國の剣と交えていた。

人型ネウロイを見るのは今回が初めてではない、既にあの時に遭遇している。しかしあんなネウロイは今までに見た事が無い、無論それは私以外の皆とて同じ。

あのネウロイは何だったのか…それは分からない。だが、確実に一つだけ分かっている。

相手はネウロイ、即ち…我等人類の、ウィッチの敵だ。

あの時は儀國が己の身体を張り事なきを得た。肉を切らせて骨を絶つ、しかしそんな儀國の決死の一撃も騎士型ネウロイは斃せず。

結果としてネウロイには逃げられ、そして儀國は重症を負い地に倒れた。

ネウロイを斃すのは我等ウィッチ達だ。その為には力が必要だ、あの騎士型ネウロイと遭遇し改めて実感させられた。

今会得している烈風斬だけではあのネウロイを斃すことはまず不可能だろう。古代より扶桑皇国に伝わる秘奥義、真・烈風斬を会得さえすれば…。

だが、これで勝てるのかどうかすら怪しい。だから私は儀國に魔術を教えて欲しいと頼んだ。案の定面倒だと断わられた…。

そこで私はある条件を提示した。古典的ではあるが一番手っ取り早い。

剣で勝負し、勝てば私に魔術を教える事。逆に儀國が勝てば何か一つ、望むことを叶えること。この条件を提示すると意外なことに儀



國が乗った。

結果は誰が見ても私の敗北ではあるが…。

「さて…約束だ。何か望むことはないか？」

約束は約束だ、勝者である儀國が望んでいることを叶えなければ…。

しかし、儀國は何故か不思議そうな表情を浮かべた。

「何でだ？俺勝ってないぞ？」

「何を言う、明らかにお前の勝ちじゃ

」

「いやいや、あれは勝ったとは言わないだろ。ラッパが鳴ったから中断しただけで勝敗は着いてない。だから引き分けだな、ここは」

「……………」

「ああ、でもどうしてもって言うなら…。ミーナに俺を整備兵に戻してくれって言うてくれないか？ウィザードとして務めてから、や

ることがなくて暇なんだ」

そう言うと、腹が減ったと言いながら儀國はこの場から去っていった。

儀國 雅史という人間は…とても不思議な人間だ。

扶桑皇国出身の整備兵という役割を与えられこの世界へ…並行世界から来たと言う魔術師。

ミーナとエイラを命を賭けて護り通した男…。

あの日の夜…アイツがネウロイと闘っている姿を見て、何故か胸の奥が締め付けられる感覚に襲われた。

こんな感覚は今までに体験したことがなかった。不安だとか、心配だとか…そんな感覚ではない、もっと別の何か…。

剣を交えていた今もそうだ。アイツと剣を交えている時も胸が締め付けられる感覚に襲われた。剣を交える前は何故か直視することに気恥ずかしさを感じ、なかなか出来なかった。

去り際、あいつの笑みを見た瞬間顔が熱くもなった。これもアイツの魔術の類か何かだろうか…。

「…儀國 雅史、か。全く、不思議な男だ」

手にした扶桑刀を鞘に収める。

一人残された私は去っていく儀國の背中を、見えなくなるまで見つめていた。

坂本の強制試合を終えてようやく朝食にありつく。普段ならばまだのんびりと寝ているのに、今日は坂本に私と勝負しろと叩き起こされた。

「つかこっちの兵舎まで来るなよ、坂本…」。

使わないエネルギーを消費した分、今日は朝食を食べまくろう。今日はいつも以上に腹が減ってるからご飯5杯ぐらいは余裕でいけ

そうだ。

食卓の上に並ぶ朝食、今日は和食の日だ。

この時間は唯一楽しみの時間、ミーナからはウィッチ達と連携が取れる為にコミュニケーション図っておけとか何とか言われているが、せめて食事ぐらいは男連中と食いたい。

流石に女子9割男子1割の空間の中で飯は食いたくない。考え方によつてはハーレムだろうが…どうもあの場は落ち着かない。

「なんか今日は朝から疲れ気味だな」

「まあ、訓練に無理矢理付き合わされたから…メチャクチャしんどい」

安藤と会話を交わしながら食事を勧める。他の皆とも最近はどうだとか、ウィッチ達と仲良くやってるのかなど、会話を交えながら楽しい食事の時間を過ごした。

やはり、この時間はいい。それが済めば…はて、今日は何が起きるやら…。

そんな事を考えながら本日十杯目のご飯に箸を持っていった。どうやら予想以上に俺の腹は空腹だったらしい、まだまだ入る気がするぞ。

このまま記録に挑戦するのもいいかもしれない。

「「「まだ食うのかよ！！？」「」」

安藤含む整備兵の皆からツツコミが入った。

今日も今日でブラブラと基地内を歩く。と、珍しいヤツと出会った。

「あ、ツンツン眼鏡」

「私の名前はペリーヌですッ！！それで…何か御用ですか？」

「いや別に、じゃ」

そのままスルー。ツンツン眼鏡には興味ありません。

「キイイイイツ！貴方、私に対し少し…いえ、かなり生意気じゃありませんこと！？」

「むっ？ここに居たか」

坂本がやってきた。途端にペリーヌはデレを見せ始める。

「少佐、どうしてここに？」

「ああ、儀國に頼み事があってな。儀國、今日の正午また手合わせを願う」

「またかよ…」

坂本からの再戦の申し出。そして俺の名前が出た途端に怒りを露にし睨み付けてくるペリーヌ。

「面倒だからやらない」

「また面倒か……。まったく、住んでいる世界が違つとは言え、お前も扶桑生まれだろう。扶桑の男児がそんなことでどうする？」

「扶桑……日本男児とかどうでもいいよ、別に。つーか今日やる？一日一回しか受け付けません」

「むっ、ならば明日ならば構わない……そう言うことだな？」

「制限付けとかなないと、何度も相手させられるからな。これでもサービスしてやってる方だぞ？」

そう言つて坂本と笑みを浮かべ合つ。

流石に一日の間に何度も手合わせをさせられたら此方の身が持たない。

一日一回ぐらいなら……まあ暇潰し程度にはなるから構わない。

因みにペリー又は更に不機嫌になっていく。

「そついつ事、じゃ」

「ああ、次は勝たせてもらうぞ」

「ハッ、やれるもんならな。後何度も言うけど、烈風丸は暫くは使  
うなよ」

坂本の不適な笑みに対し、此方も不適な笑みを浮かべて返す。そし  
てこの場から去ろうとした時、

「あ、いたいた！坂本さくん！」

宮藤が手を振りながら駆け寄ってきた。

ペリーヌ side

初めて出会った時から、どうしても氣に入らなかった。

初めて出会ったのはあの日の夜の砂浜。



あの日の夜、何故か胸騒ぎがして夜中に起きた。部屋を出ると少佐も、宮藤さんも…皆も部屋から出てきた。

理由を聞けば皆も同じ、胸騒ぎがしたから。そう答えたと同時に、宵つぱり娘…サーニヤさんがネウロイがこの基地内に居ると言って、胸騒ぎの正体が分かった。

そしてハンガーへ向うと中佐とエイラさんの姿があった。そして砂浜へと出撃して…彼、儀國 雅史と出会った。

月が綺麗な夜の砂浜、そこで目にしたのは凄まじい剣と剣のぶつかり合い。儀國 雅史の剣と、騎士に模したネウロイのビームブレードが何度も交差し、その度に激しく火花を散らし、金属音を響かせる。

結果、儀國 雅史の身を犠牲にしての一撃によりネウロイは撤退していった。

単身でネウロイに挑んだ勇氣と、その覚悟だけは…まあ…認めてあげないこともないですわ。

しかし、少佐に対しあの態度、許されるものではありませんわ！魔術が使えるからと言っていい気になっているその態度、どうして

も許せない。

だから、私が少佐に代わってあのふざけた態度を打ち砕いてやりますわ！見ていて下さい少佐！私は必ずやり遂げて見せます！

その為にこの男に決闘を申し込み、

「あ、いたいた！坂本さ〜ん」

宮藤さんが手を振りながら駆け寄ってきた。

Act7：平穩「壺」（後書き）

ACT7「壺」でした。遅くなってすいません、何分仕事が…。

次話は今回よりも早くに投稿出来そうです。

すわっ！！

Act7：平穩「弐」（前書き）

Act7「弐」です。

今回はのほほん、ほのぼのとした話を書きました。

…ちゃんとほのぼのになってるかな…自信ないっす。

## Act 7：平穩「弐」

その日の昼下がり、何故か俺はお茶会へと呼ばれていた。

宮藤によると、リーネがお茶会を開こうと企画したらしく、俺もと呼んでくれたそうだ。ミーナも、今日はネウロイの来襲もないし英気を養っておこうと…だそうだ。

ネウロイの来襲がない…本当かよ、と思わずツツコミそうになった。ネウロイは定期的に、週に一度出現するらしいが…それも今じゃ不定期。いつ現れるかも予測不可能。

それに、あの騎士型ネウロイの件もある。他のネウロイとは全く違う騎士型ネウロイ、あのネウロイもいつこの基地に現れるか分からない。

今日か、明日か…はたまた今か。いつ来襲してくるかも分からない。

「あ、あの…お味はどうですか？」

不安げな表情でリーネが尋ねて来る。

「ん？ああ、今まで飲んだ紅茶の中で美味しいぞ」

既に飲み干し、空っぽになったカップをリーネに見せる。と、安心して笑みを浮かべた。

「悪いリネット、もう一杯貰えるか？美味しいし」

「はい。あ、後…私のことはリーネでいいですよ、儀國さん」

「そうか？じゃあリーネ、お代わりヨロ」

「はい」

リーネが二杯目の紅茶をカップに注いでくれる。

…今はいいだろう。折角リーネがお茶会を開き、男性が苦手であるにも関わらず俺もと誘ってくれたのだ。断わるのは相手に失礼というもの、ネウロイが来ないのならば…それでいい。

それに、リーネが淹れてくれた紅茶は美味しい。あつちでもババアが淹れてくれた紅茶を飲んでいたが、その紅茶よりもリーネが淹れて

くれた紅茶の方が美味い。

それに手製のスコーンもある。ちょうど甘い物も食べたいと思っていたところだ。

…これで野郎が一人でなければよかったが。贅沢は言うまい。因みに俺はエイラとサーニヤと同じテーブルに着いている。

宮藤・リーネの所には…ペリーヌがいて睨まれるからパス。  
バルクホルン・ハルトマンの所には…何となくパス。

坂本・ミーナの所には…俺の天敵であるミーナがいるからパス。  
ルッキーニ・シャーリーの所には…落ち着いて紅茶を飲めそうになりからパス。

結果、エイラとサーニヤの所に落ち着いた。

「うん、このスコーン美味いな」

「なあ儀國、お前ってこうしてこの世界にいるけど…親とか心配してないか？」

スコーンを食べていると、不意にエイラが尋ねてきた。

「あん？大丈夫だろ、そもそも何処にいるのかすらも分からないし」

「えっ？」

その言葉にエイラ…ではなくサーニヤが反応した。

「いや俺さ、5歳ぐらいからずっと施設で育てられてたんだよね」

「えっ？そうなのか？」

「ああ、まあ施設長曰くどうしても親と離れて暮らさないといけない状況だったらしい。だから今親が何してるのかとか、全く分からない状態…みたいな？くたばってないといいけどな」

サーニヤの手前、嘘を言った。

ネウロイがオラーシャ侵攻の際に、サーニヤも親父さんと生き別れになっている。

サーニヤは今でも親父さんが生きていることを信じている。いつか再会出来る…そう信じてサーニヤはエイラ達と一緒にネウロイと闘



っている。

そんなサーニヤの手前で、自分の両親の話はやめておいた。変に影響を与えて不安にさせたくもないし…。

「そうなんだ……」

「ど、どうかしたでありますか中尉殿？」

サーニヤが顔を俯かせたことに声を掛けるも、言葉使いが可笑しくなってしまった。

まさか嘘だつてバレたか？それとも何か不快感を与えるような事で  
もしたか俺！？

「…儀國さんのお父様とお母様、きっと…生きてると思います」

「えっ？」

顔を上げたかと思うと、サーニヤはゆっくりと口を開いた。

「私も…昔ネウロイがオラーシャに侵攻した時、お父様と離れてしまいました。」

けど、何処かで生きてるって…私は信じてます。

だから儀國さんも…信じてください。信じていれば…きっと逢えますから。」

「…ああ、そうだな。確かにその通りだ、うん」

サーニヤは優しい娘だ。そんなサーニヤの頭を優しく撫でた。

「有難うな。それと…俺に対して敬語じゃなくてもいいですよ、立場的には其方が上ですからね。サーニヤ・V・リトヴァク中尉？」

「え？えつと……うん」

恥ずかしそうに頷いたサーニヤ、もう一度頭を撫でる。

ふと思う、サーニヤみたいな可愛い妹が俺にも欲しかった…。

「あ、あの…儀國…さん？」

「ん？」

「私のこと、サーニヤって呼んでくれれば……」

「そ、そうか……じゃあサーニヤでこれからは呼ばせてもらうか」

そう言つと笑みを浮かべて小さく頷く。うん、やっぱりサーニヤは可愛い。

つくづく思つがサーニヤみたいな妹が欲しかったと、今なら思える。

「あ……」

「ん？どつたの？」

「……ううん、何でもない」

何か言いたげなサーニヤだったが、首を横に振つて答えた。

こうしてそれなりにお茶会を楽しんで午後を過ごした。

その日の夜　　。

「おっ、今日は珍しいお客さんがいるな」

いつもの様に鍛錬を行おうとした。場所は滑走路を選んだ。そして滑走路に着くとエイラが待っていた。その横：サーニヤもちょこんと座っている。

「今日はどうしたんだ？」

「：エイラに聞いたの。儀國さん、いつもここで鍛錬してるんだって」

「サーニヤと一緒にいきたいって言ってさ…」

「ふん、まあ迷惑してないからいいけどな。でもいいのか？夜寝ないと明日に答えるぞ？」

そう言うがサーニヤは小さく微笑んで首を横に振った。  
どうやら大丈夫らしい。

尤も、夜間哨戒を担当しているサーニヤだ。夜遅くまで起きるのは慣れていて当然か。

「なあサーニヤ、エイラにも言ってるけどさ…見てても何も、本当に面白くないぞ？」

「…ううん、私も…儀國さんの訓練、見てみたい」

「……まあサーニヤがそう言うなら、ゆっくり見ていけばいいけど」

こうしてサーニヤとエイラに見られている元、いつもの様に鍛錬を始める。

が、ものの十数分で終えた。

「世界魔術協会には色んなヤツがいてな、俺の知り合いの中じゃ人形を自在に操るヤツや俺とは反対に水態…水の魔術を得意とするヤツもいたな」

「へえ、私も見てみたいな」

「後、ウチのババアだな……」

「ババア？」

「俺のお師匠様だよ、まあ普段はババアって呼んでる。見た目はメチャクチャ若いけど……例えたらミーナ中佐みたいなもんだ」

「ふん……ってお前中佐が聞いてたら殺されるぞ」

三人で一時間近く喋ってその日の夜を過ごした。

どうやらお茶会で俺に色々と聞きたかったと、サーニヤは言う。  
世界魔術協会やある部分を隠しての過去の出来事を話すとサーニヤは楽しそうに聞いてくれた。

たまにはこうやって過ごすのも悪くは無い、だから今日の訓練はお休みにした。

その頃のミーナ…。

「くしゅん！」

ベッドに横になり眠りながら可愛らしいクシャミを零していた。

## A c t 7：平穩「弐」（後書き）

以上A c t 7「弐」でした。

今回はほのぼのとした話を書きたかったんで、こんな感じに落ち着いたんですけど…如何でしょう。

次話は…多分日曜日ですかねえ。それでは皆様、すわっ！！



Act 8：事件「壱」（前書き）

Act 8「壱」です。

今回はメツチャシリアスで行きますよ。

## Act 8：事件「壱」

朝早く、砂浜へと足を運ぶ。特に理由はないが、なんとなく来たかった。

起床ラッパはまだ鳴ってはいない、それよりも早くに起きてしまった。

二度寝をする時間はもうあまりないと思い、それならばと着替えて身体を解すことにした。

少しでも腹を空かしておけば、その分飯は美味しく感じる。

そしていつもの整備兵の服に着替えて、部屋を後にし、今に至る。

「ん？」

ふと、何かに視線が向く。

「日本…いや、こつちじゃ扶桑刀だったな…」

砂浜に突き刺さっている一振りの太刀、それは日本ならぬ扶桑刀。

何故こんな所に扶桑刀が？不思議に思いながらも砂浜に突き刺さっている扶桑刀に近付く。

坂本が振るっている扶桑刀…ではない、かなりの歴史を感じさせる雰囲気放っている。

「……………」

試しに、扶桑刀を砂浜から払ってみる。

見事な五の目乱れの刃文と、美しい鏡肌の地肌が顔を現す。

特に変わった所や魔力による術式が施されたような後もなし。至って普通の扶桑刀だ。

…ナマクラではない。この刀は間違いなく名刀だ。

恐らく素人の目でも、感覚で普通の刀では無いと認識出来るだろう。この刀にはそれぐらいの強いオーラを放っている。

…一度鞘へと収め、そっと眼を閉じる。眼を閉じ、刀を握ったことで甦る過去の人生。

世界魔術協会へと入門する以前の記憶が、鮮明に映し出される。

丁度目の前には手頃な岩が。

…ほんの少しだけ、久し振りにやってみるか。

宮藤     s i d e

ふと、眼を覚ました。

カーテンからは薄っすらと日の光が部屋に差し込んでいる。  
カーテンを開いて、窓を開く。黒から青へ、日が昇り始めた空が広がっていた。

起床ラッパは…まだ鳴ってない。それよりも早く起きちゃったみたい…。

「ふわぁ〜……あふ……」

下で寝ているリーネちゃんを起さない様にベッドから降りて、服を着替える。

起きちゃったし、ちょっと外でも散歩しに行こうかな。

なんとなく、砂浜に来てみる。

「あれ？」

砂浜に誰かがいた。眼を凝らして見ると坂本さん…じゃなくて儀國さんがいた。

儀國さんがいるなんて…珍しいな。

エイラさん曰く、儀國さんはいつも夜になると、私達が寝静まった時間から滑走路で一人鍛錬を行っている。でもたまにいない時があるんだって…エイラさんちよつと不機嫌そうに言ってたっけ。

朝も坂本さんみたいに訓練してるのかな…。

そんな儀國さんの手には、何故か扶桑刀があった。

儀國さんの魔術の一つ、錬想術：「ソードサマナー剣極の調」は儀國さんが想像した「剣」を創造するという物。「剣」だけじゃなくて、「刀」も造ることが出来るのかな？

そんな事を思いながら見ていると、儀國さんが扶桑刀を携えたまま構えた。

刀は鞘に収めたまま、その状態で腰を少し落とし、抜き手となる右手が柄に触れるか触れないかの、微妙な距離に置く。

その構えは扶桑皇国に伝わる技術：抜刀術（居合い）。実際に見るのは…初めて。

そんな時だった。

「えっ？」

信じられない現象に、私は思わず我が眼を疑った。

刀が収められる時に鳴る…  
鞘と切羽がぶつかり合う音。  
カチンッ、と…その音が鳴った。

途端、儀國さんの目の前にあった大きめの岩が真っ二つに割れた。

儀國さんは扶桑刀を鞘から抜いていない、だけど…確かに鞘へと収めた音は鳴った。

つまり…眼に見えない程の凄い速さで刀を抜いて、岩を斬り裂き、鞘へと収めた…ということ。

あれも魔術か何かなのかな！？

「っ……！」

私は儀國さんの元へと駆け寄る。

砂浜を踏む音に気付き顔だけを振り返らせる。その顔は何でここに、と言いたげな顔をしている。

「おはよう御座います、儀國さん」

「ああ、随分と早い朝だな宮藤。宮藤も朝練か？」

「い、いえ。私はちょっと、散歩でも…って」

「なるへそ、まあ朝は・イオンが一杯出てるとか何とか言うからな」

「あ、あの、儀國さん！さっきのは何ですか！？」

私は早速儀國さんに聞いてみた。

「さっきの？」

「はい！あの…扶桑刀を抜いてないのに、岩を真つ二つしたのです！あれも魔術ですか？」

「いや、あれは一切魔術の類を使ってない。純粹に人の身だけで行った技だ」

尤も、エラーだらけの状態ではあれが精一杯、と儀國さんは付け加えて言う。

坂本さんの烈風斬も凄いけど…儀國さんのさっきの居合いも凄かった。それも魔術も何も使わないで出来るから尚更凄い。



「儀國さん、お願いします！私にも…その技教えてください！」

私は儀國さんにさっきの技を教えてもらつようをお願いした。

ネウロイをやっつけて、一日でも早く戦争を終わらせたい。

今の私は弱い…だから、強くなってネウロイから皆を護りたい。

「ああ？ダメダメ、お前じゃ無理だつて」

儀國さんは苦笑いを浮かべながら断わつた。でも、私は退かない。

「一生懸命頑張ります！だから…お願いします！」

儀國さんの眼をジッと見つめる。苦笑いを浮かべていた儀國さんも真剣な表情を浮かべて…私の眼を見てきた。

「…宮藤」

暫くして、儀國さんが口を開く。そして…

「ムリダナ（・x・）」

…エイラさんの真似をして断わられた。

「ど、どうしてですか!？」

「いや、単純にお前の技量不足。満足に刀振り回せないお前じゃ、この技は習得出来ないぞ。

坂本なら、案外出来るかもしれないな…」

「だ、だから私一生懸命頑張り」

「…人を斬れる覚悟、お前にはあるか？」

「えっ？」

儀國さんが何かを言った。

小さかったからよく聞こえなかった……けど、何かを呟いた儀國さんの顔…何処かとても、悲しい顔をしていた気がした。

「…いや、何でもない。兎に角お前じゃダメダメ。それにお

前が刀振るってるのって、何か似合わないし。

何かさ、刀持ったら振るんじゃないくて、逆に振り回されてるって感じがメッチャするな」

「はう……」

指でバッテンされながら、馬鹿にした態度で言われる。とても悔しい……。

と、そこに起床ラッパが鳴り響く。皆が起床する時間が気付かない内に訪れていた。

「こんな時間か。さてと、俺はそろそろ戻るわ。腹減ったし飯食ってこないと」

手にしていた扶桑刀をその場に突き刺し、大きく伸びをする。

「あれ？この刀、儀國さんのじゃないんですか？」

「ん？ああ、何かここに突き刺さってたから使っただけだな。まあ……頑張れ宮藤。お前なら……この技がなくてもきつと強くなれるぞ」

そう言って儀國さんは私の頭を撫でた後、この場から静かに立ち去っていった。

その際、変な歌を口ずさんでいた。  
ダメダメボ～　ズ今日もダメ～…　って、変な歌だった。

「うう～…悔しい…」

砂浜に一人残された私。

儀國さんに馬鹿にされたことを悔しく思いながら、宿舎へと足を運んだ。

…帰る前に、儀國さんが突き刺していった扶桑刀を回収した。  
坂本さんの…じゃないと思うけど。どっちにしても、ここに放っておけない。

「……………」

ふと立ち止まり、目の前にあった石柱を見据える。

「えいっ！」

居合いを試みる。けど、儀國さんみたいな事は出来なかった。  
加えて、居合いと呼べるものじゃなかった。

へろへろと鞘から抜かれた扶桑刀。こんなじゃネウロイどころか  
石ころ一つだつて斬れない。  
普通に振って斬った方がマシだつて、儀國さんが見てたら絶対に馬  
鹿にしてくる。

「うう…私だつて、頑張ればきつと出来る………筈」

「ふゝむ…」

自室、今日も身体の調子を調べる。以前変化なし、エラーが解消さ  
れた様子はなかった。

「まだ治らないか…ったく」

愚痴を零し、ベッドに寝転がる。いつになったら本調子に戻ってく

れるのやら。

こんな時ババアが居てくれたら、このエラーの原因が分かったが…。

「さて、今日は何をして過ごそうかな…」

そんな時、ドタバタと慌しく廊下を走る音が遠くから聞こえてくる。その音はやがて大きくなっていき、そしてこの部屋の前でピタリと止まった。

そして間髪入れずドアが蹴破られる程の勢いで開かれ

「た、大変だ儀國！！」

慌しくエイラが飛び込んできた。

「え、エイラ…？」

何故エイラがここに？

「ど、どうした？」

「た、大変なんだ！サーニヤが…サーニヤが…！！」

「…ッ！？」

只ならぬエイラの焦りよう、どうやらただ事ではないらしい。

「落ち着け！まずは何が起きたのか説明しろ！」

「そ、そうだな。と、兎に角来てくれ！大変なんだ！」

「分かった」

サーニヤにいったい何が起きたのか、エイラの後を走って追いつける中サーニヤが無事でいてくれることを願った。

## Act 8：事件「壱」（後書き）

Act 8「壱」でした。

前書きでシリアスって書きましたけど、正式には「弐」でシリアス  
がこう、ボカーンと出てきます。

いったいサーニヤに何があったのか……！？後編へ続く。



## Act 8：事件「弑」（前書き）

遅くなりました、後編です。

今回ちょっとぴり長めになっちゃいましたが…どうぞ。

いったいサーニヤに何があったのか！？シリアスな展開…ドンッ  
！！

## Act 8：事件「弐」

「ハア？パン…じゃなくて、ズボンが盗まれたあ？」

ミーティングルーム、そこでは半数が怒りと恥ずかしさに顔を赤くし、もう半数はいつたい誰かと真剣な表情で悩んでいる。

エイラによると被害者は5人。

被害者はエイラが言っていたサーニヤ、ハルトマン、リーネ、宮藤、そしてペリーヌ。

話を聞いたのを纏めると…

サーニヤの場合。

エイラ曰く、いつもの様に夜間哨戒任務から帰ってきて部屋に寝惚けて入ってきた。

そして服を脱ぎ散らかしたまま眠ってしまったので、綺麗にたたんでベッドの上に置いておいたとのこと。

そして二人が眼を覚まして着替えようとしたら…たたんだ筈のサーニヤのズボンが忽然と消えていた、らしい…。

サーニヤが寝惚けてエイラのベッドで寝るのはよく知っている。その度にサーニヤの脱いだ服をたたむのがエイラの役目。

が、今日は何の因果かサーニヤのスパッツみたいなズボンがない。

「…お前がこっそり盗んだんじゃないのか？」

可能性がない…とは言えない。

サーニヤ大好きこのエイラだ、隠れて匂い嗅いだりとかしてても…あんまり違和感がないぞコレ。

「エイラ……本当なの？」

「そんな事するわけないだろ！？バカッ！サーニヤも儀國の言う事信じるなよ…」

「そーなのかー？」

「…お前、私を何だと思ってるんだ？」

次にハルトマン。

ハルトマン曰く、朝起きたら消えていたとのこと。一応部屋の中は探した、らしい。

「本当に探したのか？部屋散らかってて実は埋もれてただけでした、みたいなネタじゃないのか？」

「儀國、お前は知らないだろうが…こいつの部屋は、とてもじゃないが部屋と呼べるものじゃない。正に腐れきった異空間だ。散らかっている…というレベルではないぞ」

「え、トウルーデが神経質なだけだって」

「わ、私が神経質だと…？」

バルクホルンの言う通り、…あのゴミ屋敷と化している異空間。その何処かに紛れ込んでいるだけだと思う。

盗まれたと思うよりも、こっちの方が確立が極めて高い。

ハルトマンは…前期にもパン……ズボン事件を引き起こしたこともある人物。

また過去のようなカオスの様な展開だけにならない事を願う。

そしてリーネ、宮藤、ペリーヌの三人。

三人曰く、午前中坂本の指導の下訓練を実施。終わった後汗を流しにシャワーを浴び、脱衣所へと戻ったところ各々パ……ズボンが消えていた、らしい。

まだ浴場は出来上がっていない。今施設班の連中が必死になって工事を進めているのを数回見たことがある。だからシャワーを浴びに行ったのだろう。

その浴びている最中に何者かの手によって盗まれた……と言うことになる。

「うゝ…恥ずかしいよぉ…」

「スースーする………」

「な、何か落ち着きませんわ………」

各々、ズボンを履いてない今の気持ちを語る。ペリーヌ除き、宮藤とリーネはギリギリ見えるか否か、ちよつとでも服を捲ればその先に待っているのは……。

「な、何いやらしい眼で見えますの!？」

「失敬な…ツンツン眼鏡。で、まあズボンが盗まれたのは分かった。で、犯人は誰かってことになるよな…」

なんとなく、ルッキーニに眼を向ける。

「にやつ!?!わ、私じゃないよ!!ちゃんと履いてるもん!」

目が合った途端ルッキーニは慌てて両手を横に振りながら否認した。前期のは…まあ容疑者でもあり、第一の被害者でもある。

だがパン……ズボンを盗んだことには変わりない。前科一犯、過去に犯した罪は今も尚疑われる要因となる。

そんなルッキーニは自分は無実だと証明する為に、服を捲って青と白のストライプのパン……ズボンを堂々と見せる。

私はちゃんと履いているぞと、目で訴えてきた。

「分かったからとりあえずやめろ、はしたないぞ」

「けど、いったい誰が宮藤さん達の服を盗んでいったのかしら…」

「あゝ一ついいか？パ……ズボンを盗まれたのはよく分かった。

けどさ、何で俺呼ぶ必要があるんだ？中佐か誰かがエイラに指示を出したのか？」

エイラが慌てて部屋に駆け込んでくるや否や、サーニヤが…と言うからどれだけ重大なことかと思えば…くだらない。

エイラにしてみれば一大事なのかもしれないが…。

「いいえ、私は何も…」

坂本やバルクホルンも首を横に振るう。

「うつ…だ、だってしょうがないだろ！？どうしようって思ったら、何か儀國に言わないとって思ったんだよ！」

恥ずかしさを誤魔化すように、エイラは声を大きくして言う。  
信頼されている…ということかな。それはそれで嬉しいと思う。

「まあ大変なのは分かったけどさ、俺は帰るぞ。ズボンを探す魔術

なんて習得……っかそんな魔術すらないし」

「おい儀國、お前も我らと同じウィッチの一員だろう。ならば仲間を助けないでどうする？」

「危機に瀕してたらそりゃ助けるよ。けどさ、ズボンなくなっただけだろ？」

ゆっくり探してみろよ、きっと部屋の何処かにあるって」

そもそも一着しかないのか？給料貰ってるなら予備に何着があるだろ普通。

ないのか？予備は皆洗濯中なのか？

「まあ見つかるといいな。そんじゃ、シーユーアゲイン」

手をヒラヒラと振りながら、ミーティングルームを後にした。

「まったく、何事かと思えば……くだらない」



文句を言いながらウィッチ達の宿舍廊下を歩く。

人騒がせにも程がある。たかがズボンを盗まれたぐらいで何を大袈裟な、予備をもつと沢山持つておけと言いたい。

「ハア……あん？」

目の前を、何かが横切る。よく見えなかったが、小さな動物のようにも見えた。

「なんだ？」

小走りで、動物の様な何かが消えた方へと向ってみる。  
そこにいたのは…イタチ？いや、イタチにしては少し大きい気が…

「ッ！！」

瞬間、そのイタチに向って拳を打ち落とす。

軽々と避けられる、放った拳打は虚しく空を切る。

コイツは只のイタチじゃない、ネウロイだ。

よく見れば眼や鼻がない。それに黒い毛並みと思った身体、近付いてみれば毛は一切無い。滑らかなボディに赤い模様、それは間違いない、ネウロイのもの。

虫型のネウロイは7話で登場したのを覚えている。が、動物でイタチ型というのは初めて目にした。

この世界に来てから変なネウロイばかりと遭遇している。

ウィッチ達の攻撃を物ともしないネウロイ、ビームをブレード状にし血さえ流す騎士型ネウロイ、そして…今日の前にいるイタチ型ネウロイ。

いったい何が起きているのやら…。

「この…待て!!」

CODDE…SATAN  
「煉獄の赤」で一気に燃やしてやりたい。が、ここは宿舎…火事になる可能性がある。

それに加えてあのイタチ型ネウロイ、とんでもない物を持っていた。

「何でお前がアイツ等のズボン持つてるんだよ!？」

なんと、イタチ型ネウロイの口：の部分に皆のズボンが咥えられていた。従って傷付けることも、燃やし尽くすことも出来ない。

それにしても：なんなんだ、このネウロイは。宮藤達のズボンを盗んだ犯人は分かった。

が、何故ネウロイが？ある意味面白いネウロイだが、その動機が全く分からない。

ネウロイにも性欲とか、フェチみたいなものがあるのか？

だとしたらこれは凄い発見だ、是非この世界の学会とかで発表した  
い。

全否定されるのがオチだろうけど。

「ちっ！この!！」

左フックを放つ。当たりはしなかったが、掠った。そしてリーネのズボンをイタチ型ネウロイから奪い返した。

「何事だ!？」

坂本達がやってくる。そしてネウロイを見て驚愕の表情を浮かべた。

「ああ、今ズボンを盗んだ犯人を」

「…犯人は、貴方だったのね」

「見つけ……は？」

「ひ、酷いです……」

「見損ないました！」

泣きそうになるリーネ。その親友である宮藤は怒りを露にする。

他の皆も軽蔑と怒りの眼差しを向けている…  
ってちよっと  
待て！

「何で俺が犯人なんだよ！？俺じゃなくてアイツだつての！！」

確かに俺は今、リーネが今日履いていたパ……ズボンを握り締めている。が、それはあのイタチ型ネウロイから奪い返しただけであり、

俺が盗んだわけじゃない！

「アイツって何処だ？言い訳をするとは…見苦しいぞ儀國 雅史」

「えっ！？」

逃げられた！？

バルクホルンに言われて振り返ると、既にイタチ型ネウロイの姿は何処にもいなかった。

「儀國…お前とはじっくり話し合う必要があるようだな」

背中 of 扶桑刀を引き抜く坂本さん。顔は笑ってるが怒っているのが一目瞭然。

獣耳と尻尾が現れる。怪力発動してますねバルクホルンさん。

ミーナは語らず、いつものブラックスミイルを浮かべている。

けど俺はやってない！

「異議あり！俺は無実だ！無実を主張する！」

「最低だぞ儀國！さつさとサーニヤのズボン返せ！！」

「…儀國さん、返して下さい」

「お前等な…クッソ…ッ…！！」

「あ、逃げた！」

「待て…雅史…！！」

「お待ちなさい！！！！」

とりあえずその場から離脱する。

疑われている今、自分の命が危機に瀕している今、無実を証明しなければならぬ。

あのイタチ型ネウロイをなんとかしてでも捕まえて取り返さなければ…。

こんな馬鹿な理由で死にたくない。あの誓いを立てた以上、その誓いを必ず守る…！

逃げる前、リーネにズボンを投げて返す。たわわな胸にズボンが張り付いた音が小さく鳴った。

「ハア…ハア…あのクソイタチ、何処に行った!？」

坂本達の追跡から逃れながら、イタチ型ネウロイを搜索する。見つけたらただじゃおかない、一瞬にして燃やし尽くす…なんて生易しいことはしない。

長い時間を掛けて恨みを晴らしてから、この世から葬り去ってやる…!

「まったく、何処に……ッ!？」

咄嗟に身を屈める。と、頭があつた位置に赤く細い二つの光線が空へと向って伸びた。

茂みが動く。身を屈めて赤い光線を避けて、間髪入れずにそこに蹴りを放った。

茂みに突っ込む蹴り。そしてそこから飛び出す黒い身体の憎いやツ  
…イタチ型ネウロイ。

どうやらこのイタチ型ネウロイ、ビームまで撃てるようだ。  
本来のネウロイのように極太なものではないが、それでも一人殺  
せるぐらいの殺傷能力はある。

もうズボンがどうのこうの言っている場合じゃなさそうだ。この場  
で絶対に潰す！

「見つけたぞコノヤロウ!!」

イタチ型ネウロイを追い掛ける。イタチだけあって足は素早い、そ  
して未だに宮藤達のズボンを口に銜えている。  
いったいそれを何に使う気なんだ!? まさか…代わりに履くのか!?

「この…大人しく俺にブチ殺されろ!!」

「お前がだ、儀國!」

「げえっ!? 関羽…じゃなくてバルクホルン!」



「私もいるよん」

「げえっ！ハルトマン！」

ジャーンという効果音が何処からか聞こえた。気がした。前門の虎ならぬハルトマン、後門の狼ならぬバルクホルン。カールスラントのエースが立ち塞がる。

「もう逃げられんぞ儀國、観念して皆のズボンを返せ。そして謝罪しろ」

「私のズボンなんか盗んで…何が目的なのかな？」

バルクホルンは怒っているが、ハルトマンは楽しそうだ。

「お前等見てただろ！？さっきココにいただろ！？」

と、イタチ型ネウロイがいた場所を指差すが…またも姿を消していた。

「何がいたと言っただ？早く宮藤の服を返すんだ！」

怪力を発動させたバルクホルンが突っ込んでくる。このシスコンが  
！！

「よつと」

掴もうと伸ばしてきた腕を捌き、そのまま背後へと周る。

「何！？」

「はい、残念でした！また出直してきな！」

そして一気にダッシュ。後ろは決して振り返らない、ひたすら前を  
…逃れることだけを考える。

「待て儀國！罪を重ねるのか！？」

「待てと言われて止まるヤツがいると思うか！？後何回も言ってる  
けど俺は無実だったのー！！」

バルクホルンとハルトマンの追跡から逃れながら、イタチ型ネウロイを搜索に当たった。

ペリーヌ     s i d e

「まったく！あの男はいつたい何処に逃げたのかしら！？」

ズボン泥棒という罪を犯した大罪人、儀國 雅史を追って基地内を搜索する。

まさか、こんな外道な事をするとは…やはりあの男は最低な人間ですわ！

私のズボンを盗んただけでなく、他の皆のズボンまで堂々と盗むとは…許されることはありませんわ。そ、そのせいで…擦れる。

「おのれ何処に……あら？」

目の前に何かが飛び出す。それは小さな動物だった。

黒い身体に赤い模様の入った、何とも奇妙な動物。その動物の口には、

「わ、私のズボン!!」

儀國 雅史に盗まれたと思ったズボンが銜えられている。私のだけじゃない、宮藤さんのや宵っ張り娘も…。まさか、この動物が犯人!?

「よ、よくも私のズボンを…!!」

「ペリーヌ!ソイツから離れろ!!」

後ろから儀國 雅史の声が。振り返ると儀國 雅史が此方に向って走ってくる。

「ぎ、儀國 雅史!」

「ペリーヌ!!危ない!!」

「えっ?きゃっ!!」

儀國 雅史に突き飛ばされる。地面へと倒れるまでの間、全てが遅く見えた。実際には一秒程度のこと、けどこの時は何秒、何十秒と感じられた。

その中で私が見たもの。私を突き飛ばした儀國 雅史、その前には私や他の皆のズボンを銜えた黒い動物が跳び、

「えっ!?!」

額部分にある赤い模様から細く赤い光線が放たれた。

この時私は理解した。この黒い動物は…ネウロイ。何故最初に気付けなかった…、あんな毛がなくて、赤い模様の入った黒い動物がいる筈なのに。

そして動物型ネウロイが放った光線は、儀國 雅史の左肩を貫いた。

「ぐうっ!!」

貫かれた儀國 雅史の左肩。そこから血が噴出す。

「ぎ、儀國」

「燃え尽きろ、このクソイタチ!!」

右手で素早く動物型ネウロイを捕まえて、赤い炎…「煉獄の赤」で包み込んだ。  
CODE::SATAN

轟々と燃え上がる炎、動物型ネウロイは「煉獄の赤」の炎によって、  
やがて跡形もなく消滅　燃え尽きた。

「ハア…ざまあ。っと、大丈夫か？」

「…………ハッ!ぎ、儀國さん!」

「お、なんだ…急にさんで呼ぶなんて、明日は嵐か大雪か？」

ネウロイのビームに貫かれた左肩。痛々しい傷が破れた服から見え、  
そこからは血を流している。

けれども儀國　雅史は平然とした様子で、いつもの様な態度を取っていた。

「こんな時までふざけている場合ですか！？貴方、私を庇って怪我を…」

「こんなの怪我の内にも入らないって、心配すんな」

「あ、いた！ってあれ？」

「どうしたペリーヌ…って儀國！肩から血が…！」

他の皆が集ってくる。儀國さんは直ぐに宮藤さんの治療魔法によって治療を受けた。

ミーティングルーム。

「すまん、俺が燃やした」

とりあえず頭を下げて謝る。机の上には黒焦げになり、炭と化した宮藤達のズボン…だったもの。

「仕方があるまい。まさか、ネウロイが犯人とは誰も思わなかったからな…。しかし、すまなかった儀國」

「私もだ、疑つてすまない…」

「ごめんなさい…儀國さん」

皆が頭を下げて謝ってくる。

「やめてくれよ、別に謝れることはしてないし。原因はあのクソイタチだろ？」

「確かに…あんなネウロイまで現れるとは…」

「サーニヤのアンテナでも感知出来なかったもんな…」

サーニヤ曰く、ネウロイの気配を全く感知出来なかったという。

サーニヤの固有魔法は『全方位広域探査』、サーニヤのアンテナは様々な電波を感知することでレーダーとしての能力を果たしている。



その能力に引つ掛からなかったということとは…恐らくステルス機のような能力を持ったネウロイだったのかもしれない。  
なんにせよ、事が大きくなるまでになんとかなってよかった。

「…ごめんなさい、儀國さん」

サーニヤが申し訳なさそうに謝ってくる。サーニヤに責任はないが、疑ったことに罪悪感を感じているのだろう。

「気にすんなよ」

人間誰しも完璧ということはない。間違いは誰にだってある。ただ、その間違いで危うくこの世とおさらばしそうにはなかったが…。

「でも、何であのネウロイは私達の服を？」

「さあな。大方疚しいことでもしようとしたんじゃないか？宮藤とか普通に可愛いしさ」

「えっ？／／／」

「まあ、犯人は見つかったけどお前等のズボンを燃やしたのは悪かった、それだけは謝っておくわ。さてと、俺は行くか」

席を立ち、出入り口へと向う。

「ど、何処に行くんですか？」

「飯だよ、昼飯。ドタバタしてたら腹減ったしな」

リーネの問いに答え、ドアノブを手を掛けた、

「あ……あの！」

その時、ペリーヌに呼び止められる。

「あん？」

首だけを振り返らせペリーヌを見る。何か言いたそうにしているが、何か戸惑っているようにも見える。

「なんだよ？用がないなら俺は行くぞ？」

「お、お待ちなさい！そ、その……ぎ、儀國さ……ん」

「……ああ」

「さ、先程は、その……ありがとう」

小さく、耳を澄まさなければ聞き取れないぐらいの声で、ペリーヌが礼を述べてきた。

「……フツ、ああ。気にすんなよ、ペリーヌ」

そうペリーヌに返して、ミーティングルームを後にした。

ペリーヌも意外に可愛いところがあるな……

## Act 8：事件「弐」（後書き）

まずはすいませんでした、つい調子に乗っちゃいました。

今回何故このような作品にしたのかと言うと、【スースーするの】や【モゾモゾするの】みたいな、ギャグを取り入れたものを書きたいと思い、このような作品にしました。

ギャグになってるのか微妙な出来合いですけど…ね。

初期段階では、リーネがこけてオリジナルネウロイであるイタチ型ネウロイをおっぱいで潰し、儀國から史上最強のおっぱいを持つ女としてネタにされる、ってのも考えてました。

ミーナが虫型ネウロイをお尻で粉碎したのを見て、思いついたネタなんですけど…。

でも冷静になって考えたらすつごくバカみたいだと感じお蔵入りにしました。

もし何かの機会があれば、番外編… ActEXとして載せるかもしれません。

以上、Act 8「弐」でした。すわっ！！

次はいつ頃更新できるかな…。

Act 9：終焉の蒼（偽）「巻」（前書き）

遅くなりました、Act 9「巻」です。

今回は冗談抜いて、真面目な話…のつもりです。

Act 9：終焉の蒼（偽）「巻」

「ふっ！はあっ！！」

今日も今日で坂本の試合に付き合う。一日の内に何処かで必ず一回は坂本の試合に付き合うという約束を交わしている。

勿論勝てば勝者の願いを聞くというオマケ付き。相変わらず坂本は魔術を請うことを諦めていないようだ。

俺は特に願いはないから勝てばそのままにしている。

交わした以上は守るのが道理。坂本が納得するまで試合に付き合うしかない。

が、負けるつもりは最初から無い。

そして今日はどういう訳かギャラリーが多い。今頃書類の山と戦っているミーナと、未だ眠っているだろう寝坊助のハルトマン、それを必死に起こしているバルクホルンを除いて、今日は全員いる。

この時間帯は絶対に寝ている（エイラ談）サーニヤですら、起きて坂本との試合を見ていた。

「はあああっ！！！！」

「ほい」

剣を振るい、坂本の扶桑刀を弾き飛ばす。回転しながら宙を舞い、砂浜に鋭い切先が突き刺さった。

「また俺の勝ちだな、坂本」

「ぐっ… また私の負けか」

歓声が上がる。凄いと慕ってくれる宮藤と控えめなリーネ、まあまあだなとエイラに、拍手をくれるサーニヤ。

ペリーヌに限っては睨まれている。まあペリーヌは坂本大好き子だから仕方ない。

シャーリーとルッキーニに至っては退屈そうに見ていた。

「いい加減諦めたら？」

突き刺さる扶桑刀を引き抜き、坂本に返す。

「いや、私は絶対に諦めない！次は…明日こそは必ず勝つ！」

「まあ頑張りな、毎回俺の勝ちで決まりだろうけどな」

「なあ儀國、いつになったら私の魔力回路開いてくれるんだ？そろそろ大丈夫じゃないのか？」

シャーリーが不満げに言ってきた。

確かに坂本やシャーリーの魔力回路はまだ開いていない。シャーリーの言う通りもうそろそろ大丈夫とは思っけど…。

今まですっかり忘れてた。

「ねえ、私にも魔術教えてよ」

シャーリーに続き、ルッキーニも駄々を捏ね始めた。更に意外な増援が彼女達に加わる。

「わ、私も……魔術、教えて欲しい」



なんと、あのサーニヤまでも魔術を教えろと言ってきたのだ。  
いったい何故だ？

「さ、サーニヤ！？うゝ…サーニヤが教えてもらうなら私も教えて  
もらうからな！」

サーニヤが発言したことでエイラも加勢。

「あ、私も教えて欲しいです！！いつぱい憶えて、一日でも早くネ  
ウロイとの戦争を終わらせたいんです！」

宮藤も参戦。悪いが宮藤、そんなにいつぱい教えられる程習得して  
ないぞ…俺は。

「わ、私も。ルーン魔術、教えて欲しいです…」

男性が苦手なリーネまでも。そこまでして魔術を学びたいというの  
かお前達は。

まあペリー又は流石に…

「わ、私は少佐の為に役立てるのなら何だって憶えますわ！儀國さん、教えなさい！」

お前もかブルータス、じゃなくてペリーヌ！！

「おいおい、勘弁してくれよ…。俺が習得したのは殆どが攻撃系統だ、しかも偏ってる。それに補助系統は殆ど憶えてないぞ」

本格的に魔術を学びたいのなら世界魔術協会に入門すればいい……無理だけどな。

一応基本として学んだ強化と適当に学んだルーン魔術ぐらいは教えてやれないこともないが…やっぱり面倒だからパス。

そっついうのは俺の役割じゃなくて、あのババアの役目だ。

「うゝ…そっつだ！じゃあ私も勝ったら教えてくれる！？」

「へっ？」

ルッキーニの発言に思わず間の抜けた声を出してしまった。

ルツキー二に続き、シャーリーが続けて言葉を放つ。

「そうだな、タダで教えないって言うんなら…力ずくって方法もあるよなあ」

悪巧みを考えている笑みを浮かべ、ジリジリと迫ってくるシャーリーとルツキー二。

「……………あっ！」

何もない方向を指差す。こんなブービートラップに引っ掛かるワケが、

「「えっ!?!」」

引っ掛かった!?!単純だなこの二人、宮藤だって引っ掛かってないぞ。まあその隙に…

「あゝばよゝとつつあん!!どけーッ、ヤジ馬どもーッ!!」

逃げさせてもらおう。

「あ、逃げた！」

「追いかけるー！！」

シャーリーとルツキーニが追い掛けてくる。坂本も何か扶桑刀片手に追いかけてきた。  
せめて刀を鞘に収めろ、ちょっと八墓村思い出してしまつたぞ！

そんな感じで、ウィッチ達の追跡から逃れて大半の時間を過ごした。

この基地、ストライクウィッチーズの世界に来て大分時が経つた。  
エラーだらけのこの身体、今日の検査結果は：　　。

身体機能：正常：但し性能は120%から83%に低下。

魔力回路：エラー。57%回路に異常発生。

CODE：SATAN

「煉獄の赤」：使用可能。但しエラーにより制限あり。

・ランク　　C＋ランクからB－ランクに回復。

・消費魔力量　　エラー解消により消費量軽減。

CODE：BLUE

「終焉の蒼」：エラー解消により使用可能。

・使用後身体異常発生、及び魔力回路の暴走99・9%。

CODEEATER  
「暴蝕の黒」：エラーにより使用不可能。

ソードサマナー  
「剣極の調」：使用可能。エラーにより制限あり。

・エラー解消により製作時間1分から30秒に短縮。持続時間現状と変わらず。

・C-ランクからBランクにまで回復。

・剣の掃射 可能。

・「ルーン」の付加 現状通り。

・「ルーン」使用時の製作時間、エラー解消により製作時間短縮。

・「強化」の効果時間、エラー解消により1分に延長。再度使用時は25秒の集中が必要。

・ルーン魔術、使用可能。

ようやく半分ほどまでエラーが解消された。未だにエラーが解消される条件が分からないが、解消されていることに変わりない。素直に嬉しいと思う。

CODEEBLUE  
お陰で「終焉の蒼」が使えるようにまでなった。が使用すればそれは爆弾の導火線に火が付けられるというペナルティ付き。

完全な使用が出来るまで、使う時が来ないことを祈ろう。

今日の夜もいつものように鍛錬を行う。今日は何となく砂浜で鍛錬を行うことにした。

そして今日も恐らく、アイツはやってくるだろう。

「今日も鍛錬？」

「中佐か…」

噂をすれば何とやら。天敵のミーナがやってきた。

滑走路で鍛錬を行えばエイラが、砂浜で鍛錬を行えばミーナがやってくる。

それもほぼ高確率で。会わない方が少ない。

「あら、私だけ中佐？」

「まあ隊長ですから…」

アンタを呼び捨てにする勇気を今は持ち合わせていない。

仮に言えたとしても…その後確実にブチ殺されてDEATH END  
が目に見えている。

「で、そっちこそ今日も眠れなくて？」

「ええ、だからこうして散歩してたら貴方の姿が目に入ったのよ」

「さいですか…」

まあこれもいつものこと。ミーナがいつもの場所に腰を下ろしたのを合図に鍛錬を開始する。

今日も今日で剣を振るう、剣が消えればまた新たに製作し剣を振るう。

後ろではミーナがただジッと見つめている。エイラと違い、ミーナの場合は会話という会話がなない。鍛錬の邪魔をしては悪いと思っている為の気遣いか。これはこれで案外寂しい。

エイラとは鍛錬中にでもよく会話を交えていた。寂しいと思うのはそのせいかもしれない。

尤も、鍛錬中に誰かと喋りながら行うという行為自体間違っている。もしこの場に“あの人”が居たら…今頃怒られて飯抜きにされているかな…。

「…ねえ」

そう考えていたところに、ミーナが話しかけてきた。

ミーナ side

今日も砂浜へと向う。今日もやっぱり彼の姿があった。

魔術で生み出した剣を両手に、中空に振るう並行世界から来た魔術師…儀國 雅史の姿が。

「……………」

儀國 雅史という人間は結構いい加減な人間<sup>ひと</sup>…。

面倒臭がりで、上官である美緒やトゥルーデにも普通に名前で呼ぶぐらいだ。真面目な話でもふざけたりする。

けど、何故か彼だと許してしまう…そんな気持ちになってしまう。



私は未だに中佐としか呼ばれたことがないけど…。

そんないい加減な彼だけど、その実とても心が優しくて…己の身も顧みず助けようとする強い正義感が彼にはある。

あの日の夜、彼が身を挺して…己を犠牲にしてまで逃がしてくれたから、私もエイラさんもこうして生きている。

彼が私を…私達を護ると言った時、正直嬉しかった。けど同時に、今は亡き幼馴染の姿が彼に重なって見えた。

彼が人型…騎士型ネウロイの刃を受けて負傷し倒れた時、私は酷く動揺していた。治癒魔法で治療していた宮藤さんを急かしてしまった。

あの時の出来事を、不意に思い出してしまったから…。

そんな私を安心させる為にか、地に倒れている彼が手を握ってくれた。この時彼に意識はなかった、けどその手は私の手を優しく握ってくれたのだった。

あの時の彼の手は…とても暖かくて心地良かった。

そんな彼は直ぐに他の子達と打ち解けた。ペリーヌさんは未だに彼に対し敵対心をむき出しているけど…最近では若干和らいだと思う。

美緒は一日に一回、必ず彼と試合をする。今の所儀國さんには負けているけど、美緒はいつも楽しそうに儀國さんとの試合について話している。

剣術がどうか、攻め方がどうか。そうやって話している美緒は本当に楽しそうだ。

そんな彼にも…彼が居た世界で彼の帰りを待っている人達がいる。友人た恋人…あるいは婚約者等。

それに5歳の時に離れ離れになった…きっと何処かで生きている彼の両親もきっと、大きくなった儀國さんを迎えに行っている頃かもしれない。

「ねえ…」

「んあ？何？」

「貴方は…寂しくない？」

以前彼に尋ねたかったことを…私は今彼に尋ねた。

この世界では彼は天涯孤独。周りは自分の知らない世界。  
誰一人として自分を知る人間はいない。

いつも面倒臭そうに欠伸をしたりしているけど…きつと心の何処か  
ではきつと寂しさや悲しさを抱えている…。

「寂しい？俺が？」

「貴方の世界にも、貴方を心配して…待っている人がいるでしょう  
？友人、恋人、離れ離れになった両親だって」

「ああ、それはないな」

剣を振るう手を止めて…ハッキリと、表情一つ変えずに儀國さんは  
言い切った。

「前にお茶会で言っただけだよ…施設に預けられたって言うの嘘な  
んだよ。

両親は俺が5歳の時に死んだ…いや、正確には殺された…だな」

「えっ？」

私は耳を疑った。

殺された…？ いったい誰に？ 何の為に？

「まあ大人の事情ってヤツでな。あの時の俺は何が起きたのかさっぱり分からなかったけど…」

大学にいた奴らは本当の意味での友人じゃないし…。あっち側でも…友人って言えるヤツはいなかったかな…。

後、恋人は元から居ないから。おっと笑うなよ？」

彼は特に興味なさ気に自分の事を話していく。その表情には悲しみも寂しさも一切見られない、普通に世間話をするように彼は喋っていた。

「だから、あっちの世界でもある意味俺は天涯孤独だな。

大学に行ったのは単なる学校って言うのがどんなのかって言う興味と暇潰し。

だから別に寂しいとかは思っていないし…何より帰ろうにも方法が分からないしな」

「儀國さん…」

「って、なんでアンタがそんな辛気臭い顔してんだよ…」

そう言つて苦笑いを浮かべる儀國さん。

本当に…貴方は何も思わないの？

何故、両親の死を悲しまないの？

何故、友人がいないことに孤独を感じないの…？

何故、元の世界に帰れるか分からない事に不安を感じないの…？

いつたい、貴方は何故…。

「でもまあ…アレだ」

空を見上げて、儀國さんは静かに口を開く。

「とりあえず今は、帰れなくてもいいかなって思ってる」

「え？」

「中佐と約束したからな…俺が護るって。アンタが約束を破棄するまでは、ちゃんと護ってやるよ」

「儀國さん……」

「……さてと、そろそろ

ッ！？中佐、逃げろ！！」

彼が叫ぶ。この時彼が何を言っているのか理解出来なかった。

## A c t 9：終焉の蒼（偽）「巻」（後書き）

A c t 9でした。

今に始まったことじゃないですけど…やっぱり書くのって難しいですねえ。

次の更新は…火曜日にはしたいところです。

**Act9：終焉の蒼（偽）「弐」（前書き）**

Act9「弐」です。

今回も戦闘描写ありますが…なんか微妙な感じに…。



## Act 9：終焉の蒼（偽）「弐」

理解したのは彼が叫んでから数秒後、この砂浜に異常が起きた時だった。

「こ、これは…」

砂浜に突然描かれる大きな魔法陣。それは私達ウィッチの魔法陣と似ている…けれども呪文や図式は初めて眼にするものだった。

そしてその魔法陣の外に出ようとすると、そこから先に進むことが出来ない。まるで見えない壁があるかの様に。

「これは…まさか結界か！？クソッ！やられた！」

「ぎ、儀國さん、これはいつたい…！？」

「…敵さんのお出ました」

彼が正面を見据える。その先に居たのはあの騎士型ネウロイだった。

「ネウロイ！？」

「まったく…神出鬼没なヤツめ。どこから来た？」

彼が不適な笑みを浮かべる。けれどもその笑みには余裕が一切感じられず、焦りが見えていた。

「どうやってこの基地内に…！？」

「さあな。けど…どちらにせよアイツを斃さない限りここから出られないぞ」

彼の両手に剣が現れる。戦闘態勢に入り、騎士型ネウロイをジッと見据えた。

「儀國さん！？」

「下がっている中佐。サーニヤ達も今頃は気付いている筈だ、それまで…なんとか持ち堪えてみせる！」

砂浜を蹴り、儀國さんは騎士型ネウロイへと向っていく。騎士型ネウロイも両手から赤い輝きを放つ刃を現し、儀國さんを迎え撃った。

夜の砂浜に響き渡る金属音、白銀と赤の閃光が中空を何度も奔り、交わる度に火花を散らせる。

「くっ…コイツ！前より強くなつてやがる！」

騎士型ネウロイの攻撃を防ぎ、弾きながら儀國さんは苦しそうに言った。確かに、あの時見た時よりも動きが早くなっている。

私は目で追うのがやっと。儀國さんはあのスピードになんとかついていっている。

「くうっ！この野郎！！」

騎士型ネウロイの連続攻撃。その一撃の重さは、ぶつかり合う度に鳴り響く金属音を聞けば分かる。現に儀國さんが防戦一方になりつつあった。

「この…調子に乗るなよ！！」

儀國さんも負けじと剣を振るっではいるが、その顔には徐々に疲労の色が見え始めていた。相手はネウロイ、儀國さんが魔術師だからと言っても元は人の子。

私達人間と違ってネウロイにスタミナなんて概念は…きつとない。だからこのままだと儀國さんが殺される…！！

「くっ…」

ミーナは強く拳を握り締めた。

何も出来ない自分が悔しい、目の前では必死にネウロイと闘っている儀國さんがいるというのに……隊長である自分は何も出来ていない。

ストライカーユニットも、銃もなければ……本当に私はただの無力な人間だ。

何とかして儀國さんの加勢に入りたい、その気持ちは強くあるというのに……何も出来ないという現実が突き付けられる。

護りたい者が、力が無いが故に護れない。

その事がただ悔しくて……私は儀國さんとネウロイの戦いを見ているしかなかった。

「ッ!？」

大きな玉砕音が聞こえる。数多に宙に舞う白銀の刃の破片、儀國さんが手にしていた剣が破壊された。

その間にも、騎士型ネウロイは儀國さんにビームブレードを振るう。

「儀國さん!!」

「くっ……!!」

儀國さんは咄嗟に後方に大きく飛び退き、ビームブレードの斬撃を何とか回避した。そして回避したと同時に右手を大きく薙ぎ払う。

儀國さんが得意としている「煉獄の赤」が騎士型ネウロイに襲い掛

CODE: SATAN

かったのだ。

初めて見たあの時に比べて火力も上がっている。放たれた赤き炎は騎士型ネウロイを包み込んだ。

「儀國さ…ッ!？」

「……チッ!」

儀國さんが舌打ちを零す。

完璧には避け切れなかった。

裂かれた服の袖、曝け出された肌は綺麗に切り裂かれ、鮮血を流す。腕を伝い、指先に到達して砂浜へと落ちていく赤い雫。

轟つと音が鳴った。騎士型ネウロイを包み込み激しく燃え上がっていた炎が縦に裂かれた。

そしてその中からは騎士型ネウロイが姿を現す。全く堪えている様子がない。

「……やれやれ、やるか。  
解除早々使うなんてな…ったく」

儀國さんの目つきが変わる。

刹那、私の脳裏にあの日の夜の出来事が甦った。

また儀國さんは自分の身を犠牲にして私を護るつもりだ。あの時もそう、今みたいな鋭く…氷の様に冷たい眼をしていた。だから今回もまた…

「ダメ！儀國さん！」

「その目に焼き付けろ、そしてその身を以って知れ、蒼が齎す終わりをな！」

CODE::BLUE      set  
「終焉の蒼」…解放！！」

突如、儀國さんの左腕から蒼い炎が燃え上がった。

「綺麗…」

左腕から燃え上がる蒼き炎を見て、ミーナは見惚れていた。

炎は通称赤色だ。儀國さんが扱う魔術…「煉獄の赤」CODE::SATAN も勿論赤の炎。

けど、「終焉の蒼」CODE::BLUE と呼ばれた炎は赤ではなく蒼色。

その蒼き輝きは宝石のように綺麗で、思わず見惚れてしまう程の神々しさがある。

けどその反面、冷酷で無慈悲さを感じさせるものがあつた。そしてあの蒼い炎…間違いなく「煉獄の赤」CODE::SATAN よりも…遥かに強力な炎。

「燃え尽きる！！」

左腕を地面に突き刺す。すると騎士型ネウロイに向って一直線に蒼き炎柱が砂浜の上を奔った。

騎士型ネウロイも流石にこれは予測してなかったのだろう。回避行動に出たが、反応が遅れていた。その結果蒼き炎柱に左腕が飲まれた。

炎柱が通過する。そして飲まれた左腕は何処にもなかった。燃える音も、焼けた臭いも、煙もないまま…あの蒼い炎によって一瞬にして燃え散らされたのだ。

焼き焦げた跡が痛々しく残されている。更にその跡から蒼い炎が発生し、騎士型ネウロイの身体を飲み込もうとした。

これが…「終焉の蒼」…蒼い炎の力。

「……………」

ミーナは「終焉の蒼」に恐怖を感じていた。

一瞬にして燃やし尽くす程の火力。触れれば最後…決して逃れる事の出来ない、回避不可能の蒼い悪魔の炎。それを有し、操る魔術師…儀國 雅史。

彼が敵ではなくて本当によかった、心の底からそう思った。

「ッ！！！！！！」

騎士型ネウロイが信じられない行動に出る。左腕の傷跡から身体に移ろうとしている蒼い炎、すると右腕のビームブレードで左肩を一気に両断した。

「なっ…！」

噴出す鮮血、切断された左肩部。砂浜に落ちたと同時に左肩部は蒼き炎に包まれ跡形もなく消滅した。

「コイツ…生意気な真似しやがるな」

「ネウロイに…ここまで高い知能があつたなんて……」

咄嗟に左肩部を切断して蒼い炎が全身に移るのを防ぐ。普通の人間ですら同じ状況に陥った時、冷静な判断が下せないだろう。だがこのネウロイはそれをやってみせた。

そして直ぐに左腕が修復される。相手はネウロイ、コアを破壊しない限り何度でも再生する。

だが、他のネウロイに比べて再生速度が極めて遅い。儀國さんの「CODE…BLUE終焉の蒼」と呼ばれた蒼い炎を受けた影響だろうか…。

「怪物が…。だったら、今度こそ跡形もなく燃やし尽くしてやる！  
！」

蒼い炎が再び放たれる。と、砂浜に描かれていた魔法陣が消え、騎士型ネウロイは獣のような咆哮を挙げながら上空へと飛ぶ。標的を失った蒼い炎はそのまま消滅。



そして騎士型ネウロイは、あの時の様にそのまま姿を消した。

「なんとかなったな…」

安堵の溜息を漏らし、儀國さんが言う。そして糸が切れた人形のよ  
うに、その場に両膝を着いた。

「儀國さん…!!」

私は儀國さんの元へと駆け寄った。あの時の様に重症は負ってない、  
けど右腕は怪我をしている、すぐに治療しないと…。

「……中佐」

不意に、彼が私を呼ぶ。顔からは冷や汗が滝の様に流れ出て、苦笑  
いを浮かべているのも辛そうな表情を浮かべている。

そんな表情で、儀國さんはゆっくりと口を開いた。

「悪い、説教は後で聞くからさ…。まずは、左腕の治療の方…よろ  
しく頼むわ…」

そう言つて儀國さんは力なく倒れた。左腕で燃え上がっていた蒼い炎が消える、と消えたと同時に肉の焼き焦げた臭いが立ち込めた。

「こ、これは…」

蒼い炎が燃え上がっていた儀國さんの左腕。蒼い炎が消えた今晒される彼の左腕は重度の火傷を負っていた。

「中佐!!」

後ろから砂浜を踏む沢山の足音と、美緒の声が聞こえる。

「美緒!!」

「うっ…これは酷い火傷だ。 宮藤! 直ぐに治療を!! それから医務室へと運ぶ!!」

「は、はい!!」

宮藤さんが直ぐに治療を始める。誰もが心配そうな表情で意識を失った儀國さんを見守っていた。

**A c t 9：終焉の蒼（偽）「弐」（後書き）**

A c t 9「弐」でした。

二回目の…いや、三回目かな？の戦闘描写ですけど…やっぱり闘うシーンを書くのは本当に難しいですよねえ。

どう表現したらいいとか、メツチャ悩みます。悩んだ結果これですけどね…。

以上、A c t 9「弐」でした。

すわっ！！

## Act 10: 代償「巻」(前書き)

Act 10「巻」です。

どうでもいいですけど...ロード・オブ・シャドウ面白いですよね。

## Act 10：代償「壱」

懐かしい夢を見た。

初めてあの世界へと足を踏み入れた運命の日。地面には無造作に転がる数多の死体、その死体から流れ出た血で形成された赤い水溜り、その中に佇む…ガキの頃の自分自身。

手にした刀の刃は血で染まり、その刀を握る手や顔…全身に返り血を浴び赤に染められている。

地獄絵図、誰もがそう言っても可笑しくはない世界に一人の女性が現れた。

「おやおや、まさか…こんなチビガキがコイツ等を殺ったなんてなあ…」

女性が不適な笑みを浮かべる、それをガキの俺はジッと見据える。新たな敵が来た、そんな感じで女性を見据えて血に染まった刀を構える。

「おっ、いっちょ前にやるってか？面白い、お前の命私が貰ってやるっ…全力で掛かってきな！！ガキンチョー！！」

その言葉を合図に女性は腰に差していた一振りの太刀を鞘から払い、ガキの俺は女性へと向って飛び掛かった。

「ッ……………」

夢から目が覚める。

開いた視界に映るのは無機質な天井、二度目のお世話となる医務室の天井だと直ぐに理解出来た。

「…随分と懐かしい夢を見たな」

十数年前の…あの日の出来事。

表の世界から裏の世界へと足を踏み入れた…運命の日。

それを、夢として見るなんて…。

開いた窓から吹く心地のよい微風、その窓の向こうの世界…今日も今日で快晴の青い空が広がっていた。

「……………」

ふと、左腕を見る。左腕には何重にも包帯が巻かれていた。

CODE・BLUE  
「終焉の蒼」の使用したが為に負った代償…。

腕は何とか、指先は動かせる…感覚も正常。ただ指先を少しでも動かす度にかかなりの痛みが伴ってくる。

「メチャクチャ痛いな……………」

それはまあ我慢するでしょう。本来なら左腕が消滅していたかもしれない。なかった。

左腕はあるし感覚もちゃんとある、痛みぐらいは甘んじて受けよう。

そして治療してくれた筈の宮藤にも後で礼を言わないといけない。

「それにしても…」

思考を切り替える。考えるのはあの騎士型ネウロイについて。

昨晚の闘いで分かったことがある。ネウロイの癖に結界を…魔法を

使ったということ。ただのネウロイではないとは分かってはいたが…魔法を使ってくるとは予想外だった。

ますます謎が深まったな…。

「まっ、いいか。それよりも腹減ったから飯でも食いに」

突如、世界が傾く。そして身体に叩き付けられる衝撃が伝わる。

「グッ……」

否、起き上がろうとした瞬間身体に力が入らず、そのまま床に倒れてしまった。

起き上がろうとするも力が満足に入らない。

CODE:BLUE  
…「終焉の蒼」を使用したことで課せられたペナルティ。覚悟はしていたが、ここまで酷いとは…。

「ハア……ハア……ッ」



なんとかベッドに這い上がり、呼吸を整える。そして今の自分の身体の状態を早速調べた。

身体機能：異常発生：大幅な筋力低下。83%中28%まで低下。

魔力回路：94%回路に損傷を確認。魔力回路の自己修復作業開始。

魔力回路の自己修復作業中により、魔術の使用不可能。

「ハッ……ここまで酷いとか。勘弁してくれよ……」

CODE:BLUE

身体機能はガタ落ち、魔力回路は「終焉の蒼」を使用した事により暴走、その結果魔力回路を全壊には至らなかったものの、損傷させてしまった。

現在は自己修復作業を行っているが、いつ頃終わるやら。魔力回路が修復されるまでの間は一切魔術の類を使用できない。

こんな状態の中、もしあの騎士型ネウロイが来たら……確実にこの基地は落とされる。

「……なんとかしないとな」

脳が動けと指先から全部位に命令を送り、命令に従うも動かない身体に鞭を打つ。

ひたすら動けと、ただそれだけを命令し続ける。

筋肉が、骨が軋む様な音が聞こえているが…そんなものどうでもいい。今はただ動くこと、これが出来さえすればいい。  
身体能力なんてものは直ぐに回復する、あの時だってそうだ…。

だから…とりあえず、こんな時は飯だ。栄養補給をしっかりとしない  
と治るものも治らない。まずはしっかりと飯を食って、それから考える  
としよう。

…あのネウロイに対抗できるのは、恐らくこの世界で俺ただ一人だ  
ろう。

それに俺自身、ヤツとのケリを着けなければならない。

ここまで傷だらけにされたままでは、一応俺のプライドに触る。  
アイツは…俺の手でボコボコにして葬り去る…！

「ぐおおおおおっ！！メツチャ辛いッ！！！！だが諦ねえぞ俺は  
…。  
ふるえるぞハート！燃え尽きるほどヒート！！おおおおっ、刻む  
ぞ魔力のビート！」

ミーナ side

翌朝、私達は早速ブリーフィングルームにて会議を行った。

あの新型ネウロイについて、今後私達はどうしていくか…。

「それで、儀國の容態はどうなんだ？」

「とりあえず命に別状は無い。だが…左腕の火傷が思った以上に重症らしく、下手をすれば二度と使い物にならないそうだ…。今宮藤に様子を見に行ってもらっているが…」

トゥルーデの問いに美緒が答える。その顔には悔しさが現れていた。

昨晚…あの騎士型ネウロイの戦いの時、儀國さんが見せた蒼い悪魔の炎…「終焉の蒼」。

一瞬にして灰すらも残さず燃やし尽くしてしまう蒼い悪魔の炎は、騎士型ネウロイを退け、私は生き延びた…。

その代償として、儀國さんの左腕はもう二度と動かないかもしれない程の傷を残した。

宮藤さんの治癒魔法を以ってしても、完全に回復させることは出来なかった。宮藤さんは酷く落ち込んでいたけど、彼女はよくやってくれた。

「儀國さん……ッ」

強き力には相応の代償が伴う…。自らの左腕を代償にして発現させる蒼き悪魔の炎、儀國さんはその事を承知で私を護ってくれた。あの時交わした約束を守る為に…。

私は何をしているのかしら…。彼がこの基地に来てから、私は彼に護られてばかりいる。最初の時もそう、彼が私を庇って代わりに負傷した。

私は何も出来なかった、昨日もただ見ていることしか出来なかった。何も出来ない自分自身が…許せない、悔しい…。

「けど、私達と同じ魔法を使うネウロイがいるなんて…」

リーネさんが口を開く。

そう、リーネさんの言う通りあのネウロイは異常過ぎる。魔法を使うネウロイなんて今までに現れなかった。

あの時砂浜に描かれた、図式も呪文も全く見た事が無いものだけだ……間違いなく私達ウィッチと同じ魔法陣。

そして騎士型ネウロイの固有魔法の効果は、儀國さんが昨晚言っていた言葉……「結界」。

恐らくは、対象物を魔法陣内に閉じ込める魔法と見ていいと思う。

「リーネの言う通り信じられん話だが……。今までのネウロイよりも遥かに手強いのは確かだ」

「それに、あの儀國ですら苦戦するぐらいだ。我等の場合……苦戦に持ち込めるかすら分らん……」

誰もが美緒とトゥルーデの言葉を聞いて口を閉ざした。

あの儀國さんですら苦戦した相手を、私達は満足に戦うことが出来るのか……そう問われた時、首を縦に振る事が出来ない。

闘っていないでも分かる。あのネウロイは強い、今まで撃墜してきたネウロイよりも…遙かに。高い知能、戦闘能力、固有魔法…今までにない新しいタイプのネウロイ。

そして皆理解している。

あのネウロイと闘えるのは…、斃せる可能性を持っているのは…、儀國さんだけであるということ。

彼以外に斃せるウィッチは…恐らくこの世界にいない。だからと言ってまた儀國さんを闘わせるワケにはいけない。彼にだけ危険な目に遭わせる事だけは、絶対に避けなければならない。

「た、大変です…！」

その時、宮藤さんが息を切らしながらブリーフィングルームに飛び込んできた。

「どうした宮藤…？」

「ぎ、儀國さんが…医務室にいません！」

その言葉に誰もが席を立った。

「何だと！？他の者は見ていなかったのか！？」

「ほ、他の整備兵の人にも聞いたんですけど誰も見ていないって。今皆で儀國さんを探してもらってます！」

「あのバカ…いったい何処に行ったんだよ！？」

エイラさんが拳を握り締めて怒る。その隣でサーニヤさんは心配に表情を曇らせていた。

「…皆さん、会議は一度中止します。まずは儀國さんが何処に行ったのか、私達も搜索に当たります」

「…了解ッ！！」「」

Act 10：代償「壱」（後書き）

Act 10「壱」でした。

そろそろ番外編とか書くべき…なのかなあ。クリスマス編とか正月編とか。

気が向けば短編として書くと思います。

すわっ！！



Act10:代償「弐」(前書き)

Act10「弐」です。

## Act 10：代償「弐」

何とか食堂の入り口前へと辿り着く。

「ハア…ハア…」

歩くのが精一杯、今はたまたま見つけた棒を杖代わりにして何とか歩いている状態。

一歩出すたびに、何キロという長距離を走ってきたかのような疲労感が身体に加わる。

「ハア…も、燃え上がれ！俺のコス…じゃなかった、魔力ッ！」

意味も無く叫んでみる。特に意味はないし、何かが起こるワケでもない。ただ言ってて虚しいし痛い…。

「見つけた…！」

…何かが起きたことは起きた。背後から聞こえてきたのはサーニヤの声、そしてその後ろからは大勢の慌しく地を蹴る音が。

「儀國！お前、何やってるんだよ！？」

「……腹減ったから飯食おうとしただけだよ。心配すんなエイラ、とりあえず身体は動くし、何の問題もな」

片膝の力が抜けてそのまま地に着ける。そろそろ脚が限界のようだ。

「そんな状態なのに何が心配しなくていいだ！さっさと医務室に戻るぞ！」

バルクホルンの怪力発動、そのまま抱えられて医務室へと強制連行される。

流石はバルクホルンの怪力、鉄骨すらも持ち上げられるだけあり、俺なんか全然重く感じないんだろう。

…が、女性に抱えられる男性、傍から見れば何とも格好悪い絵だ…。しかもお姫様抱っこ！

歩くのが無理に近いから有り難いといえば有り難いが、もっと違う体位で抱えてくれないだろうか？

とりあえず目線で訴えてみる。

「な、なんだ？」

顔を少し赤くしただけで終わった…。

「いや、別に…もう何でもいいです」

そもそも言ったところで黙れとか、そんな権利今のお前にはないと言われそうだから止めた。

遠ざかっていく、食堂への入り口。早く飯が食いたい…そんな事をふと思った。

エイラ      s i d e

儀國が見つかった。医務室から居なくなっただって聞いて心配したけど…見つかったよかった。

今は医務室のベッドで横になっている。ベッドの周りには中佐や宮藤達が、勿論私も居る。

皆怒っていた、私も皆と同じで怒ってる。怪我人の癖に勝手に医務室を抜け出したこと、歩くのすら満足いかない状態なのに一人で動いたこと。

そんな儀國の身勝手な行動に、私達は怒っていた。

「とりあえず、目が覚めてよかったわ。怪我の具合は？」

「いやあ、そりゃもう全然余裕」

「儀國さん、正直に言いなさい」

中佐が儀國に言う。いつものブラックスマイルじゃない、あの顔は……本気で怒っている顔だ。

流石の儀國もいつもの怒りと違う中佐に、一瞬だけ驚き、直ぐに表情を戻して静かに答えた。

「……正直動くのがメチャクチャ辛い。左腕は指だけなら満足に、腕

は辛うじて…。動かすたびに痛むけどな…」

二度と動かないかもしれないって言われてた左腕。指も動かし腕自体は何とか動かしている。重症なのは重症、でも…とりあえず動いてよかった。

私はそう思った。

「それにしても、あのネウロイ…今度あつたら絶対に跡形もなく燃やし尽くしてやる」

「その件ですが…もうあの蒼い炎、CODE:BLUE「終焉の蒼」」を使うことを禁止します。これは命令です」

「ハア？何で？」

「何でって…分かっているでしょう！？確かに貴方のお陰で私は生きている、けど…あの炎を使ったことで貴方の左腕は二度と動かなかったかもしれない程の火傷を負ったのよ！？」

中佐が声を挙げて儀國を怒った。

私は実際に目にしてないけど…中佐の話を聞いていたらとんでもない炎らしい。そして左腕が二度と動かなくなるかもしれない程の火ス

傷を負う。

そんな危ない炎なら中佐の言う通り、二度と使わないでほしい。今はちゃんと左腕もあるし、動いているけど…。

もし、次に使った時左腕自体が燃え尽きてしまったら…、そう考えると余計に使って欲しくない。

「ああ、それなら問題ない。今の俺はエラーだらけだからな、それでだよ」

「えっ…？」

「どういう事だ？ 儀國」

大尉が儀國に尋ねる。

「前に言っただろ？ この世界へと来た時にエラーのせいで、俺は本来の力を振るうことが出来ないって。」

本来の俺なら「終焉の蒼」CODEE...BLUEを使っただって何の問題もない。けど今は使用することでペナルティが発生する状態みたいなんだよなあ…」

「つまり、貴方は左腕が再起不能になるかもしれない事を最初から分かっている…」

今度は中佐が儀國に尋ねた。

「まあそうだな。仕方ないだろ？あの時アイツを斃せるのアレぐらいしかなかったんだよ。まあお陰で今は歩くのもやつの状態、魔力回路は損傷してその修復作業中…おかげで魔術が使えないけどな」

カラカラと笑いながら儀國が答える。瞬間、中佐が儀國の頬を強く叩いた。

医務室に頬を弾く音が響いて、静かに消えていく。皆中佐の行動に驚き口を閉ざした。

儀國も驚いた顔をして…直ぐにいつもの表情へと戻した。

「……………」

「どうして貴方はそう吞気でいられるの！？貴方の身体のことなのよ！？何故貴方は平気で無茶を」

「…あんなの、無茶でも何でもねえよ」

「えっ？」



その言葉を聞いて私は驚いた。

左腕が動かなくなるかもしれないぐらいだったのに…無茶じゃない？  
じゃあ儀國は…もっと前から今回よりも無茶な事をしていた？

「あれで無茶じゃないって…じゃあ今までどんな無茶をしてきたの？」

「そうだな…過去に行いから例を挙げるとして…」

中尉の言葉に、儀國はそつと眼を閉じて、昔を思い出しているかの様な…懐かしんでいる顔でゆっくりと語った。

「協会に入門して魔術の修行に励んでいた時期だな。その時でも何度も命を落としそうになったなあ。

あの蒼い炎を会得する時全身に大火傷を負って、それこそ自身の炎によって燃え散らされるか…みたいなこともあったし。

人間に始まり、人外や同じ魔術師達と何度も闘って闘って、闘い抜いて…その度に死の一步手前の重症を負って生死の境を何度も彷徨った。

その度に周りに居た有能なやつ等のお陰で何とか生きてる、協会に居た頃はそうやって過ごして来たな」

腹を刺されるわ挟られるなんてこともあった、それぐらいしないと俺は強くなれなかった…と儀國は話した。

その話を聞いて、皆啞然としていた。私だつてそうだ。

…語られた儀國の過去の無茶。どれもこれも死んでも可笑しくない内容ばかりだったからだ。

儀國は…あつちの世界でもそんな無茶してたのかよ…。

「だからあんなのは無茶でも何でも無い、現にホラ…俺ちゃんと生きてるだろ？」

「…それでも、私達からすれば無茶であることに変わりません！いいですか、二度とあの蒼い炎を…」CODEE::BLUE「終焉の蒼」を使うことを禁止します！」

「嫌なこつたい」

中佐の命令にも関わらず、儀國は首を縦に振ろうとしなかった。いつもと同じ、何処かふざけた態度で答える。

「儀國さん！！いい加減に」

「…極力使わないのは約束出来る。けど、いざって時には絶対に使う、完全に使わないって約束はしないぞ。例えば、隊長のアンタに言われてもな…」

「…………ッ」

「儀國…………」

中佐を見据えながら静かに、そう言った。普段の儀國なら中佐のオラに負けて渋々頷いているのに、今回ばかりは承諾する姿勢を見せない、ジツと中佐の眼を見据えている。

その眼には一切揺らぎは無い…固い信念の炎が宿っているように私の目には映った。

「…いいでしょう。ですが、もう二度とあんなことしないで下さい」

「へいへい、努力しますよっと」

中佐が折れ、一先ず使用の頻度を軽減するということで話は終わった。

「さて、とりあえず話はこれでおしまいにしましょう。儀國さん、貴方は怪我人なんですから、ちゃんと療養するように」

「了解ですよ中佐」

皆が医務室から出て行く。出て行く前、誰もが心配そうに儀國を見ていた。

そんな儀國は大丈夫と、小さく笑みを浮かべて右手をヒラヒラと振って見送っていた。

「……………儀國」

「ほら、エイラさんもサーニヤさんも」

中佐に言われて私はサーニヤと医務室を後にした。

各々部屋から出て行く。部屋を出る前誰もが必ず此方を振り返り、

そして部屋を出て行く。

サーニヤとエイラに限っては長く居たが、ミーナによって部屋を出される。そして最後、ミーナが部屋を出ようとして…

「…儀國さん」

「んあ？何？」

「…儀國さん、有難う。貴方が護ってくれたから…私は死なずに済んだわ」

背中を向けたまま礼を述べられた。その声には感謝と同時に罪悪感が感じられた。

「…ああ、気にするな。アンタが無事でよかったよ、中佐」

「……………」

ミーナは何も言わず、部屋から出て行った。それを見送った後、ベッドに寝転がり天井をぼんやりと見つめた。

## Act10：代償「弐」（後書き）

Act10「弐」でした。

さてさて、次話…正確にはAct11「弐」では少し作者夢幻遊戲の妄想が少し爆発します。

あのキャラにこんな事を…ウエへへへへ、みたいな感じになります。

あ、念のため言いますけど決して卑猥なことではありませんよ？  
今作品はR-18ではないので。

すわっ！！

Act 11:療養生活「壺」(前書き)

act 11「壺」です。

どうでもいいですけど...、The 3rd Birthday面白  
いですよね。

## Act 11：療養生活「壱」

今、俺は医務室にて横になり天井をぼんやりと見つめている。

「ハア…なんでこんな事になったんだろうな……」

誰に問うわけでもなく、小さく呟く。

あの子の事だ。ミーナより暫くは医務室にて療養するようにと、命令が来た。

そして俺が再び無茶をしないように…よくなるまでの間、監視の意味を含めて交代制で看病するらしい。

勿論断わった、そんな必要は無いと言われた通り大人しくしている、と。

が、満場一致で可決。反発するとミーナがブラックスミイルを浮べ、他の皆からは大人しく言う事を聞けと怒られた。

サーニヤからも、言う事を聞かない俺は嫌いだと言われた。

…何故だろうか、サーニヤに言われて物凄くショックを感じた。



「看病……か」

……思ってみると、誰かに看病されるという事なんて久し振りではないか？

あっち側……世界魔術協会に居た頃はあのババアがよく看病してくれた。魔術の指導は鬼の様な癖に、看病の時は優しく……そう、まるで母親のようだった。

俺にとって第二……いや、第三の母親と言っても違和感はない。

第二の母親は……まあ大雑把と言うか何とやら、とてもじゃないがアレはダメ母親だ。

看病らしい看病はしてもらった記憶が無い。

怪我したら唾付けときゃ治る、そういうタイプの人間だったけど、俺に生き方を……育ててくれたのは事実。

二人共、今でも俺にとって大切な母親的な存在だ。

「……………」

果たして彼女達はどんな看病をしてくれるのか…、一部のウィッチ達に不安を感じながらも、一先ず寝た。

## 《午前》

「おはようございますー！」

「お、おはようございます」

最初にやってきたのは宮藤とリーネの二人組みだった。二人共白いエプロンに身を包み、銀色のカートを押して部屋へと入ってくる。

「ああ、おはようさん。あ、なんかいい匂いすんな」

「朝ごはん持って来ました。儀國さん、和食が大好きだと言ってましたから朝は和食にしました。納豆も沢山ありますよ」

「マジでか！？そりゃ有り難い、サンキューな宮藤」

いい子の宮藤の頭を撫でようとする…が、身体機能に異常が出てい

る今それをするのも一苦労だった。

「い、いいですよ！それに私、もう子供じゃありません！！」

と、言いつつも気持ち良さそうにしている。

未成年である内は皆子供なのだ、宮藤も俺も含めて。

「じゃあはい、儀國さん」

「えっ？」

スプーンに掬って口へと持ってきてくれる。

つまり…あれか？食べさせてくれると？

「いやいや、流石にそこまでしないでいいから！！」

気持ちは嬉しいが流石にそれは気恥ずかしい、一苦労はするが自分で食べられる。

が、宮藤は退く姿勢を見せなかった。

「ダメです！儀國さん病人なんですから、大人しく言う事聞いてください！さっきだって、撫でるのも辛そうにしてたじゃないですか

！？」

宮藤の発言に、リーネはコクコクと首を縦に振る。

「いや、しかしだなあ……」

「言う事聞かないとミーナ中佐に言いますよ！？」

「げ、ここでヤツを出すか……」

もしここで介護を拒否したら確実にミーナに報告が行く。そしてその後はブラックスマイルを浮かべたミーナが……お、恐ろしい！考えただけでも恐ろしいぞ！

「……わかったよ……分かりましたよ宮藤軍曹」

仕方なく、宮藤の介護を受けることにした。年下の女の子に食べさせてもらっている俺……傍から見れば羨ましい光景ではあるだろう。が、されている俺は全く落ち着かない。

「あ、あの……儀國さん！これもよかったら……」

そう言ってリーネもスプーンで掬って食べさせてくれる。

嬉しさ増加、恥ずかしさ倍増。そしてリーネの頭も撫でる。

いきなり撫でたことに驚いていたが、すぐに宮藤と同じ様な反応を示してくれた。

こうして二人の介護を受けながらの朝食は終わった。と、同時に早く腕だけでもよくなってくれと心の底から思った。

「あ、食べ終わったら治療しますからね。一日でも早く怪我が治ってもらいたいですから」

「あ、ああ…悪い」

朝食と宮藤の治癒魔法による治療が終わった後、再びやることがないからぼんやりとする。PSPとか携帯ゲーム機が今は欲しい気分だ。

「あゝ退屈だなあ……マジで退屈だなあ……」

やることなく暇、せめて退屈を紛らわせる為に本とか用意しておいて欲しい。

尤も、この世界にマンガなんてきつとないから……。本があっても結局読まないと思う……。

「おゝっす！元気にしてるか？」

「雅史」

シャーリーとルッキーニ登場。また騒がしいのがやってきた。

「とりあえず元気だし生きてるよ」

「そりゃよかった」

「で、何の用だ？」

「おいおい……あたし達がここに来たってことは、お見舞いしかない

だろ？」

「冷やかしの間違いじゃないのか？」

「あ、ひつどいと言っな」

シャーリーと笑い合う。

「おい、元気？」

と、そこにハルトマンがやってきた。  
珍しい来客者に、思わず我が眼を疑う。

「……って何その眼は。私の顔に何かついてる？」

「いや、ねえ……。なんつーかその、中尉は昼過ぎまでグータラしてるイメージが」

「ハッハッハ！ 違うないな」

俺の一言にシャーリーが笑った。

だって、あのハルトマンが。朝いつも寝ていてバルクホルンに叫ばれても尚寝ていられるあのハルトマンが…。朝に起きて活動しているという事自体が奇蹟に近い。

今日はネウロイ出現の警報機も鳴っていないし…。

「むう、失敬な！私だってちゃんと起きる時は起きるってば！それと、私の事は中尉じゃなくてハルトマンかフラウでいいよ」

「じゃあハルト饅で」

「…なんかその発音だと食べ物みたいに聞こえるんだけど、気のせい？」

「で、何か用か？怪我人の所に来たって退屈なだけだろうに」

ハルトマンが来たことには気になっていた。  
その理由を尋ねると、可愛らしく笑みを浮かべ

「ほら、私ってあんまり儀國と喋ってないでしょ？だから今日は儀國とお話でもしたいな〜って」



「…その発言には大部分が嘘で構成されているな」

「な、なんで!？」

「そうだな…答えはバルクホルンに腐れ切った異空間とまで言われた部屋を整理整頓しろと無理矢理叩き起こされて、でも片付けは面倒だから隙を見て抜け出してきた。  
もし見つかったも俺の看病とか理由付ければいい…ってか？」

「うつ…」

「凶星が…、大方そんなことだろうと思った。ハルトマンの生活パターンをアニメを通して見ていれば、大体は想像は付く。」

「ぎ、儀國って心まで読めるの？」

「いや、洞察力の賜物って言うておく。まあ退屈してたからいいけどな…。」

「バルクホルンが来るまでゆっくりしていけば？」

「ホント!？ありがとう儀國〜!」

思えば、ハルトマンとはあまり会話を交わしてなかったから……。  
丁度いい機会だろう。

一時間ぐらい、シャーリー、ルッキーニ、ハルトマンの三人と喋る。

内容は殆どが俺に対する質問ばかり、俺が居た世界はどんな世界か……世界魔術協会とはどんな所なのか等。

一つ一つ話すと三人は時に驚き、時に笑い、楽しそうに俺の話を聞いていた。特に最年少のルッキーニが特に関心を示していた。

外観相応、眼をキラキラと輝かせながら。シャーリーやハルトマンよりも俺の話に対して多く質問していた。

「ふーん、なんか儀國の世界って楽しそうだね」

「そう……だな」

「あゝあ、早く戦争が終わって……儀國の世界みたいになったらいいのに」

そう言うハルトマンの表情は、何処か悲しそうだった。

「…心配するなよ」

「えっ？」

ハルトマンの頭を撫でる。朝食を食べたおかげか、宮藤達の頭を撫でた時よりも苦勞しなかった。

「俺がこの世界にいる間は、俺もネウロイをぶっ斃してやる。何十機だろうと何百機だろうと、全部俺が片付けてやるさ。

一日でも早く戦争を終わらせないと。だから、お前はそんな顔すんなよ。似合わないぞ」

ハルトマンが悲しい顔なんざ浮かべている姿は似合わない。

コイツは…このキャラクターはズボラで笑みを浮かべている姿だからこそ。

だから、ハルトマンは笑っていればいい。

「…へへ、有難う儀國」

「すまない儀國、ここにハルトマンが来ていない」

「あ、バルクホルン」

「むっ！？見つけたぞハルトマン！！」

不意に扉が開かれてお姉ちゃんキャラのバルクホルンさん登場。ハルトマンを見つけるや否や、早速怒りの叫びを挙げた。

「ここで何をしている！私はお前に部屋を綺麗にしろと言った筈だ！」

「えゝいいじゃん、別に今日じゃなくても。明日やるってば明日、だから今日はお休み」

「な、何が明日やるだ！そう言ってお前はいつもしないだろ！さっさと部屋に戻るぞ！！」

それと、お前達もそろそろ退室しろ。儀國は怪我人だ、お前達がいでは安静にすることも出来ないからな」

「ちえ、全くこれだから堅物のカールスラント軍人は……じゃあな

儀國、また暇見つけたら来るよ」

「じゃあね」

シャーリーとルッキーニが退室。続いてバルクホルンがハルトマンの襟を鷲掴みし引き摺って出て行こうとする。

「あゝん、儀國助けてゝ！」

「じゃあなゝハルトマン、女なんだから整理整頓ぐらいはしつかり出来る様になれよ。

じゃないと誰もお嫁に貰ってくれないぞ」

「薄情者ゝ！！」

後ろから襟を掴まれてハルトマンは引き摺られていく。扉が勢いよく閉められた後、部屋は再び静かになった。

「やれやれ…まあ退屈は少しは紛れたからいいか」

こうして昼食が来るまでの間、再び退屈な時間を味わっていた。

Act11：療養生活「壱」（後書き）

Act11「壱」でした。

今回は前菜？みたいな感じで書いてみました。

Act11「弐」でようやく私、夢幻遊戯の妄想を爆発させることが出来ます。

俺の精神テンションは今！貧民時代に戻っているッ！…みたいな感じですよw

では、それまで御機嫌ようです。

すわっ！

Act11：療養生活「弐」（前書き）

Act11「弐」です。

## Act 11：療養生活「貳」

### 《午後》

「ちゃんと大人しくしてるかあ？」

昼食を持ってきてくれた宮藤とリーネが出て行ったと同時に、エイラとサーニヤが来た。

因みに、またも二人に食べさせてもらった。もう大分動くからと言ったが安静第一と怒られた。

せめて今晚までに腕だけでも満足に動いてくれることを強く願った。このままだと身体が持たない、恥ずかしすぎて死ねる。

「エイラか、ああ…一応大人しくしてるぞ」

「一応じゃなくて、治るまでちゃんと大人しくしてろ」

ベッド横の椅子に腰を下ろし、そしてそつと右手を握ってきた。



「エイラ？」

「本当に…お前ってバカだよな」

「何だよ、来ていきなりバカってお前…」

「儀國がバカだから私はバカだって言ってるんだ」

握られている右手に力が少し込められる。よく見ると、右手が微かに震えている…？

「何でお前は…儀國はそんな無茶ばかりするんだよ…。自分の身体なんだぞ？もう二度と…動かなかったかもしれないんだぞ？」

「おいエイラ…、それも中佐に言われて」

「何度でも言わないと、儀國がまた無茶するかもしれないからだろ！？」

エイラが声を挙げて怒った。その目頭には涙が浮んでいて、今にも泣きそうな顔をしていた。

「エイラ…」

「約束しろ儀國…。エラーが直るまで、もう二度と」CODE…BLUE「終焉の蒼」って言う蒼い炎を使うなよ！？絶対だぞ！？」

「…言っただろ？いざって時には迷わず使っつて。でも…」

エイラの頭をそつと撫でる。

「可愛い子を泣かせるとは…エイラの言う通り馬鹿だな俺は。そうだな、エラーが解消されるまで、使わないように心掛けておくとするわ」

「…本当だな？後で嘘って言ったらぶっ飛ばすからな」

「魂に誓って…てか？まあ約束するって」

「ん……絶対だからな」

強く右手を握ってくる。その時にはもう手は震えていなかった。

「あ……あの、儀國さん」

サーニヤが声を掛けてくる。その表情は何か言いたそうな顔を浮かべていた。

「何だ？」

「あの……儀國さんお願いします」

「お願い？まあ俺に出来る範囲なら……」

「じゃ、じゃあ……お、お兄ちゃんって呼んでも……いい？」

部屋に変な空気と静寂が流れる。

俺も思わず言葉を失ってしまった。サーニヤが、俺をお兄ちゃんと呼ぶ？

「お……」

最初に静寂を破ったのはエイラ。そのエイラに続き、俺も同じ言葉を口にした。

「「お兄ちゃん???」」

綺麗に重なって放たれた単語、お兄ちゃん。この時のエイラと俺のシンクロ率は間違いなく100%を超えている。

「えっと…サーニヤさん？」

「えっ……」

「君は読心術でも使えるのかな？」

あの時の考えが読まれたのかと思った。

が、サーニヤは小さく首を横に振る。どうやら違うらしいから、俺の考えは読まれていない。

が、何故に俺をお兄ちゃんと呼ぶ!?

「えっと…何で？」

「私…お兄ちゃんっていないからよく分からないけど…。でも、そんな感じがしたから。」

芳佳ちゃんにも言ったら、そんな感じがするって」

恥ずかしそうにサーニヤは答える。お兄ちゃんみたいな感じって…どんな感じだ？

俺にも確かに、妹分的なヤツはいた。

だからサーニヤや宮藤が妹みたいな感じがするっていうのはある。

逆に兄や姉はいない、ずっと一人っ子だった。

俺にももし、兄弟で上が居たらサーニヤの言うそんな感じって言うのが理解できただろう。

「やっぱり…駄目？」

「いやいや、WELCOMEじゃよ…。WELCOMEじゃとも…」

断わる理由なんて何処にもない。上目遣いで言われた日にゃあ…もう。

好きなだけ呼んでくれ。俺は拒まない、大歓迎です。

「…じゃあ、お兄ちゃん」

「ああ、まあこれからよろしくな？サーニヤ」

そんなこんなでサーニヤと仲良くなれた。

なんかエイラにはメチャクチャ睨まれてるけど…いいか。

三時過ぎ、窓から見える景色をぼんやりと眺めて…ふと今後について考える。

エラーだらけの今の状態、「CODEE…BLUE終焉の蒼」を使えば今度こそ俺は自分の炎によって燃え尽きるかもしれない。

が、現状的にあの騎士型ネウロイを斃せるのはこの炎のみ。

通常の「CODEE…SATAN煉獄の赤」では…恐らく斃すのは無理。

「CODEE…EATER暴蝕の黒」も使用できない今、やはり頼りは「CODEE…BLUE終焉の蒼」だけだ。

あのネウロイは…一刻も早く斃さなければならない。以前戦った時よりもアイツは強くなっていた。次合間見えた時、更に強くなっている可能性がある。

ミーナやエイラには使うと言われてるが…やはり使う以外ない。今は使えない状態だが…治った時は、必ず使う…。

「儀國、具合はどうだ？」

扉が開き、坂本とペリーヌがやってくる。

「ああ、別に大丈夫。で、どうした？ペリーヌも一緒に来るなんて珍しい」

「う、煩いすわね。病人は病人らしく、静かに療養してなさい」

「はいはい、相変わらずだな。まあ…有難うな」

「べ、別にお礼を言われる筋合いなんてありませんわ！」

顔を赤くし顔を背けたペリーヌ。前々から分かってたけど…ペリーヌってツンデレキャラだよなあ。

「で、坂本…アンタは？」

「ふむ、お前の様子を見に来た。ちゃんと療養しているようだな」

「退屈過ぎて死にそうだけだな。ところで坂本、少し…頼みがあるんだけど」

「うん？何だ？」

「俺にも扶桑刀を一振り、寄越してくれないか？」

もし、あの騎士型ネウロイが攻めてきたら…。魔術が一切使えない今、唯一の頼りになる武器は己の肉体のみ。

無論、これでは全く闘えないし直ぐに殺されるのがオチ。だからこそ武器が俺には必要だった。

「扶桑刀をか？そう言えば、以前宮藤が何処からか拾ってきた扶桑刀があつたな…」



思い出したように坂本が言う。

坂本が言っている扶桑刀は、恐らくあの砂浜で見つけた扶桑刀。自分の物じゃないからと砂浜に突き刺して放置したが、あれから宮藤が持っていたのか…。

「なかなかの業物だったぞ、それをお前に渡そう」

「スマン、助かる」

「その代わり、お前の具合がよくなるまでの間は私が預かっておく。渡した途端、無茶をされても困るからな」

「げっ、バレたか」

「バレたか、じゃありませんわ。まったくもう…貴方という人は…」

呆れながら言うペリーヌだが、何処か楽しそうにしていた。

…久し振りに、解禁する時が来たのかもしれない。  
人を護る為の剣ではなく、人を殺める為の剣を…。

《夜》

夕食も終わり、再び退屈な時間が流れる。

結局今日は三食とも宮藤達に食べさせてもらった。もう恥ずかしいの何の…。悪い気はしないけど、早く自分で食べれるようになるたい。

後、俺はいつまでこれが続けなきゃならないんだ？

「入るわよ、儀國さん」

軽めのノックの後、ミーナが部屋に入ってきた。

「中佐か」

「私は相変わらず中佐ね…どうして私だけ階級呼びなの？」

「俺にとっちゃ、ニックネームみたいなもんだけだな」

上官に対する敬意や態度からではなく。

前は隊長だからとか何とか思ってたが、その意識が段々薄れていき、  
今ではニツクネーム感覚で中佐と呼んでいる。

「ニツクネームって、貴方…」

「何だよ、嫌なら別の呼び方に変えるぞ？そうだな、例えば…」

ミーナさんじゅうきゅうさい…とか（笑）。

…ミーナさんじゅうきゅうさい（笑）。

「儀國さん？」

「な、何かな？ミーナ中佐どの」

「今…何か失礼な事を考えていなかったかしら？」

「ま、まさか…そんな事拙者が考えるわけないじゃないかでござる  
よ、ハハハ…ハ」

ブラックスマイルを浮かべるミーナ。何でミーナはこんなにも勘が

いいんだ!?

ミーナこそ三次元空間把握能力だけじゃなくて読心術を持ってるんじゃないのか?

いや、或いはサトリ……。そう、ミーナは実は人間じゃなくて妖怪サトリなのかもしれない。

だから尻で虫型ネウロイを粉碎出来たのかも……!人間じゃないから……!  
史上最強の尻を持つ女、その名もミーナさんじゅうきゅうさい(笑)。

「……ぷ」

やばい、想像したらマジで吹いた。

ミーナがいきなり『調子こかせてもらうぜ』……とか言って、某格闘技マンガみたいに背中じゃなく、尻筋が鬼の顔みたいになるのちょっと想像してしまった。

ヤバイ、意外とこれはヤバイ。あの作画で描かれるミーナ……想像しただけで笑ってしまう。

「……………」

「とととと、ところで冗談抜いてな、何用でござるか?。」

「ござる?...まあいいわ、貴方の様子を見に来たのよ。それと...甘いものでもどうかと思って持ってきたの。食べるかしら?。」

「お、食う食う」

ミナの手には林檎を取り出した。そして果物ナイフで器用に皮を剥いていく。

「...なんかいいな、こういうシチュエーション。」

そして均等に切り分け小皿に盛ると、切り分けた一つをフォークで刺し、

「はい、あ〜ん」

「えっ!?!」

「あら、私じゃ不服?宮藤さん達の方がよかったかしら?。」

「い、いや…別にそういう訳じゃないけど」

予想外の展開。隊長のミーナが、俺にあくをしてくれている。

とりあえず林檎を差し出してくれているので、恥ずかしながらも食べる。

果肉を噛み砕く音を鳴らしながら、林檎の酸味が口の中に広がるのを堪能する。酸っぱ過ぎず程よい甘み。林檎はあまり好きじゃないが、この林檎なら食べられる。

「美味しいな、この林檎」

「そう、それはよかったわ」

「でも、どうしてこんな事してくれるんだ？隊長が一人の野郎に構っていいとは思えないぞ？」

「貴方は私の事を命懸けで護ってくれたでしょう？それにあの時…私は何も出来なかった」

「落ち込むなよ、あの時はしょうがないって」

ストライカーも武器もない状態だ、そんな状態で闘えっていう方が無理というもの。

某作品に登場する、どんな武器・兵器だろうと手にした時点でドラック相当の武器となる、とある狂戦士となった騎士の能力の様な力があれば、何とかはなっただろう。

実際、その騎士は策に填められ丸腰の状態で闘う羽目になった時、楡の樹の枝で相手を斃したぐらいだ。

尤も、そんな都合のいい能力あるわけないが…。

だが、ミーナは静かに首を横に振った。

「それでも…私は闘って、死にそうになっている貴方を…ただ黙って見ているしか出来なかった。だから、せめてこれぐらいは…ね」

「…優しいな、アンタは」

「えっ？」

「何度も言っけど…アンタが気にする事じゃないって。お前も俺も生きてる…お互い無事だったんだし、それでいいだろ」

「儀國さん…」

「…辛気臭い顔すんなよ。アンタ程の美人がそんな顔をするの、俺は見たかねえんだよ。  
だからそんな顔すんなよ、“ミーナ”」

「ッ……有難う、儀國さん」

ミーナは優しい微笑を浮かべて、次の林檎を食べさせてくれた。



Act 11：療養生活「弐」（後書き）

Act 11「弐」でした。

サーニヤにお兄ちゃんって言われてみたいって妄想から書いてみました！

やっぱりサーニヤは可愛いですよ！破壊神ですけど…w

すわっ！

Act 12: 戦鼓「き」(前書き)

Act 12「き」です。

## Act 12：戦鼓「壱」

ウィッチ達の一部からの手厚い看護を受けて十日後。

「どれどれ…」

身体機能：異常回復中                      性能83%中83%回復。

魔力回路：42%修復完了                      引き続き修復作業続行。

魔力回路の修復作業中により、魔術の使用不可。

「まだ魔力回路は治ってないか…」

十日経つても今だ修復作業を続けている魔力回路。でもとりあえず満足に動けるようにはなった。左腕もまだ少し痛むが、以前に比べたら満足に動かせるようになった。

これも宮藤やリーネ、ミーナの…あゝん、が効果による物かもしれない。

…三日前まで、三人からの食事介助を受けてきた。二日目には流石に慣れたが、それでも恥ずかしさは完全には消えなかった。

ミーナも隊長としての務めをしている分、疲れている筈なのにほぼ毎晩訪れては果物を剥いて食べさせてくれた。

疲れているから帰って休めと言っても、ミーナは大丈夫と微笑み決して帰ろうとしなかった。ちゃんと身体は休められているのか、それだけが気掛かりでいる。

介助を受けて一週間後、ようやく一人でも食べられるようになった。動けるのだから、もう介助を受ける必要はない。いつまでも三人に甘えている訳にもいかない。

もう介助は要らないと言うと、宮藤とリーネは物凄く落ち込んでいるように見えた。

ミーナも、そう…、とだけ言いそれから介助することはなかった。ただ、それでもミーナは夜医務室に来ては果物を剥いてくれた。

しかし、いざ介助してくれないとなると…少しだけ寂しい感じもした。

…何はともあれ、本調子ではないが動ける。

エラー状態であるが故に身体能力も本来の性能を発揮させることは

出来ないが、それでも全回復した。  
これでミーナも夜遅くまで居ることなく、ゆっくりと休められるだろう。

「こいつを着るのも十日振りだな」

とりあえず今日の着替えに素早く着替える。五日ぶりに来た整備兵の服装、今までは着物みたいな服だったが、やっぱりこっちの方が落ち着く。

当初はこの整備兵の服装について何だかんだ言っていたが、今ではこの服を気に入っている。

整備兵の服装に着替えた後、厨房へと向った。腹が減っては何とやら、それに久し振りに自分で何か作ろうと考えた。

ここ最近は宮藤とリーネの食事だった。二人の料理が不味いから、というのは決してない。

が、たまには食事に並ばない料理が食べなくなった。  
ある種故郷の味を食べたくなった、とでも言うべきか。

「さてと…何にしようかな」

食材と睨めっこし、何を作るか考える。

「よし、久し振りに炒飯でも作るか。じゃあ材料は…」

材料を選び、調理を開始した。

材料はネギ、卵の二種類。シンプルなものを作ることにした。あっちなら鮭フレークとか赤ウィンナーとか入れているが、今日は止めた。

じつくりとネギ、卵を炒めてからご飯を投入。味付けは塩コショウと醤油で整える。

意外とこれが整備兵の男連中に評判だったりする。以前作ったらまた作ってくれという声を貰ったくらいだ。

「よしよし、我ながらいい出来だな。後は…」

「…そこで何をしている、儀國」

ドアに凭れ掛かり、坂本が尋ねてきた。怒りを孕んだ笑顔、今にも爆発しそうなのが分かる。

「おはようっす坂本。炒飯作ったんだけど、食わないか？」

「ああ、おはよう。そして……この馬鹿者！！お前は何をしているっ！！！？？」

怒り爆発、坂本の声が厨房に響き渡った。

そこはウホッ、とか言えよ。これだからもっさんは…。

医務室、そこで自分が作った炒飯を食いながら坂本と話していた。後から坂本にもう一度勧めると食えると言い、一緒に食っている。

味の評価は良いとのこと。因みにその時のやり取りは…、

『炒飯を食わないか？』

『むっ？ま、まあ折角お前が作ったんだ。頂くでしょう』

…分かつてはいたがウホツ、とは返してくれなかった。

「それで、身体の具合はどうなんだ？」

炒飯を食べながら坂本が尋ねてくる。

「とりあえず普通に動けることは出来るし。大丈夫だ、問題ない。  
あ、勝手に厨房使って悪いな」

同じく炒飯を食べながら坂本の問いに答えた。

「そんな事はどうでもいい！全く…本調子でないのに動くんじゃない。  
い。お前はまだ病み上がりですらないんだ、大人しく寝ている」

「えゝ…だって暇なんだよ。寝てばかりいたらもう…ウワァッ、  
って感じ」

「どんな感じだ……ハア」

疲れ切った様子で、坂本は大きく溜息を吐いた。



「で、魔力回路の方はどうなんだ？」

「まだ修復作業中。後少しで半分いくかってところかな」

「そうか……」

「まあいいさ、のんびりして回復するのを待つし。ところで、そろそろ例の物を渡してくれないか？」

例の物？つと不思議そうな表情を浮かべて小首を傾げた坂本。

「おいおい、扶桑刀だよ扶桑刀。お前が今預かってるんだろ？」

「ああ、あれのことか」

すっかり忘れていたと笑い声を上げる坂本。

そんな坂本にすっかりしてくれと、苦笑いを浮かべる。

「とりあえず身体の方は大丈夫だ、問題ない。  
けど…今の俺じゃ魔術を一切使えない。だから武器が必要なんだよ。  
もしアイツが現れた時に応戦出来るようにな」

「そんな時まで無理をして倒そうとしなくていい。お前は回復するまで大人しくしている。もしヤツが現れたら…私達が対処する。が、約束だからな。すぐに持つてこよう」

そう言つて坂本は残っていた炒飯を素早く食べ終え、医務室を後にした。

「今の内に俺も食つておくか」

坂本が戻ってくるまでの間、炒飯を口の中へと掻き込んだ。

数分後、一振りの扶桑刀を持って坂本が帰ってきた。

「これだ」

あの砂浜で一回振るつた扶桑刀。それを坂本から手渡される。

「以前宮藤が見つつけてきたものだ。所有者が分からないから、一応私が預かっていたんだが…」

鞘から抜けばあの時と変わらぬ、美しい刃が再び姿を見せる。

「…気に入ったよ、有難うな坂本」

「べ、別に気にする必要は無い」

「さいでつか…さてと」

扶桑刀を腰のベルトに差し、ベッドから腰を上げる。

「何処に行くんだ？」

「ん？洗い物に決まってるっしょ。使った食器はきちんと洗う、当然だろ？」

「ふむ、ならば私も手伝おう。お前が作った炒飯…良かったぞ」

「そりゃよかった」

坂本と一緒に空いた食器を厨房に、そして洗い場で洗う。自分も食べたからと坂本も手伝ってくれた。洗い物をする坂本…なんか新鮮だった。

「なあ、坂本って料理とか出来るのか？」

「うん？いや、私はあまり料理をしたことがなくてな」

「そうか、まあ戦争中だし花嫁修業とか出来る暇ないか」

「そういうことだ。まったく、いつになったら花嫁修業が出来るのやら、だな。ハッハッハ」

坂本と談笑しながら食器を洗った。

## A c t 1 2：戦鼓「壱」（後書き）

A c t 1 2「壱」でした。

今回 A c t 1 2 は非常に短い話となっております。

本当は一つにして投稿しようかと思ったんですけど、一応形として「壱」と「弐」分けて投稿することにしました。

今回の A c t 1 2 は A c t 1 3 へと繋げる為の小話的な感じで受け取って下されば…と個人の中ではそう思っております。

すわっ！

Act 12: 戦鼓「弐」(前書き)

Act 12「弐」です。

「弐」の後書きで書いていた通り、マジで短いのであしからず。

## Act 12：戦鼓「弐」

朝食後、基地内を適当に歩く。

「あつ、儀國！！」

エイラが駆け寄ってくる。

「よっ」

「お前、もう動いて大丈夫なのか？」

「大丈夫だ、問題ない。まあ魔力回路の方はまだ修復作業中なんだけどな」

「そつか、でもよかった…。あれ？儀國、お前なんで扶桑刀なんか持ってるんだ？」

エイラが腰に差してある扶桑刀を指差し、尋ねてきた。

「今の俺は魔術を使えない状態。丸腰じゃ闘うことすら出来ないだ

ろ？

で、坂本に頼んで一振り貰ったってわけ」

「ふうん」

「まあ色々と心配掛けたな」

「あつ！儀國さん！！」

今度は宮藤、リーネとやってきた。

「もう動いても大丈夫なんですか？」

「ああ、この通りな。宮藤とリーネの手厚い看護が効果的だったかな」

「そ、そんなことないですよ／＼／」

照れ臭そうにする宮藤とリーネ、そんな二人を微笑ましく思い頭を撫でる。

その横で、エイラが苛立った様子で此方を睨みつけていた。



私には何も無しか？そう言っている風にも見て取れた。

医務室で療養している時。

バルクホルンはハルトマンのグータラな生活態度の愚痴を零し、それを適当に聞いて相槌を入れる毎日。時折ちゃんと話を聞いているのかと怒られた。

逆にハルトマンはバルクホルンが神経質だと愚痴を零してくる。俺はバルクホルン同様適当に聞いて相槌を入れて対処する。しかし、愚痴を零すハルトマンは何処か楽しそうだった。

シャーリーとルツキーニのペアは…何か煩かったとしか印象に残ってない。

来ては何か二人して騒いでいたばかりだった様な気がする…。

ペリーヌは相変わらず坂本にベツタリ。

一緒に来ては、まだよくならないのかと呆れられる。

サーニヤは今度ピアノを是非聞いて欲しいと言ってくれた。サーニヤの生演奏はこっちも是非聞いてみたいから快く好意を受け取った。

そして…エイラ。

…エイラに何かしてもらったかと問われたら。いったい何をしてもらっただろう。

これと言って特別変わったことはしてもらっていない。

強いて言うのであれば。占いでその日その日の運勢を占ってもらったぐらい。

別に頼んでもいないが、エイラはお得意のタロットカードで占い、運勢を教えてくれた。

結果はどれも当たらなかった。エイラにもらったことと言えば…それぐらいしか思いつかない。

「あーうん、お前もよくやってくれたよ。感謝感謝」

エイラの頭も一応撫でておく。

一応エイラはエイラなりに俺に気遣ってくれたんだろう。

「た、たく…有難く思えよな」

不機嫌そうに言うが、顔は喜んでいた。

「あつ！その刀って」

宮藤が扶桑刀の事を言ってきた。

「ああ、坂本に頼んでな。

さつきもエイラに言ったけど、まだ魔術を使えない状態なんだよ。だから武器が欲しかったっていうわけ」

「そうなんですか……」

「大丈夫だよリーネちゃん、だって扶桑刀を持った儀國さんとっても凄いんだよ！」

あの時の事を思い出し、宮藤はその事をリーネとエイラに話す。二人は興味津々だが、此方としてはその話はあまりして欲しくない。

それにもし、この場で坂本がやってきたら……絶対に教えろとか言われるに決まっている。

リーネとエイラにあの出来事を話す宮藤を制止しようとして、

「ん？お前達、こんな所で何をしているんだ？」

噂をすれば何とやら…。タイミング悪く、坂本がやってきた。

「あつ！坂本さん。実はですね、扶桑刀を持った儀國さんの話をしてたんです」

「儀國の？」

「お、おい宮藤…！」

「はい！だって儀國さん、魔力も…魔術も使って無いのに岩を真っ二つに出来るんですよ！」

言いやがった…。そして坂本の反応は…

「ほう、それは凄いな」

「居合いなんですけど、鞘から抜いて無いのに岩を斬ったんですよ！本当に凄かったですよ」

「居合いか…。儀國、どういう事が教えてもらえるか？」

案の定食いついた。

もうその眼は私にも教えろと言っているのが手に取る様に分かる。

「ダメダメ、こればかりは企業秘密です。」

幾ら坂本でもコレばかりは教えられないなあ」

「むっ？それはどういっ

」

その時、基地全体に警報が鳴り響く。どうやら敵さんが…ネウロイが出現したらしい。

「ネウロイ!!」

「宮藤、リーネ、エイラ、行くぞ!」

「了解!」

坂本、その後をリーネと宮藤が付いてハンガーの方へと走っていく。

「エイラ」

ハンガーの方へ走っていくエイラを呼び止める。

「さっさとぶっ飛ばして帰ってこいよ？  
それと坂本に伝言、無茶はするなってな」

「ああ、分かってるって。儀國こそ、大人しくしてるよな」

そう言ってエイラは口元を緩めた後、ハンガーの方へと走り去っていった。

…ふと思う。これって、死亡フラグ立ってないよな？  
大丈夫だよな…俺普通に言っただけだから大丈夫だよな…？

「……………なんかあつたらスマソ、エイラ」

ハンガーの方へと走り去っていったエイラに向けて、合掌した。

## Act12：戦鼓「弐」（後書き）

Act12「弐」でした。

今回は短かったですけど、Act13「弐」は戦闘シーンがありますので、長めです。

Act12よりも頑張って仕上げますので、乞うご期待です。

…今回はその、短いのは見逃して下さい（謝）。

すわっ！！

### A c t 1 3 : 戦火「壱」(前書き)

いやいや、君達は運がいい…今日は特別でね？もう一話出来てるんだ。

つてな感じでA c t 1 3「壱」です。今回は初、複数の視点からによる戦闘描写です。

上手く書けているか…そんな自信は最初からないです、はい…。



## Act 13：戦火「壱」

ウィッチ side

「いたぞ、目標を捕捉」

坂本の魔眼がネウロイを捉える。

ネウロイの出現により出撃する。編成されたメンバーは自分を含めて合計7人。

宮藤、リーネ、ペリーヌ、バルクホルン、ハルトマン、エイラ。

シャーリー、ルツキーニ及びミーナは基地で待機、サーニャは夜間哨戒任務明けで休養中。

目標のネウロイはこの基地へと向って進行中とのこと、そして基地に向って来ているネウロイとたった今遭遇した。

大きさからして全長は凡そ50メートル前後。

コアは胴体よりやや後方部の辺りにある。

「各自、戦闘態勢ッ！」

「了解！」

坂本のその言葉を合図に、ネウロイによるビーム攻撃が放たれる。各々散り、ビーム攻撃を避ける。ウィッチとネウロイとの戦闘が始まった。

「このっ!!」

エイラが手にしたMG42のトリガーを引く。銃口から連続して放たれる銃弾はネウロイの機体を傷付ける。

銃弾を被弾することで剥がれていくネウロイの機体、しかしネウロイとて黙って己の身体が傷付けられるのを見ている筈がない。

傷付けている本人      エイラに向けてビームを放ち反撃に出る。

「よつと」

が、エイラは軽々と避ける。

当たる訳がない。私の固有魔法は『未来予知』、近い未来を視ることが出来る。

だから次にあのネウロイがどう行動するのか、どう反撃してくるのかなど私には手に取るように分かる。

次々と放たれるビーム、その位置を予め視ている私は射撃を行いなから避ける。

剥がれていく機体、ボロボロと白い破片が海へと落ちていく。

そこに合わせて大尉、中尉の二人がネウロイに向って射撃を行う。

「見えたッ！！」

坂本が叫ぶ。

ネウロイのコアが現れる。赤々とし美しい輝きそれはまるで宝石の如く、ネウロイの心臓部……コア。

コアが現れたことでネウロイの攻撃に荒々しさが出てくる。

絶えず放たれるビーム、しかし各々ビームを見切り、コアを狙って射撃する。

自分の心臓が晒し出されているのだ、何としても護ろうとするのは自然なこと。

だが、これで終わりだ。

「いっけええええっ！！」

宮藤が一気にネウロイに接近。ビームの雨の中を見事な回避行動で避け、そしてコアを狙って射撃する。

火を吹く九九式二号二型改 13mm機関銃。放たれる銃弾、そしてそれは見事ネウロイのコアを捉えた。

銃弾を受けたことで砕け散るコア、それに伴いネウロイが白い破片となって消滅した。

「見事だ、宮藤」

「は、はい！有難う御座います！」

坂本さんが褒めてくれた。

「やったね芳佳ちゃん！」

「ま、まあ宮藤さんにしてはよくやりましたわ」

ネウロイを斃した喜びを分かち合う。基地へと向っていたネウロイはやつつけた。

皆嬉しそうに笑みを浮かべている。

儀國さんも、私がネウロイをやつつけたって言ったら、褒めてくれるかな？

「こちら坂本、ネウロイの撃墜をした。これより帰還する」

《了解、皆お疲れ様》

インカムを通して坂本さんがミーナ中佐に報告。そして基地に帰ろうとした…その時だった。

《ちょっと待って！何…これ…凄い速さ、そっちに向っているわ！》

ミーナ中佐のその声を聞いたと同時。

「なっ…！？」

「こ、コイツは…！！」

「ネウ…ロイ」

皆に戦慄が走る。凄い速さでやってきたのは人型のネウロイ。そのネウロイは二度儀國さんと闘った、あの騎士型ネウロイだった。

ミーナ side

「様子はどうだ？」

司令室に儀國さんがやってくる。その手には一振りの扶桑刀、魔術を使えない状態である今の儀國さんの唯一の武器だと、美緒は言っていた。

まだ…儀國さんは魔術を使えないのね…。

「大丈夫、さつきネウロイの撃墜を確認したわ」

「そうか、ならいいや」

「ところで、儀國さんはどうしてここに？」

「なに、ただの興味。戦況が知りたくなっただけ。まあネウロイを撃墜したならいいけど。けどアレだな、ようやく普通…かどうかは知らないけど、ネウロイが現れたって言うか」

儀國さんの言葉に私は頷いた。

ここ最近はあるの騎士型ネウロイや、ズボン事件を起こし儀國さんに濡れ衣を着せた動物型ネウロイ　　儀國さん曰く、イタチ型ネウロイしか見ていない。

だから儀國さんの言う通り、私達が今までに闘ってきたネウロイが出現したのは久しぶり。

…正直、あの騎士型ネウロイじゃなくてよかった。

「まあなんにせよ全員無事でえがったえがった、ウンウン」

「ふふ、そうね　　ッ」

リーダーに反応があった。出撃したウィッチ達しか映し出されていなかったリーダー。

そこにある筈のない反応が一つ、ウィッチ達に急接近している。

「ちょっと待って！なに…コレ…凄い速さ。そっちに向ってるわ！」

美緒達に伝える。ネウロイは斃した、なのに何故レーダーに反応が映る？

それも凄いスピードで美緒達に接近している。

嫌な予感がした。まさかとは思うけど…

、

「アイツじゃないのか？」

不意に、儀國さんが口を開いた。と、同時に美緒達の声が聞こえてくる。

《なっ…！？》

《こ、コイツは…！！》

《ネウ…ロイ》

新たなネウロイが出現。そして美緒、トゥルーデ、宮藤さんの口調からして現れたのは…やはりあのネウロイ…。

「ヤツだな…」

儀國さんが呟く。嫌な予感は的中してしまった、あの騎士型ネウロイが出現した。

ウィッチ      s i d e

戦慄が走る。突如として現れたあの騎士型ネウロイ。何故このネウロイが…と誰もが思っていた。

「…各自、油断するな…」

坂本が指示を出す。

相手はあの騎士型ネウロイ。儀國すらも苦戦した、それ程の強力な力を持つ謎多き人型のネウロイ。だが、この場に出現し遭遇した以上闘うしかない。

このネウロイも基地へと侵攻しようとしている。基地にはミーナ達や、儀國がいる。

何としてもこの場で撃墜しなければ…！



「?…仕掛けて、こない?」

バルクホルンが疑問を口にした。

ネウロイは人類を…私達ウィッチを敵と認識しているのは常識。従って遭遇すれば直ぐに攻撃してくる、それがネウロイだ。逆に、私達もネウロイを発見すれば直ぐに撃墜に向う。

が、この騎士型ネウロイは私達を前にしていると云うのに攻撃する様子を見せない。

首を左右に動かし、私達を一人一人見据えている。

その行動は、まるで誰かを探しているようにも見えた。

いったい、誰を探していると言っただ…?

「いずれにせよ、お前はここで斃させてもらっ!」

少佐が烈風丸を構える。その行動にネウロイが反応し顔を向けた…  
…が、直ぐに逸らした。

少佐に対しお前には興味がないと、まるで…そう言っているかのよう  
うに。

「このネウロイはいったい何を…」

「まさか、コイツの狙いは儀國なのか!?!」

少佐が儀國の名を口にした。するとどうか、少佐のその言葉に騎士型ネウロイが大きく反応した。

「な、なんで儀國さんの名前を出したら」

宮藤が不思議そうに言った。

「そうか…やはり…」

坂本は気付いた。何故烈風丸を構えたことに反応を示したのかを。

この騎士型ネウロイは本来射出するビームを刃状にしての近距離戦闘を得意としている。

そして騎士型ネウロイは二度に渡り、儀國と剣を交えている。

儀國は「ソードサマナー剣極の調」にて剣を振るう者。そしてこのネウロイもまた剣を振るう者。

このネウロイは恐らく、“剣で闘う”ということにこだわりを持っている。

だから私が烈風丸を構えた時に反応を示したのだろう。同じ剣を振るう者として…。

直ぐに顔を背けたのは、剣を振るう者として役不足だと…そういうことなのだろうか？

ネウロイが一人の人間に執着するなんてことは…、こだわりの持つて闘うこと等今までになかった。

いったい、このネウロイは何なんだ…？

「……………」

バルクホルンは静かに騎士型ネウロイを見据える。

未だ自己修復が続いている左腕。肘より下が無い…蒼い炎を受けた傷はまだ癒えていなかった。

この騎士型ネウロイは儀國を狙っている。

胸を剣で突き刺されたこと、かつてミーナが言っていた蒼い炎…「  
CODE:BLUE  
終焉の蒼」を受けたこと…、それらに対する復讐とでも言うのか？。

…どちらにせよ、ここから先へと行かせるつもりはない。

儀國が狙いならば尚更だ。アイツは今魔術を使えない状態にいる、今のアイツは一般人も同然。そんな儀國を護れるのは…私達しかない。

あの時、妹を…クリスを助けてくれた恩人を、決して殺させはしない。

「各自戦闘態勢！こいつをこの場で仕留める！」

「了解ッ！」「」

少佐が皆に指示を出す。

なんとかしてでも、この場でこのネウロイを斃す！

私は両手に携えたMG42の銃口を騎士型ネウロイに向けた。

### A c t 1 3 : 戦火「壱」(後書き)

A c t 1 3 「壱」でした。

次話ではウィッチ隊VS騎士型ネウロイの話となります。  
果たしてウィッチ達は勝つのか!?

乞うご期待です!

すわっ!!

Act 13：戦火「弐」（前書き）

Act 13「弐」です。

相変わらずの出来栄です…はい。

## Act 13：戦火「弐」

ウィッチ      side

「ずおりやあああああつ！！！」

バルクホルンが両手にしたMG42のトリガーを引く。

二つの銃口から同時に放たれる銃弾、騎士型ネウロイは右手を突き出し、シールドを展開した。

見たことも無い呪文、図式の魔法陣が展開され放った銃弾は全てシールドによって防がれる。

この騎士型ネウロイは我々ウィッチと同じく魔法を使う。ならばシールドも使えて当然か…。

が、面倒な相手だ…！！

「はあああああつ！！！」

坂本は背中の烈風丸を鞘より払い、一気に騎士型ネウロイへと間合いを詰める。

儀國から魔力行使を、烈風丸を振るうことを極力避けろとは言われている。

さもなくば私の魔力回路に負担が掛かり二度と使い物にならなくなる、と…アイツからは何度も念を押されていた。

が、今はそれを守ることは出来ない。このネウロイが現れた以上、この場で斃すしかない。

基地に待機しているのはミーナ、シャーリー、ルッキーニ、夜間哨戒任務明けのサーニヤ。

そして…ミーナを護り「終焉の蒼」と呼ばれる蒼い炎を使用した反動で魔術が使えない状態の儀國がいる。

この騎士型ネウロイの狙いは儀國。魔術が使えない状態の今の儀國では絶対に勝てない。

基地には絶対に行かせない、儀國に代わりこの場で騎士型ネウロイを討つ！

だから今はもってくれ…私の魔力回路

！！！！

「フンッ！！」

手にした烈風丸を騎士型ネウロイに向けて振るう。

大きな金属音が鳴り響き、火花が散る。振るった烈風丸の刃は騎士型ネウロイのビームブレードによって阻まれる。

「　　っ！！」

反撃の横薙ぎが飛んでくる。坂本は烈風丸でそれを防いだ。が、

「ッ!!」

騎士型ネウロイの一撃は予想以上に重く、防御の上から押され大きく吹っ飛ばされた。

「くうっ…！なんて重さだ、儀國はこんな重い剣と闘っていたのか…！」

まるで巨大な鉄球を受け止めている、そんな気分だった。

試合をした時に儀國から受ける一撃も重い。それと同等か、或いはそれ以上か…。

最初から分かっていたが、闘う事でより理解できる。このネウロイは…強い！

「坂本少佐!!おのれよくも…！」

ペリー又はブレン軽機関銃Mk・1を構えて騎士型ネウロイへと向った。

「坂本少佐を傷付けた罪は重いですわよ!!」

「ペリー又さん！」

宮藤も合わせて騎士型ネウロイに射撃する。

が、騎士型ネウロイはシールドを張ってそれを防いだ。

「厄介だね…」



「ああ、確かにな…」

ハルトマンとバルクホルンは騎士型ネウロイを見据える。

射撃攻撃がなく、近距離戦闘をする騎士型ネウロイ。射撃という技能がないという代わりに携えている魔法。

シールドを張られては幾ら攻撃してもネウロイ本体まで行き届かない。

更に前方だけでなく、攻撃が来る方向全てにシールドを展開される。

これでは幾らフォーメーションアタックを仕掛けても意味が無い。

それに少佐の烈風丸による一撃をも簡単に防ぎ、そして防御の上から押し飛ばす程の威力。

現在少佐、宮藤、ペリーヌ、エイラの四名が騎士型ネウロイと交戦している。

少佐は正面から、それをカバーするように三名が援護射撃を行う。だが、四名による攻撃は全て騎士型ネウロイに当たることはなかった。

それにあの騎士型ネウロイ、あの場から一步も動いていない。

その行動が何を意味するのか…それは簡単だ。私達は侮辱されている…、騎士型ネウロイに手加減をされているという事だ。

「くっ…舐めた真似を！」

私は悔しかった、ネウロイにここまで侮辱されたのは今日が初めてだ。

悔しい……が、ここで冷静さを失ってはいけない。如何なる状況にあったとしても、戦場では冷静さの有無で生死が左右される。

だから落ち着け、そう心の中で自分に言い聞かせる。

「あ、あの……!!」

その時だ、リーネが口を開いた。

「どうした!？」

「もしかしたら、ネウロイのシールドを破れるかもしれません!」

その一言は、今の戦況を変える希望の光だった。

流れてくる坂本達の会話。

現場を直接見ている訳ではないが会話から察するに苦戦している様子。

「……………」

やっぱり…俺がやるしかないか。

「儀國さん！？何処に！！」

「一応戦闘準備。アイツの相手は、俺がした方がよさそうだな」

恐らく、あの騎士型ネウロイがここに来るのは最早時間の問題。  
待機しているミーナやシャーリー達でもヤツを止められることは出  
来ない。

あつちは7人掛りで戦ってアレだ、それより少ないこのメンバーで  
挑んだとしても結果は同じだろう。  
それに坂本達の会話からして、どうやら相手の狙いは俺のようだ。  
なら俺が出て相手をするというのが道理。

「だ、ダメよ！貴方はここで待機を」

「敵さんの狙いは俺なんだろう？  
それに今の状況だと、アイツがココに来るのも時間も問題だ。  
なら、俺が相手するのが筋つてもんだろ？」

「儀國さん！貴方は今魔術が使えない状態なのよ！？それなのにどうやって」

その時だ。リーネのボーズMk1対装甲ライフルの発砲音が聞こえた。

ウィッチ side

「なるほど、分かった」

インカムを通しバルクホルンの言葉を聞き、坂本は頷いた。

再び騎士型ネウロイへと見据える。宮藤、ペリーヌ、エイラによる三人の攻撃をシールドで防いでいる。

「よしっ！！」

烈風丸を構え直し、騎士型ネウロイへと向って突撃した。

「……………」

騎士型ネウロイに向け、リーネはボーズMk1対装甲ライフルの銃口を向ける。

坂本少佐が騎士型ネウロイに向っていくのを確認。

スコープの先、そこにはシールドを張って芳佳ちゃん達の攻撃を防ぐ騎士型ネウロイ。

あのシールドがある限り、私達の攻撃はネウロイまでは届かない。だけど、あのシールドを破る可能性がたった一つだけある…。

「……お願い、いって!!」

トリガーを引く。大きな銃声と伴い、金色に煌く弾丸が放たれる。

真っ直ぐ、騎士型ネウロイへと向っていく55口径の弾丸。それに気付いた騎士型ネウロイはシールドを展開。

放った銃弾はまたも騎士型ネウロイのシールドによって阻まれる

「やった!!」

「ネウロイのシールドを破った!」

ことはなかった。硝子が碎け散るかの如く、騎士型ネウロイの展開したシールドは碎け、そしてそのまま右腕を破壊した。

以前儀國さんから手渡された特殊弾。

「貫通」の効力を現すルーン文字が刻まれた銃弾を以前に貰った。

貰ってから使う日が来なかったけど、ようやく今それを使う時が来た。

「はああああああつ！！！」

リーネの放った弾丸が見事騎士型ネウロイのシールドを破った。

以前儀國がリーネに手渡していた特殊弾丸、あらゆる防御を貫通するという効力を付加させた弾丸は騎士型ネウロイのシールドを難なく貫通、そのまま右腕を破壊する。

流石のネウロイも、こうなるとは予想していなかっただろう。  
何にせよ、唯一の武器だった右腕も今の一撃で破壊された。

その右腕が破壊されている今こそが、シールドを破壊した今こそが好機！これを逃せば次はない……！次のシールドを張られる前に、ここでケリを着けるッ！！

「終わりだ！烈風斬ッ！！！」

坂本は一気に烈風丸を縦に打ち落とした。

斬った、そう確信した坂本の表情は驚愕へと変わった。

「な……に？」

金属音が響き渡る。

打ち落とした烈風丸の刀身は騎士型ネウロイへと届いていなかった。  
シールドを張られて防がれたわけではない、右側から伸びている赤いビームブレードが、烈風斬を受け止めていた。

ビームブレードが出ている方向を見る。そこには別のネウロイが出現していた。

騎士型ネウロイと同じく、人型…。

姿形は、目の前の騎士型ネウロイとは違っているが騎士のような姿をしている。

新たな人型…騎士型ネウロイの出現。

「そ、そんな馬鹿な…!!」

「まだ騎士型ネウロイがいるってこと!？」

バルクホルン、ハルトマンも我が目を疑う気持ちで、新たに現れた騎士型ネウロイを見据えた。

騎士型ネウロイなんて言う、非常に珍しいタイプのネウロイ。そのネウロイは儀國と互角に戦う程の戦闘能力を持つてゐる。

そんなネウロイが…もう一機現れた。

私達…勝てるかな？

ハルトマンは二機の騎士型ネウロイを見据えながら思った。

「くっ…!!」

坂本は緊急回避を行い、ネウロイとの間合いを空ける。

そして直ぐに烈風丸を構え直した。それに合わせて、他のウィッチ

達も戦闘態勢に入る。

「な、なんだ…？」

目の前で起きている光景に、坂本は眉を顰めた。

新しく現れた騎士型ネウロイが、最初に現れた騎士型ネウロイに何かをしている。

それはまるで話し合っているかの様な…そんな感じだった。

暫くして、騎士型ネウロイ達が此方に顔を向ける。

来るか…！

迎撃体勢に入るも、騎士型ネウロイ達は攻めてこようとしなかった。そのまま凄まじい速度で上昇、何処かへと飛び去っていった…。

逃げた…いや、見逃されたと言うべきだろう…。

事実、もし戦闘になっていたら確実に私達は全滅していた。

一機の騎士型ネウロイを相手するのに此方は7人掛りで何とか。

そんな状態でもう一機も現れたとなると、その倍の数が必要となる。

いや、倍の数を以ってしても勝てるかどうかすら怪しい。

騎士型ネウロイは私達ウィッチと同じく魔法を使う。

最初に遭遇した騎士型ネウロイの固有魔法は『結界』。恐らく、新たに現れたあの騎士型ネウロイも同じく…何らかの固有魔法を所持している。



それにあの新たに現れた騎士型ネウロイ…最初のネウロイよりも間違いなく強い。

「…基地に帰還する」

「「「…了解」」」

何はともあれ、報告しなければならない。

新たに現れた騎士型ネウロイの出現、そして騎士型ネウロイの目的を…。

坂本達は基地へと帰還した。

宮藤     s i d e

基地へと帰還する。滑走路でミーナ中佐達と儀國さんが出迎えてくれた。

「儀國さん！」

私は早速儀國さんに今日の戦果を報告する。  
すると儀國さんは意外そうな表情を浮かべて

「へえ、宮藤がネウロイをねえ。流石豆狸って呼ばれただけはある」

「豆狸って何も関係ないじゃないですか!!」

相変わらず儀國さんは私をバカにしてくる。でも、よくやったって言って頭を撫でくれた。それが私はとっても嬉しかった。

「リーネ」

私の頭を撫でながら、儀國さんは遠くの方で見ていたリーネちゃんに声を掛ける。

「は、はい!」

儀國さんに呼ばれて、リーネちゃんは慌てて駆け寄ってきた。

「お前もよくやったな。ちゃんとルーンが発動してよかったぜ」

「いえ、儀國さんのおかげです。有難う御座いました」

リーネちゃんも儀國さんに頭を撫でてもらう。  
リーネちゃんも嬉しそうにしていた。

…儀國さんって、本当にお兄ちゃんみたい。

サーニヤちゃんが儀國さんをお兄ちゃんって呼ぶのを知ったのは、  
つい最近のこと。

サーニヤちゃんが儀國さんの事をお兄ちゃんって呼んだのを聞いて、  
私も皆驚いてた。

エイラさんは…ちょっと不満そうだった。

ずっと前に、お茶会をした時にサーニヤちゃんと儀國さんのことで  
話し合ってた。

儀國さんって、何だかお兄ちゃんみたいな感じがするねって。多分、  
それからサーニヤちゃんは儀國さんの事をお兄ちゃんって呼ぼうと  
したんだと思う。

…私もサーニヤちゃんみたいに、儀國さんのことお兄ちゃんって呼  
ぼうかな…。

でも私が言ったらまた馬鹿にされるかも…。

「儀國」

坂本さんがやってきた。

そして騎士型ネウロイを取り逃がしたこと、新しい騎士型ネウロイが出現したことを伝えた。

すると儀國さんは、

「…まあ通信を通して大体は分かってる。それにしても、新しいのが…ねえ」

不適な笑みを浮かべていた。それに、何処か嬉しそうな…そんな風にも見えた。

どうして、儀國さんはそんな顔をしていられるんだろう…。

「儀國さん…？」

「ん？ああ、まあ脅威が一つ増えたことには変わらない。けどな、アイツは俺がブツ斃すって決めてたんだ。その相手が増えただけ、それだけだ」

「…怖く、ないんですか？」

「怖い？怖いもんかよ、あんなヤツ等よりもっと怖い目にあってるぜ、俺は。」

心配すんな、あいつ等は俺が纏めて斃す。お前等に危害は加えさせねえよ」

そう言つて儀國さんはまた私の頭を撫でてくれた。

儀國さんに撫でられると、本当に落ち着くなあ…。

### Act 13：戦火「弐」（後書き）

Act 13「弐」でした。

複数の視点から書く戦闘描写、本当に難しいですねえ。  
メチャクチャ大変で、かなり迷いましたツス…。

そんな訳で、次から暫くノホホン（？）とした話が続きますです。  
すわっ！

**A c t 1 4 : 冗談注意報「壱」(前書き)**

A c t 1 4 「壱」です。

なんか最近、タイトルが全く浮ばないです…。

## Act 14：冗談注意報「巻」

エイラ side

今、私は重要な任務を帯びている…と思う。

「お、出てきた」

儀國が部屋から出るのを確認。左腕は未だに包帯が巻かれていて、そして魔術を使えない状態である為扶桑刀を一振り、所持している。

いつもの整備兵の服装に着替えて、儀國は何処かへと歩いていく。

「なあ儀國」

部屋から出てきた所、儀國に声を掛けた。

事の発端はとある日の朝の出来事。

午前、少佐は儀國と試合をしようとしていた。



魔力回路がまだ治らないけど、身体だけは元通りになった…らしい。寝ていた分のブランクを取り戻そうと儀國は扶桑刀を手に、砂浜へと向う。

そこに少佐が久々に手合わせしようと誘った。けど、その日儀國は断わった。

いつもなら相手にするけど、魔術が使えるまでは試合はしたくないと…そう言って少佐に断わった。

そして、この次の儀國の発言が。私が極秘任務…と言い難い任務を帯びることになってしまう。

何故だと尋ねる少佐に対して。儀國は、扶桑刀を持つと一瞬で終わるからと、そう返した。

つまり、扶桑刀を持った時点で既に勝ちが決まったも同然だと…そう言った。

それを聞いた少佐は不適な笑みを浮かべて扶桑刀を構えた。面白い、是非やってみると…。挑発的な態度で儀國に試合を申し込んだ。

それでも儀國は断わってたけど…中佐が登場。約束したんだからちゃんと護りなさいと儀國に発言。暫くして、儀國は溜息を吐いた後渋々承諾した。

場所は砂浜、その日は珍しく全員揃っていた。

中佐もこの時ばかりは面白そうだから、と試合を見ていた。

やる気マンマンの少佐に対して、心底気だるそうな儀國。

大きな溜息を吐いた後、静かに手にしていた扶桑刀を構えた。

鞘に収めた状態での構え、宮藤に聞いたその構えは扶桑に伝わる構えで居合いというらしい。

後で儀國に聞いたら儀國の世界、扶桑で言う日本には昔抜刀術（居合い）を得意とする剣豪がいて、その剣豪は神速の速さを生み出すことが出来るとか何とか言ってた。

龍 閃とか天 龍閃とか、兎に角凄いい必殺技を使う剣豪がいたそう  
だ。

おろろ、と言うのが口癖らしい。

因みに、神速という言葉聞いてスピード命のシャーリーが物凄く興味を示したのは…言うまでも無い。

儀國から神速についてその話を聞いた後、超音速の次は神速だ、って凄く張り切っていた。

そして儀國と少佐との試合。珍しく皆が揃い試合を見守る中、少佐が先に仕掛ける。

そこで、信じられない現象が起きた。

カチンツと音が鳴ったと認識した時、試合は既に終わっていた。宙を舞い、暫くして砂浜へと突き刺さった…少佐の扶桑刀。

儀國は扶桑刀を鞘に収めた状態：居合いの構えの状態でした。

以前に宮藤が言ってた、扶桑刀を鞘から抜いて無いのに岩が真つ二つに斬れたって。

そんな馬鹿な現象起きるわけが無い。その時はそう思っていた。けど、今の儀國は鞘から刀を抜いていない。その状態で少佐の扶桑刀を弾き飛ばした。

誰もが啞然、宮藤だけは凄いと声を挙げている。

少佐も扶桑刀を構えていた格好のまま、その場で固まっていた。

儀國はだから言ったのに、と言わんばかりの表情を浮かべて小さく息を吐いた。

儀國が宣言したとおり、試合は一瞬にして決まった…。

儀國が言っていた神速っていうのは…こういうことなのかもしれない。  
動きすらも視認出来ない、目に捉えられない速さ…それが即ち、神速…。

あの試合の後、少佐は落ち込むどころか今の技はなんだと儀國に尋ねる。

鬼気迫る迫力で頼む少佐、儀國は若干引いていた。

儀國は詳しくは答えず、魔術行使を一切していない技とだけ答えた。魔力を、魔術を一切使わないあの速さ…儀國が時々人間と違うんじゃないかって思ってしまう。

で、少佐は誰もが予想通り儀國に今のを教えろと頼んだ。そしてまた皆の予想通り、儀國は拒否した。理由は…やっぱり面倒臭いとのこと。

ただ、いつもと違ったのは…儀國の表情だった。  
ふざけた言動なのはいつもなんだけど…その時は何処か悲しげな感じがした。

他の皆はまたか、って感じで苦笑いしてたけど。私にはどうもいつ

もと違う感じたことが気になっていた。

そして今、私は少佐からある任務を言い渡されて儀國の部屋に向っている。

内容は至ってシンプル、あの試合の時に見せた技の詳細について聞き出してこい、というものの。

何故私が…と反論したら、少佐曰く、剣や刀に全く無縁なヤツだからこそ儀國は話すかもしれない、とのこと。

…どんな理由だよ、それ。確かに私は剣とかは使わないけどさ…。

「ん？エイラか、どうしたんだ？またサーニヤのズボンが紛失したとかか？」

「違う。お前に聞きたい事があるんだ」

「聞きたいこと？」

少佐が絡んでいることは、儀國に知られてちゃいけないのは当然。ストレートに尋ねてもいいけど、一応様子を見ながら聞いてみるか…。

「あのさ、あの時の試合で少佐の刀弾き飛ばしただろ？あれが儀國が言ってた神速ってやつなのか？」

「ああ…あれね。神速かどうかって聞かれてもなあ…何とも言えないが答えだな。

でも、どちらにせよ俺のはまだ遅い方だ」

「えっ？そ、そうなのか？」

「俺のお師匠様だった人は、マジで凄かった。

もしあの試合の相手が坂本じゃなくて、俺のお師匠様だったら…刀押し折られてそのまま数回は確実に切り刻まれて、ブチ殺されてるな…」

あれで遅いって…どんだけだ。

儀國も人間離れしてるけど、儀國のお師匠様って言う人も本当に人間か？

ネウロイみたいな怪物か何かじゃないのか？

それにしても…

「まあそんなお師匠様だったけど、かなりの酒好きだった。いつも酒臭かったし、あれはマジで嫌だったなあ」

懐かしむように儀國はお師匠様という人について話している。  
そしてお師匠様のことを話している儀國は、どこか嬉しそうだった。

まるで自分の両親を自慢する幼い子供のような…そんな感じ。

「ふん。て言うか、さっきの何だよ。全く見えなかったぞ。  
いったいどうやったんだ？本当は魔術が何か使ってるんじゃないの  
か？」

そろそろ本題に入ってみる。儀國はどんな反応をするやら…。

「……なあエイラよお」

「な、何だよ…」

も、もしかしてバレ…た？

「お前…俺に何か隠し事してるだろ？」

「えっ！？な、何のことだ？」

儀國って本当に勘が鋭い。

確かに、私は少佐に頼まれたってことを隠しているけど…。

「……なるほど」

納得したように、やれやれと呆れた表情を浮かべた。

「な、何ができるほど…なんだよ」

「坂本に頼まれたってわけか。そうだな…：：：：：大方、剣術に無縁という理由か何かでお前を向寄せたってところだろ？」

「な、何で分かったんだ!？」

確実に私の心を読まれた。

コイツ…：：：：：やっぱり人間じゃない。人を心を読むなんて反則過ぎだ。

「洞察力の賜物だ。お前分かりやす過ぎ。

つーかダメだ、絶対に教えないって言っただろうが」



「だ、だって少佐が私の代わりに上手く聞き出してってくれて言われてさ……」

「アイツめ……他人を使ってくるとは……」

この分だと、サーニャやリーネとかも怪しいな。警戒しておくか」

そう言っつて儀國はスタスタと歩いていく。

と、途中で立ち止まって……、

「あ、そうそう。坂本に言っしておいてくれ、他人使ってまで聞こうとするなっつてな。」

……っつか、聞き出したところで習得出来ないだろ」

それだけ言っつと儀國は何処かへと行っつてしまった。

一人残された私は、暫くその場に佇んで……少佐のところに報告しに言っつた。

任務は誰がどう見ても失敗、儀國の洞察力によって見破られた。

A c t 1 4 : 冗談注意報「壺」(後書き)

A c t 1 4 「壺」でした。

最近仕事がクソ忙しいです。夜勤三連続はかなり身体に来ますねえ  
…。

誰か私に元気の出る薬を、クスリ(萌え)を下さい…。

そんな訳で、A c t 1 4 「壺」でした…。

すわっ!!

**A c t 1 4 : 冗談注意報「忒」(前書き)**

A c t 1 4 「忒」です。

## Act 14：冗談注意報「貳」

「まったく…坂本のヤツめ」

愚痴を零しながらハンガーへと足を運ぶ。

エイラと別れてから、坂本によって放たれた多くの刺客を受け流してきた。

予想通り、サーニャやリーネが来てアレについて尋ねてきた。

ペリー又は坂本少佐に教えなさいと怒られ、ミーナからは意地悪するなとやんわり注意を受けた。

面倒でも意地悪でも、何でもない。

坂本には、ただ“この剣”を振るって欲しくないだけ…。

アイツが“この剣”を振るうのは似合わない。

「お、儀國じゃないか。珍しいな、どうしたんだ？」

ハンガーへ着く。ストライカーユニットを整備していた安藤が気付き、手を止めると此方にやってきた。

「ちょっとしたワケありってやつで…暫くまた整備兵として働くことになったッス」

魔術が使えるようになるまでの間、暫く戦線から外されることになった。

とりあえず今は整備兵としての仕事に就くよう、ミーナから言い渡された。

騎士型ネウロイが斃された今、俺が無理してまで戦線に出る必要はないと…。

魔力回路が完全に治るまでの間、療養も兼ねて整備兵として過ごせといわれた。

確かに…あの騎士型ネウロイが討たれた今、この状態の俺に出番はないだろう。

接近戦をしてくるネウロイなんて、恐らくあのネウロイぐらいだ。後はいつもと同じ、空を飛んでビームを撃ってくる、典型的なネウロイ。

となると、闘うのは言うまでもなく我が基地にいるウィッチ達。今の俺が出て戦力外。

だったら魔術が使えるまで整備兵として過ごさせてもらおうという。

「なんか、ハンガー来たのマジで久し振りって感じがするなあ」

久し振りに戻ってきたハンガー、そこで働く安藤と仕事仲間達。

思えばここ最近ハンガーに顔を出していない。本当に久方ぶりである。

「ああ…聞いたぞ。何か凄い蒼い炎を出して重度の火傷を左腕に負ったそうだな。」

「…もう大丈夫なのか？」

「まあ…一応は。左腕は微妙に痛むけど生活上支障なし。まあ、魔術が未だに使えない状態ではあるけどなあ。てなワケで、魔術が使えるようになるまで整備作業をするわ、また暫くよろしく」

「ふっ、ああ。但し、しっかりと働けよ？」

「へいへい、了解ですよっ」と

再びやる日が訪れた、整備作業。

あの時の楽しい日常が、もう一度やってきた。

安藤に怒られ、それを見て笑う仲間達。談笑し合い、笑い声で溢れるハンガー。

やっぱり、整備兵として働く方が性に合ってる気がする…。

今度坂本と試合したら、ミーナに掛け合ってもらおうかな…マジで。

坂本     s i d e

夜の砂浜、そこで私は一人、手にした扶桑刀を振るう。  
空を切る音が鳴り、中空に白銀の一閃が奔る。

「……………」

儀國との試合を思い出す。あの時、いったい何が起きたのか…。

儀國との試合、その日はいつもの様に「ソードサマナー剣極の調」により作られた  
剣ではなく、扶桑刀を用いての試合だった。

今も尚、儀國は蒼い炎：「終焉の蒼」を使った反動により魔術が使えない。だから回復するまでの間と、儀國は扶桑刀を要求してきた。

身体機能だけ回復したという儀國に、いつもの様に試合を頼む。

本人も身体が鈍っているから少し運動をしてくると言っていたから、丁度いいと思った。

私はまだ、魔術の教えを請うことを諦めていない。

しかし、今回は試合ではなく簡単な組み手程度でいいと考えていた。病み上がりで早々試合をするのは流石に酷であるからだ。

だが、儀國はそれをも断わった。理由は口癖になっている面倒：だからではない、私では勝てないと。

扶桑刀を手にした今、一瞬で勝つからしない。そう儀國はハッキリと言った。

私は見下されているという悔しさと同時に興味が湧いて出てきた。

儀國は確かに強い、それは認める。

だが、扶桑刀を手にしたことで一瞬で勝つと言う発言をする程の自信：その腕前はどれ程のものなのか私は見たくなり、早速試合をした。

そして儀國の言葉を見殺し挑んだ結果、私は宣言通り：一瞬にして



敗北した。

儀國が取った構えは扶桑皇国に代々伝わる構え、居合い。扶桑刀を鞘に収めた状態で構える、それが居合いの形だ。

確かに儀國は居合いの構えを取っていた、しかし鞘からは一度も払われていない。

鞘に納刀したまま、カチンと切羽と鯉口が当たる音だけが聞こえた。その時には既に、私は敗北していた。

いつの間にか手から消えていた私の扶桑刀は、宙を舞い砂浜に突き刺さっていた…。

いったいあの時、何が起きたのだ？ 儀國曰く、魔術も一切使っていないと言っていたが…それだと、人の身だけで行ったということになる。

カチン、と音が鳴ったという事は…儀國は確かに刀を鞘から払い、そして再び鞘へと収めたということ。

つまり…鞘から抜いて扶桑刀を振るい再び収める、という一連の流れが見えない程の速さを以ってしてされた、ということ…。

しかし、そんな事可能なのだろうか？

いや、相手はあの儀國だ。儀國の世界には我々にはない未知の技術が沢山ある。

きつとあの居合いもその内の一つに違いない。

是非とも習得したいところだが…儀國は面倒だと断わり続ける。

そしてエイラやサーニヤ、剣術に縁のないメンバーに上手く聞いてみてくれないかと頼んだが…見事に失敗に終わった。

どうやら儀國はこうなることを読んでいたらしい。

流石だ、と…そこは素直に認める。

やはり教えを請うには、儀國に試合で勝つしかない、か…。となれば、どうやってあの居合いを対処するか…。

「あれ、今日は先客がいるなあ」

背後から儀國の声と砂浜を踏む足音が聞こえた。

「儀國…」

「特訓？相変わらず頑張ってるねえ」

「…儀國、頼む。魔術もそうだが…あの試合の時に見せた居合いについて教えてくれ」

駄目元でもう一度儀國に頼んでみる。

やはり、面倒だと返されるか…。

「…坂本はさ、何の為に剣を振るうんだ？」

予想していたのとは違う返答が…、質問が返ってきた。

「えっ？」

「いいから答えろ、何の為に剣を振るう？」

いつになく、真剣な表情で儀國は私に尋ねた。ふざけている様子は一切無い、真剣に…私に理由を尋ねている。

「…私は、刀を振るうのはネウロイを斃すため。一日でも早くこの

世界を平和にする為だ」

だから私も、その問いに答えた。私が刀を振るう理由はただ一つだけだ…！

「そうだ。それが坂本の、お前の剣を振る理由。だったら、それでいいじゃねえか」

「えっ？」

「無理して俺と同じ剣を振る必要は無い。  
坂本には坂本の剣がある、それを時間を掛けて鍛えていけばいい。  
坂本は、コレがなくてもきつと強くなるぞ、必ずな」

「儀國…」

そう言った儀國の顔は、何故か悲しみを帯びていた。  
悲しい笑みだった…何故そんな笑みを浮かべるのか、私には分からなかった。

だが…

「それでも私は、強くなりたい。だから儀國、私の師として教えてくれ……！」

「坂本……」

今の私は弱い。

今のままでは……儀國と共に闘うことは勿論、護る事すら出来ない。

何も出来ないまま、見ているだけというのは……絶対にしたくない。

「……そうだな、そこまで言うなら……その意気込みに免じて、教えてやら無いこともない」

「何！？ほ、本当か！？」

私は耳を疑ってしまった。あの儀國が指導してくれると言うではないか。

いつも面倒だからと教える気がないと言っていた、あの儀國が……だ。

「ああ。ただしだ！それ相応の対価を払ってもらう必要はあるけどなあ……」

悲しい笑みから一変、不適な…人を試す様な笑みを浮かべて儀國は言ってきた。

あの技を教えてもらう為に支払う対価…何を差し出せばいいのか。

「どうした？怖いんなら別にいいぞ？」

挑発してくる儀國。あの笑みからして、きっとロクなものではない。だが、私は退かない。

その対価とやらに、お前の挑戦に受けて立とう…！！

「いいだろう、お前が望むその対価…私は支払おう！」

私の答えに、怪しく笑みを浮かべた儀國。そしてゆっくりと私に近付いてくる。

「とりあえず覚悟は分かった。ああ対価だけど、ちょっと大声じゃ言えないんだわ。  
だからちょい耳貸せ」

言われた通り、耳を傾ける。儀國は私の耳元に顔を寄せて、そして小声で対価の内容を伝えられた。

「な、何だと！？／／／」

私は儀國が提示してきた対価に、思わず大声を挙げてしまった

「うるせーなあ。大声出すなよ、もっさん」

「誰がもっさんだ！？い、いやそれよりも…じょ…冗談なのだろ儀國！？そうだろう！？」

「いゝや、これが条件だ」

「み、見損なったぞ儀國！お前がその様な男だったとは…！！！！／／」

「おいおい、昔からよく言うだろ？大いなる力には相応の覚悟と相応の対価が必要だってな。等価交換の法則ってやつだ。それに坂本は良い女だし…俺好みだから、なあ？」

「うつ…くつ…／／／」

どんな対価を提示されても私は支払う覚悟でいた。だが、内容が内容だけにその覚悟が大きく揺さぶられてしまった。

「とまあ、とりあえず条件は伝えた。後はお前次第、ゆっくり考えればいいさ。」

ああ、そうそう…夜いつでも俺の部屋に来ていいぞ？」

そう言い残し、儀國は砂浜から立ち去っていった。

一人残された私は、儀國に提示された対価を何度も頭の中で復唱する。

復唱する度に顔が熱くなっていくのを感じる。

恐らく今の私は、顔を赤くしているだろう。

「ど、どうすればいいんだ？私は…いたい…／＼／」

翌朝

「あゝ…マジで眠いわ」



大きな欠伸を一つ零し、ミーティングルームへと足を運ぶ。

ようやく魔力回路が半分ほど回復された。しかしまだ魔術が使える状態ではない。

そんな状態ではあるが、一応会議だけは出しておけとミーナから言われている。

それだけ参加し、後は整備兵としての作業に戻る。

「坂本のヤツ、今頃どうしてるだろうなあ」

昨晚の一件を思い出す。

坂本に求めた対価、簡単に言えば俺の女になれ…という事だ。

…自分でも何言ってるんだろっと思う。

しかしインパクトのある事を言わないと、坂本は絶対に諦めないと思った。

そしていざ言ってみると、坂本は意外な事に大きく反応した。予想では、馬鹿者！とか言いいながら怒って拳骨落としてくるかと思っていたが…。

坂本のあの様子、効果は充分にあったようである。

意外や意外、やはり坂本も女…：こういう類の話には弱いと見える。  
恐らくあの時の坂本の頭の中では（そこまでよ！）…：な妄想が浮んでいたに違いない。

そうすると、純潔が穢れると魔力を失うと信じている坂本は絶対に拒否してくる。

これで坂本も諦めるだろう…。

これから先、最低な野郎として認識されるが…：諦めてくれるならそれでいい。

何があるうと、コレばかりは教えるつもりはない。

確かに坂本はその質を持っている。だが、坂本では力を物にすることは出来ない。

開眼させた瞬間、逆に力に支配されるがオチだ。

そうなった時、俺は…：坂本を　さなければならぬ…。  
そんな事は…：絶対にしたくない。

「ういゝす、むゝす、おはよゝす」

「あ、おはよう御座います！」

ミーティングルームに着くと宮藤が最初に出迎えてくれた。今日も相変わらず元気な様子だ。

続けてリーネ、サーニヤ、エイラと挨拶を交わし適当に席に着く。

「では、今日のミーティングを……あら？少佐は？」

ミーナが坂本が居ない事に気付く。そう、確かにこのミーティングルームに坂本に姿は見当たらない。

「そう言えば、見当たらないな。少佐が遅れてくるなんて珍しい」

バルクホルンも不思議そうな表情を浮かべていた。と、その時ミーティングルームに坂本がゆつくりと現れた。

「さ、坂本少佐？」

「お、遅れてすまない……」

ミーナが少し驚いている。坂本の目の下には隈が出来ていた。

誰がどう見ても眼不足だと分かる程にハッキリと…。

「ど、どうしたんですか坂本さん!？」

「坂本少佐! いったい何が…」

「大丈夫だ、宮藤、ペリーヌ…。昨晚、少し考え事をしていたら眠れなくてな…」

「考え事…ですか？」

「ああ、私は…覚悟を決めた」

心配する宮藤とペリーヌに笑みを浮かべて、そして俺の方へと顔を向ける。

「儀國、私は覚悟を決めた。わ、私はお前の物になろう!」

坂本の一言により、ミーティングルームの空気が一瞬にして凍り付いた。

…予想外だった。まさか坂本がこんなにあっさりと決断するとは…。

しかも拒否するのではなく承諾。

此方の考えを、坂本は悪い意味で見事に覆してくれた。

「…儀國さん？これはいったいどういう事かしら？」

静寂が流れるミーティングルーム、その静寂を破ったのは我が隊のリーダー、ミーナだった。ブラックスマイルを浮かべるミーナの背後からは今までに見たことがない程のドス黒いオーラが見えた…。

ケツの穴にツララを突っ込まれた気分…とでも言おうか。

「…儀國、どういう事なんだ？説明しろ…」

エイラもミーナに負けんぐらいの黒いオーラを見せている。

マズイ…さっさと弁解しないと死ぬぞ俺…！

理由を説明しようとしたその時、ミーナが先に口を開き坂本に尋ねた。

「少佐？いったいどういう事なのか説明してもらえるかしら？」

「昨晚、私はあの技を教えてもらつよう儀國に請いた。そして承諾は得たんだが…そのた、対価として……な」

「対価…？」

「う、うむ。私は強く成らなければならない。

強くなるその為ならば私の身も心も、儀國…！お、お前に託す！…  
／／／」

顔を赤くして言う坂本。坂本さんの女の子（？）らしい一面が見れたと言うか何というか…。

そして皆からはメチャクチャ睨まれてる。

ペリー又は勿論、エイラとミーナからは物凄く睨まれる。その鋭い視線は、その視線だけで人を殺せるんじゃないかってぐらいだ。

ただ一人、ルッキーニはついていけない様子だった。

「…弁解する余地をくれませんか？いやマジで、お願いします」

二時間後、なんとか誤解は解けた。

坂本は冗談だと分かると物凄く怒ってミーティングルームから出て行った。その際、鋭い拳骨が俺の頭に降り注いだのは…言うまでも無い。

幾らなんでも怒り過ぎだ。あんなに怒る様な内容でもなかったのに…。  
そんなに教えて欲しかったのか？だとしたら、坂本の強くなりたいという執念は凄まじいものだと思う…。

どちらにせよ今日の教訓、坂本に冗談を言うのは…やめるべし。

「イッテ…もっさんの奴思いつきり殴りやがったな…」

「自業自得ですわね、儀國さん」

「うるせえよ、駄眼鏡が」

「誰が駄眼鏡ですかッ!？」

「ああ間違えた、ツンツン眼鏡だったな」

「キイイイイイイッ! ! !」



## Act 14：冗談注意報「忒」（後書き）

Act 14「忒」でした。

今回は完全におふさげな回でしたけど…次話からまた徐々にシリアスな話になっていく…筈です！

そうなるように頑張って書きます！

そして後ちよつとで儀國とは違うオリキャラが登場…予定！  
乞うご期待！

すわっ！

Act15：新たな戦いの前奏曲「壱」（前書き）

Act15「壱」です。

いやあ、大型のバイクってカッコイイですよね！  
こう大きいのに乗って走るとテンション上がるって言いますか…。

…私、バイクの免許持って無いんですけどね。  
ヨホホホホッ！

…ハア、取りに行こうかな、バイクの免許。

## Act 15：新たなる戦いの前奏曲「壱」

今日は何をしようか…朝食を食べながら、ふと思った。

今日は休日、仕事をしなくてもいい日だ。とは言っても、俺の場合殆ど仕事という仕事をしていない気がする。  
ミーナとかには特に咎められている訳ではないが…やはり、自分は給料泥棒だと思う。

最近になって整備兵としての作業を再び行っているが…。

何はともあれ今日は休み、何をしようか…。

「…街にでも行ってみるか」

味噌汁を啜りながら、そう呟いた。

ローマにはまだ一度も行ったことがない、古き時代のローマの街並みというのにも興味がある。

安藤達もローマの街に行くと言っていたことだ。

「よし、決めた」

今日は街に出てブラブラと過ごそう。  
と、なれば早速部屋に戻って準備だ。

一つ誤算があった。

それは移動手段、ここからローマまでかなりの距離がある。  
徒歩での移動は不可能に近い、ローマに辿り着くのに数時間は費や  
す。

バイクなら免許を持ってるが、車の免許は生憎と持っていない。  
それに、仮に持っていたとしてもAT車しか乗ってない自分ではM  
Tの車に乗る事は出来ない。  
クラッチとか普通に無理だ、うん。

誰か運転できるヤツに頼むか…。  
安藤達も行くと言っていたから、一緒に連れて行ってもらおうか？

そう悩んでいた時だ、安藤が突然部屋にやってきた。

「おい儀國、何かお前に届け物があるらしいぞ」

「えっ？届け物？」

安藤に言われてハンガーへと赴く。そこには木製の大きな箱と、物珍しげに集っているウィッチ達の姿があった。

「あ、儀國さん」

「よう宮藤。で、これが？俺への贈り物って言うのは」

「はい、いつの間にか置いてあったそうなんですけど…」

差出人は…書かれていない。ただ一言、儀國 雅史へ、とだけ書かれている。

いったい誰からだ？そしてこの中には何が入っているのか…。

蓋を取り外し箱の中身を見る。

そこに入っていたのは…、

「あれ？これって…」

「お、バイクだ」

シャーリーが最初に反応した。箱の中身は一台の単車、そう…あの世界で愛用していたバイクの一つが箱の中に収められていた。

「つーか何で俺のバイクがあるんだ!？」

モデルはD N - 0 1、イメージは狼と騎士。カラーはシルバー。

確実に違法である改造バイク、世界魔術協会にいる知り合いの技術士と錬金術師と共に作ったバイク。

素材は錬金術により生み出された鉱物：オリハルコンの使用。

デザインは俺：狼をイメージした滑らかさと、騎士をイメージした重量感溢れるデザインに。

それを元に設計し製作した技術士。

そして出来上がったのがコレだ。あの頃の俺達は若かったと…、そう思う。

今更ながら、なんで自ら違法車に改造してしまったのやら…。

思えばこれを作った時、周りからはオタクやら中二病やら、色々と言われた記憶がある。

それに別にこれと言って特別な魔術施工がされている訳でもない。オリジナルよりも性能と扱いやすさを向上させただけ。

あの頃の俺は、ただただカッコイイバイクが欲しいと、それだけの為に協力を得て作ったのだ。

気に入ってるからいいけど…。今更魔術施工する気もさらさらない。

因みにコイツに名前は無い。某究極幻想の主人公も北欧神話の怪物、フェンリルと名付けたバイクに乗っていたが…。流石に名前まで付ける気にはなれなかった。

「スゲーカッコイイバイクだな！これ、儀國のか！？」

シャーリーが眼を輝かせてバイクに近付く。

流石シャーリー、こういった類の物には眼が無いようである。

「ああ。差出人が誰かは知らないけど…」

何はともあれ、移動手段を得た。これならばローマにも直ぐに辿り着けるだろう。

「なあ儀國！コレ、あたしに乗らせてくれよ！！」

「ああ？ダメに決まってるだろ、これからソイツ使っただよ」

「えっ？儀國さん、何処かに出掛けるんですか？」

「ああ、少しローマにでも行こうと思つてな。一度も行つたことないし…。」

それになんか今日休日みたいだしな、俺」

「じゃああたしも行くよ！偶然、あたしも今日は非番なんだ」

シャーリーが同行すると言い出す。

それを聞いてルッキー二も一緒に行きたいと言い出した。

「俺のバイクに乗りたいたけだろ？シャーリーは…。」

ダメだ、今日は一人で過ごす予定なんだよ」

「えゝいいだろ？だいたいお前、ローマ行くの初めてなんだろ？  
だつたら道案内人とか」

「要らないな。見知らぬ土地を探索するのも一興、これがまた面白いんだよ」

分からない場所を探索する、それは正に冒険。  
今となつては見慣れた景色でも昔…幼かった頃、そこは見知らぬ領域そのもの。



幼い子供が胸を躍らせ、冒険心に駆られその領域に足を踏み入れる。それは大人になった今となっても変わらない。

「どうしてもダメか？」

「ムリダナ（・x・）」

「…儀國がいない間にバイクに絶対に乗るからな。後勝手に弄る」

「そんな事してみる。容赦なく」CODE:BLUE「終焉の蒼」で燃やし尽くしてやる、  
跡形もなくなあ…」

無断で乗るなど言語道断。以前に、このバイクに誰も触らせる気は全くない。

万が一、壊されたりでもされたら…その時は間違いなく、俺は憤怒に身を任せ大暴れする。  
っ！か絶対に大暴れする。

「まだ儀國は魔術使えない状態だろ？」

「まあな…」

左腕はほぼ治った。しかし未だに魔力回路は治っていない、あれから二週間ぐらい経つが…未だに修復作業が続けている。

「兎に角、ダメなもんはダメだ。お前は大人しく基地で過ごつて…な、なんだよその目は…」

「……………」

「……………」

シャーリーと睨み合う。

他のメンバーは溜息、バルクホルンはいい加減にしろとシャーリーを咎める。

だが、シャーリーは退かない。ジッと眼を見据えてくる。

「…………ハア、わーったよ。分かりましたよ！連れて行きゃいいんだろ連れていきやよ！」

折れた、結局俺が折れました。

こりゃ連れて行かないと引きそうにない。それぐらい、シャーリー

は真剣だった。

それに連れて行かないと本気で俺が居ない間に弄られたりされて  
うだ。

流石にそれだけはやめてもらいたい。

とりあえず今日だけ、今日だけは仕方なく連れて行ってやる…。

「本当か!？」

「40秒で支度しな!グズは嫌いだよ!」

「いや、無理だろそれ!」

シャーリー side

今日の朝、いつもの様にエンジンテストをしようとハンガーへと向  
った。

と、そこには大きな木箱が一つ。ポツンと置かれてあった。

昨日まではなかったのに…、そう思いながら木箱を見ると、儀國へと書かれていた。

どうやらコレは儀國宛の物らしい。いったい何が入っているのか、誰が儀國に宛てて送ったのか…詳しい事は書いてなかった。

中身を見たい衝動に駆られたけど…まず中佐に連絡することにした。

そして中佐達と、遅れてやってきた儀國が来て、ようやく木箱の中身を見た。

そこに入っていたのは一台のバイク。思わずあたしはそのバイクに見惚れてしまった。

儀國の所有物だと言う銀色に煌くバイク、騎士が纏う甲冑を思わせるフォルムが特徴的なバイクだった。

ただ一言、カツコイイ…それだけが頭の中に浮んだ。

そしてあのバイク、儀國の言う2010年の技術が詰まったバイク。きっとあたしが乗っていたバイクよりも凄く速いスピードで走る筈。

そう考えた時、あたしは乗ってみたいという衝動と、解体してみたいという衝動に駆られた。

儀國の世界の技術が詰まったバイクを乗ってどれだけの速さが出るのか…この身で体感してみたい。  
どれほどの技術力なのか、解体してこの眼で見たい。

あたしは早速儀國に頼んだ。が、今から使うからダメだと言われた。

どうやらローマに出掛けるらしい。なら、後ろでもいいから乗ってスピードを体感したい、そう思ってあたしもローマに行くという儀國に同行することを言っただけ…やっぱり断わられた。

それならば儀國が居ない時に無断で…と言ったら中佐に負けないぐらいのブラックスマイルで脅された。

よっぽと大切なバイクらしい…。

今の儀國は魔術が使えないけど、治った時に「終焉の蒼」CODE:BLUEであたしが燃やし尽くされる。

一瞬にして燃やし尽くす程の恐ろしいと言われている炎。中佐は蒼い悪魔の炎とまで呼んでいた、そんな炎…あたしだって受けたくない。

でも、あたしは引き下らない。あたしは…このバイクに乗ってみたい。

そんな思いを込めて儀國の眼を見つめた。

するとあたしの思いが通じたのか、あれだけ断わっていた儀國が折れて同行していいと、渋々答えた。

そして今、あたしは準備を整えて早く儀國の元へと向った。  
もう儀國は既に基地の外で待っている。

「よう儀國！待たせた……な」

「来たか…案外早かったな。マイヘルメット持参か…」

「あ、ああ……」

あたしは思わず、言葉を失ってしまった。

初めて見た、儀國の私服姿。

紺色の長ズボンに、白いラインが十字架状に走った黒のアンダーシャツ、その上にはワイン色のレザージャケット。

なんて言うか…物凄く新鮮で、カッコイイと思った。

いつも黒の整備兵の服を纏っている姿しか見てないから尚更。

見送りに来たんだろう、他の皆も同じ。儀國の私服姿に見惚れてるって感じがしていた。

「どうした？さっさと乗れ、行くぞ」

「あ、ああ……」

儀國に言われて、あたしは慌てて後ろに乗る。

「そんじゃ、しっかり掴まってるよ？」

アクセルが回される。それに応えるかのようにエンジンが唸りを上げる。

そして儀國とあたしを乗せたバイクはローマに向って走り出した。

Act15：新たな戦いの前奏曲「壱」（後書き）

Act15「壱」でした。

さてさて、次話では遂に第二のオリキャラが登場します。  
あ、男ですからね？オリキャラ。

女性のオリキャラはまだ出さないつもりでいますので、あしからず。  
すわっ！



**A c t 1 5 : 新たな戦いの前奏曲「弐」(前書き)**

A c t 1 5 「弐」です。

第二のオリキャラ、登場です。

## Act 15：新たなる戦いの前奏曲「弐」

ローマの街へと着く。

「着いたな」

初めて訪れた、ローマの街並み。  
穏やかな時間が流れている、本当に今戦争中なのかと疑いたくなる  
ような感覚さえ覚える。

平和なのはいいことではある。そして…通行人たちの視線が皆此方  
を向いていた。

正確には乗っているバイクに、だ。

この時代にはない型のバイク、デザインだってそうだ。  
だから珍しいのだろう。

「なかなか速かったけど、もう少し速度出せなかったのか？」

後ろではシャーリーが文句を零す。

「何事も安全運転だ、事故したらどうする気だ？」

記憶が正しければ、シャーリーの乗っていたバイク…レッドマン・スカウトで280km以上だった筈…。ここまで来るのに出していた速度は最高でも100km。

流石に真っ直ぐ道ばかりじゃないしバカみたいに速度を出せない。それにこれは普段家庭用(?)として使うバイクだ。決して競技用に改造されているわけじゃない。

従って、どんなに頑張っても250kmぐらいしか出せない。

もう一台の方はこのバイクよりも本格的に魔改造がガッツリ施されたバイクだ。

それこそ最高速度は400kmを軽く超える。それならシャーリーは喜びそうだが…。

その存在については、コイツには黙っておこう。

「まあいいや。なあ儀國！そのバイク、今度私の乗らせてくれよ！」

「えゝ…お前が乗るとなんか普通にぶっ壊しそうだしなあ…」

「何言ってるんだよ儀國！私が事故する訳ないだろ？」

自信有り気に言うシャーリー。

チタン合金よりも遥かに硬度を持つオリハルコンで出来ているこのバイク。

そんな簡単に壊れはしないことはしないが…シャーリーに渡すと呆気なく壊されそうな気がしてならない。

確かに、シャーリーならば運転技術もあるから問題はないとは思うが…。

やはり、不安で仕方ない…。

「頼む！な？儀國」

「…ハア、分かった分かった。今度な」

「本当か！？やった〜！絶対だからな！？」

バイクに乗る許可を出すと、シャーリーは子供の様に喜ぶ。

「但し！もし壊してみろ、その時は一生を賭けさせてでも弁償してもらうからな。」

脅しじゃないからな！？後解体禁止、これが条件だ」

コイツの制作費はハツキリ言つて馬鹿にならない。  
金額的に言えばマジでキ　ガイ価格なのだ。それぐらいこのバイク  
には大金を掛けている。

「ちえゝ、仕方ないな…」

「それが嫌なら乗るんじゃない。ホレ行くぞ」

「はいはい」

それから、シャーリーと色んな場所にいった。  
まずローマと言えば真実の口。そこでルツキーニもやった、ローマ  
の休日で有名なあのシーンを実際にやってみた。

真実の口の中に手をつ込んで、そして手が抜けないフリ。  
頑張つて必死の演技をする。シャーリー冷ややかな眼、くだらんこ  
とするなと呆れられる。

ノツてくれなかったのが残念だった…。

「ノリ悪いぞ、シャーリー」

「いや、お前演技下手くそ過ぎるぞ」

続いてコロッセオ。不意に、某奇妙な冒険シリーズで二重人格者のボスと車椅子の騎士が闘ったあのシーンを思い出した。

ゲームであるシーンが再現されて、そして神曲にアレンジされたPさん（仮名）のテーマ曲が流れた時は…マジでテンションが上がった。今でもあの時の興奮は忘れられない。

今も脳内でのあの神曲が流れ、そしてあのシーンが再生されている。そしてついつい…シルバー リオッツ！…と、叫んでしまった。

いきなりどうしたとシャーリーに心配された…。

もしシャーリーもあの漫画を読んで、あの神曲を聴いていたら…絶対にテンションが上がっていると思う。

「未来で逢おう、イタリアで…」

「何言ってるんだ？」

その後はブティックや雑貨屋、アクセサリー店などを見て周る。途中、シャーリーに似合いそうなブローチを見つけた。

シャーリーも、そのブローチを一瞬だけ物欲しげに見ていた。折角だからそのブローチを購入することに。今まで貰い使い道がなく貯めてきた給料内：では少しキツかった。

そこでお師匠様直伝の値切り交渉術で、半額の値段まで下げさせてやった。

店主涙目、シャーリー啞然。世の中値切り、どんな物でも安く買えたら最高だ。

いつの時代だって変わらない、値切り万々歳である。  
次は何を値切ろうか…。

「お、お前結構凄いな…。普通あんな事言えないぞ？」

昼頃、適当な店に入り昼食を取る。

今日の昼食はピザ、ピザなんて冷凍でしか食ったことがない。店で食べるピザと言うのはそれは最高に美味しいものだった。

「少しでも安く買えた方がいいだろ？世の中そんなモン、節約術と値切り交渉術さえあればなんとかどんな貧乏人でも生きていけるんだよ」

因みに、店主には“この店にあるアクセサリーをウィッチ達が着けることで宣伝効果になる、きつと同年代の女子は買いに来るだろう”等などと、適当に理由付けて強引に話を付けた。

相手に話す反撃の隙を与えない、そして半分睨みを利かせて脅すように言う：それが我等お師匠様の教え。

なんつー値切り交渉術だと思う人もいるだろうが、こんな方法で成功するから不思議だ。

「けど意外だな：シャーリーってなんかこういうの、興味全くありませんって感じてなんだけど」

機会弄りが大好きなシャーリーにとって、こう言ったアクセサリーの類には興味ないと思っていた。

が、たまたま寄った店で見たシャーリーの表情。一瞬、本の一瞬だけ見せた物欲しそうな顔。



シャーリーにも、そう言った女性らしい所もあるようだ。  
これは新たな発見である。

「ん〜、まあそうだなあ。さっきのは何となくいいなあって、そう  
思っただけだよ」

「ふ〜ん、まあいいや。ってことで、ほらよ」

シャーリーに買ったブローチを渡す。

俺が持っけていても仕方が無いし、元よりコレはシャーリーにやるつ  
もりだった。

あんな表情をしたのに素通りしていくのは…流石に、な。

「い、いいのか？」

「ああ、俺からのプレゼントだ。海より広く、空より澄んでいる心  
を持つ俺の優しさに、感謝しろよなあ？」

「それエイラの真似だろ？つーか自分で言っなよ」

「ムリダナ（・x・）」

シャーリーと笑い合う。

今日は仕方なくだが、こうやって誰かと一緒に街を回るのも…まあ悪くは無い。

美味なピザも食べ終え、胃も満たされた。  
次は何処に行こうか…。

「さてと、なあシャーリー。なんかいい場所的な」

刹那、遠くから爆発音が聞こえた。

見ると一台にトラックが轟々と音を立てる炎に包まれて燃え上がっている。

なんだなんだと、野次馬がトラックの前に集る。

トラックの持ち主らしき男が燃え盛る炎に包まれたトラックを見て、嘆いていた。

「な、なんだ？事故か？」

シャーリーは少し驚いた様子で燃えるトラックを見ている。  
しかし、俺は全く気にならない。大体の理由が想像出来ているからだ。

「どうせアレだろ？煙草の消し忘れとかが原因で引火したんじゃない

」

鼓動が跳ね上がる。

長年感じていなかった、懐かしい気配。

そして此方に向けて放たれている…冷や汗が流れ出る程の威圧感と殺気、野次馬の中から感じる。

「お、おい儀國？お前どうしたんだ、顔色悪いぞ…？」

何故あの男がこの世界にいる？  
そんな疑問を抱いたと同時に

。

「やあやあ久し振り、元気そうだね儀國」

振り返る。野次馬の中に一人、男が此方に向いて立っていた。  
忘れもしないあの顔、そして甦ってくるアイツとの過去…そして、  
圧倒的な強さ。

「彩月…！」

かつての“先輩”が、そこに立っていた…。

## A c t 1 5：新たな戦いの前奏曲「弐」（後書き）

A c t 1 5「弐」でした。

さて、第二のオリキャラ…彩月の登場です。

初段階で考え候補として上がっていた主人公の苗字でもあります、今回はその候補苗字を使いました。

さてさて、次話ですが…次は本編からちょっと離れて短編的な…ちよつとした小話的なものになります。

以上です。

すわっ！

A c t    E X : 兄 妹 ( 前 書 き )

予告通り、EXです。

今回は作者の好きなネタをバンバン出しています。

Act EX: 兄妹

「おっ、ピアノだ」

今日の午後、誰もいないミーティングルームへと避難する。  
理由は簡単、今坂本に追いかけられているから…。

前の一件、“俺の女になったら技を教えてやるぞは実は嘘でした、許してね事件”の事を未だ根に持っており、その仕返しとばかりに一日一回の試合という約束を破ってきた。

朝試合したのに午後も試合をしようと、断われれば扶桑刀を抜いて問答無用で襲い掛かってくる。何度か追い払ったが、未だに止める気配を見せない。

どうやら坂本はかなり根に持つタイプのようなのである。

俺がちゃんと技を教えるか、坂本に斬られるかのどちらかをしなければ、この行為は終わらないだろう…。無論、どっちもお断りだ。

それからミーティングルームへと逃げ込み、何とかやり過ごした。  
今頃坂本は外を探しに出ているだろう。

そして現在、立派なピアノの前に立っている。  
ここではたまにサーニャが演奏したりして、それをエイラが聴いている。

エイラ曰く、癒される午後の一時だそうだ。  
俺はまだ一度も聞いたことはないが…。

「……………」

なんとなく、鍵盤に触れる。ポーン、と音を立てながら沈む白鍵。  
…ピアノに触るのも、随分と久し振りの気がする。

ウチのお師匠様の意外な特技、それがピアノだった。  
訓練以外で暇があればよくピアノを弾いていて、ついでだから俺も無理矢理習わされた。

師匠からの命令だとか何とか言われて…、今思えばどんな命令だとツツコミたい。小一時間程問い詰めたい。

それに訓練並みに…いや、それ以上に扱かれていた気がする。

その扱きのおかげで、今ではかなりの曲を弾けるようになった。  
主にゲームのBGMばかりだが…。シヨパンやベートーベンは一切弾いたことがない。



お師匠様の趣味、ゲームのBGMオンリーでこの指に叩き込まれた。

因みに知人のB（仮名）曰く、ピアノが弾ける男はカッコイイとのこと。

よく分からないが、女子と言うのはピアノが弾ける男子をカッコイイと思う傾向があるらしい。

そしてまた知人のC（仮名）曰く、男子は何故かピアノを見ると『猫踏んじやった』を弾く、らしい。

C（仮名）が言っている事が本当なのか嘘なのか、それは未だに分かっていない。  
俺は弾いてない、そもそも猫踏んじやった自体習って無いから弾けない。

「…久し振りに、なんか弾くか」

椅子に座り高さを調整。そして静かに鍵盤に触れた。

サーニヤ      s i d e

今日の午後、ミーティングルームに足を運ぶ。  
久し振りにピアノを弾こうとした、エイラも一緒に来てくれた。

ミーティングルームの近くに来る、するとミーティングルームから  
ピアノの弾く音が聞こえてきた。

「あれ？先客がいるみたいだな」

「…そうみたい」

ミーティングルームから聞こえてくる、綺麗なピアノの音色。  
でも、いったい誰が弾いてるんだろう…。

そつと、ミーティングルームを覗く。  
そこにはお兄ちゃん…儀國さんがいた。

「あれって、儀國じゃんか。アイツもピアノ弾けたんだ…」

「…うん」

ピアノを弾くお兄ちゃん。とても綺麗な音色が奏でられている。

とっても上手だった。

初めて聴く曲。あの曲も…お兄ちゃんの世界にある曲なのかな。

でも、お兄ちゃんが弾くその音色は、とても悲しげだった。例えるのなら…まるで誰かへ送る鎮魂歌のような…。

そしてピアノを弾いているお兄ちゃんの顔も、悲しそう…後悔しているような顔だった。

演奏が終わり、お兄ちゃんが一息吐く。と、私達に気付いて顔をこっちに向けた。

「なんだ、二人共いたのか」

悲しそうな顔から、いつもの顔へと戻る。

「気付かないぐらい集中してたのかよ…。でも意外だな、儀國もピアノ弾けたんだ」

「まあな。昔からウチのお師匠様に扱かれててな…そりゃもう鬼だったよ、ホントに…」

「ねえ、今の曲は？」

私はお兄ちゃんに尋ねた。

悲しそうな音色で奏でられるあの曲について、お兄ちゃんが悲しみと後悔の表情を浮かべて弾くあの曲について…。

「あの曲は『失われた彩画』って曲、俺が好きな曲の一つでもあり、最初に習った曲だ。

魔王ドラキュラとそれを退治する聖なる鞭を持った一族の戦いを舞台とした作品のな、それに使われてる曲だ」

「ま、また凄い作品だな…」

「失われた…彩画」

「他にもお勧めの曲あるぞ？俺的には…そうだな、Blood Tearsとかだな。

どうだ？今なら特別。Blood Tearsを聞かないか？」

「血の涙かよ…嫌なタイトルだな。て言うか、変な喋り方すんな」

エイラとお兄ちゃんが楽しそうに話し合っている。  
そしてお兄ちゃんはピアノに向って鍵盤を弾いた。

ゆっくりとしたメロディから、徐々にテンポが早くなって、激しい  
曲に変わっていく。

B l o o d   t e a r s … 血の涙。  
ドラキュラを退治する一族の物語…。

聖なる鞭を持った一族が、ドラキュラを退治する為に長い旅に出る。  
その中で恐ろしい魔物を退けながらも突き進む一族の勇敢さ…そんな  
印象を受ける曲だった。

とても綺麗な曲だった。エイラも私も、静かにお兄ちゃんのピアノ  
を聴いていた。

B l o o d   t e a r s を弾いているお兄ちゃんも、失われた彩画  
を弾いていた様に悲しい顔じゃなくて…とても楽しそうな顔をして  
いた。

一度どんな物語か、読んでみたい…。お兄ちゃんが言うから、面  
白そう…。

エイラに言ったら、そんな物騒な物読むなって言われた…。

それから私は、お兄ちゃんに色んな曲を教えてもらった。

私が聞いた事の無い曲ばかり、とても楽しい時間を過ごした。

けど、失われた彩画は弾きなくなかった。何であんなに悲しそうな顔をしたのか…私には分からない。

お兄ちゃんに聞いても、そんな顔をしてたか？って誤魔化される。

だけど、どんな理由があっても、お兄ちゃんが悲しい顔を浮かべる曲は嫌…。

今度は私がお兄ちゃんの前でピアノを演奏した。

お兄ちゃんに演奏を聞いてもらうのは…今日が初めて。

演奏を聴いてくれたお兄ちゃんは、俺よりも上手だって頭を撫でて褒めてくれた。

やっぱり、お兄ちゃんは笑っている方がいい。そのお兄ちゃんの方が、私も好きだから。

「見つけたぞ儀國！」

いきなり坂本少佐がミーティングルームに駆け込んできた。

手には扶桑刀、息を切らして…鬼のような形相でお兄ちゃんを睨んでいる。

「おい、今折角サーニヤがピアノ弾いてんだよ…静かにしろよな」

「そうだそうだ、私の午後の一時を邪魔しないでくれよな」

「まったく…これだから空気読めないもっさんは…」

お兄ちゃんとエイラが反発。すると坂本少佐は咳払いして、納得の行かない顔をした後扶桑刀を鞘に収めた。

「サーニヤ、続けてくれ」

「う、うん…」

坂本少佐がお兄ちゃんの事をジッと睨んでいるけど、私はピアノを続けて弾いた。

「お、今日は何だか賑やかだな」

「あら、皆サーニヤさんのピアノを聞いていたのね」

それから次々と皆が集ってきた。

ミーナ中佐や、バルクホルンさん。ペリーヌさんも…皆ミーティングループに集った。

エイラがお兄ちゃんも実はピアノが弾けるって言うと、皆弾いてみてくれてお兄ちゃんに希望した。皆興味があるみたいだった。

儀國さんは最初は渋ってたけど、私がお願いするとピアノを弾いてくれた。

もっとお兄ちゃんの曲を聴きたいって…、お兄ちゃんは快く聞いてくれた。

だけどミーナ中佐やエイラが、どうして私達の時だけ…って、ちょっと不機嫌そうだった。

それからまた、お兄ちゃんの演奏が始まる。

私に聞かせてくれた Blood Tears から始まって、その他にも沢山の綺麗な曲を弾いてくれた。

皆意外そうな、驚いた顔を浮かべていた。



「さてと、そろそろ最後とするか。最後のシメはサーニヤ、頼むわ」

「うん」

一時間程して演奏が終わった後、お兄ちゃんはまた聴かせてくれよって言って、ミーティングルームから逃げ出すように走り去った。

坂本少佐も、また演奏を聴かせてくれって言った後、鞘に収めた扶桑刀を抜いてミーティングルームから飛び出していった。  
多分…ううん、きっとお兄ちゃんを追い掛ける為。

「…お兄ちゃん、大丈夫かな…」

「大丈夫だろ、だって儀國だし」

エイラのその言葉に、皆頷いていた。

他の皆は逃げたお兄ちゃんとそれを追いかけた坂本少佐が行った出入り口を見て、やれやれって感じて苦笑いを浮かべていた。

でも、皆楽しそうに笑っていた。

「……クス」

「ん？どうしたんだ？サーニヤ」

「ううん、何でもない」

…皆がいて、お兄ちゃんがいて、皆笑い合っている。  
そんな毎日がこれからも、ずっと…続きますように。

## A c t E X：兄妹（後書き）

A c t E Xでした。

今回はサーニヤとの絡みをメインとした短編：ちょっとした日常（？）を書いてみました。

ネタについては…反省しません。

だって好きですからコナミ！悪魔城シリーズ好きですから！

B l o o d T e a r s はマジで神曲、そう思うのは私だけじゃない…筈！

すわっ！

Act16：かつての先輩「壱」（前書き）

Act16「壱」です。

今回は微妙に戦闘描写、入ってます。

## Act 16：かつての先輩「巻」

シャーリー side

その男は、いきなり私達の前に現れた。  
いきなり爆発したトラック。燃え上がる炎に包まれ、なんだなんだと野次馬達が視線を向けている。

そんな中、一人の男がこっちを…儀國を見ていた。  
翡翠色の瞳、綺麗な黒髪を後ろに束ねた髪型、左首筋には水冠ウォータークラウンを思わせるデザインの刺青タトゥー。

口元を緩め笑みを浮かべているこの男を…儀國は彩月と呼んだ。  
つまり、この二人は知り合い。この彩月って男も、儀國と同じ世界の人間…。

「その様子だと、元気そうにやっているみたいだねえ。何年ぶりかな？　こうしてお前と話すのは。三年…いや四年？　もつと前かな？」

「ッ……」

儀國が身構える。先程から儀國の表情は強張っているし、冷や汗も

未だに流れ続けている。

彩月と呼び、親しく話しかけてくる男を…儀國は睨み付けていた。

あんな表情を浮かべた儀國を見るのは、初めてな気がする…。

あの彩月って奴に、儀國は焦っている…いや、恐れているって言う方が正しい。

「ああ、えつと…君は確か、シャーロット・E・イエーガー大尉…だったかな？」

オレの後輩が世話になっているようだね」

「あ、アンタは…？」

「ん？ああ、オレは彩月。儀國とは、まあちょっとした仕事上の…先輩後輩の関係ってところかな」

「せ、先輩…？ 仕事上？」

「彩月。あのトラック…お前がやったのか？」

不意に、儀國が尋ねた。

「ああ、そうだけど。あのトラックの運転手、子供にぶつかったのにも関わらず謝罪すらしようとしなかったからね…そのお仕置きでことで。」

それよりも儀國：オレはお前に用があつてきたんだよ」

「…いきなり現れたと思ったら俺に用がある？  
いったい何の用があるってい」

一瞬の出来事だった。

鈍く、重い、肉を弾く音が鳴った時、儀國は座っている席から4m弱まで吹っ飛んでいた。

彩月が儀國を蹴り飛ばした。

炎に包まれたトラックを見ていた野次馬達は、今度は儀國の方へと視線を向ける。

「ぐ……デメ」

口元から血を流しながら、儀國は体勢を立て直す。

しかし、体勢を立て直した時には既に…彩月は儀國の前に立っていた。

「は、速い！」

「遅い、遅すぎるなあ……。平和ボケで鍛錬を怠っていたのか？」

そして更に儀國を殴り飛ばした。  
肉を力強く弾く音が何度も鳴り響く。

あまりの速さにあたしは眼を疑った。  
信じられない、あの儀國が手も足も出ずにボコボコに……。一方的にやられている。

今の儀國は魔術が使えない。だけど、純粹な身体能力だけでも充分に凄い。  
人間同士の喧嘩なら、間違いなく儀國が勝つ。  
だけど、彩月はその儀國よりも上の身体能力を誇っていた。

居ないと思ったら既に彩月は儀國の前に立っている。あの彩月って男のスピードはそれを上回っている。

アイツも魔術師なのか！？

「ぐ……」

「お前、止め                  ツ！？」



止めに入ろうとした時、違和感があたしを襲った。

寒い…           それが違和感の正体だった。

真冬の様な寒さ。空は快晴…暑いぐらいの日差しが照つていと言  
うのに吐息は白く、肌寒く感じる。

野次馬達もこの違和感に気付いていて、寒さに身震いしている。

ふと、彩月の地面を見る。

彩月の足元の地面が氷に覆われている…凍結していた。

…やっぱり、あの彩月ってヤツは儀國と同じ、魔術師だ。

アイツが使う魔術は、多分氷。儀國の炎とは対照的に、あの彩月は  
氷の魔術を得意としている。

「ッ!?   彩月、お前ここで“アレ”を使つつもりじゃ

」

「使つつもりだよ」

彩月の周囲の空間から氷が発生する。一つや二つじゃない、沢山だ。  
それに発生した氷はどれも大きく、更に刃の様に鋭く尖っていた。

その氷が儀國に向けて一斉に放たれる。  
一直線に突き進む氷刃、儀國は両腕を交差し頭部や急所を護る。

魔術が使える儀國なら、  
CODE::SATAN「煉獄の赤」や蒼い炎…  
CODE::BLUE「終焉の蒼」なり  
使って防ぐだろう。

けれど、今の儀國にはそれが出来ない。そんな儀國に彩月が放った  
氷刃は容赦なく襲い掛かる。

切り裂かれる衣服、身体。至る所から血を流し、衣服は赤く染まる。

「テメエ……彩月イツ!!」

「吼えるだけじゃ何も出来ない。それは一番、お前が理解している  
ことじゃないのかな？」

第二陣の氷刃が彩月の周囲の中空に生成される。  
そして再び放たれ、

「や、やめろよ!」

る前に、あたしは儀國と彩月との間に割って入った。

「…邪魔しないでもらいたいなあ、イエーガー大尉？」

「お前、儀國の…先輩なんだろ！？　だつたら何で後輩に、儀國にこんな事を　」

「仕方ないよ、だつてそうなるようにしたのは全部儀國が原因だからね。

そうだろう？　儀國」

「え？」

「……………」

「…さてさて、イエーガー大尉はそろそろそこを退いてもらえないかな？

じゃないと君まで儀國と一緒に殺しちゃうことになるけど…。

君だつてまだ死にたくないでしょ？　だから早急に退いた方が賢い選択だ」

ゆつくりと、彩月の右手が翳される。私のシールドで彩月の氷刃から儀國を護れるかどうか…それは分からない。いや、高確率で防ぐことは無理だ。

儀國が焦る程だ、彩月は…儀國よりもきつと強い。

そんな相手の攻撃を、私のシールドで防げるかと聞かれたら…無理だつて私は即座に答える。

けど

「…お断りだね。アンタの言う事は、絶対に聞かない」

私は彩月のその要求を絶対に呑まない。

儀國を…殺させたりなんかさせない！

「ば、バカ！ テメエが敵う相手じゃない、さつさと逃げる！」

「だからって、見過ごせるわけないだろ！

それにお前、まだ魔術使えないんだろ！？」

「あゝそう言えば、確かあの日を境に世界魔術協会に行ったんだっけ？

でも魔術使えないんじゃ意味なしだね。

まあ仮に使えたとしても…オレの「絶対皇権<sup>EMPEROR</sup>の証」の力には敵わないと思うけど」

「え、エンペラーの力？」

「ん…これで仕舞い…と言いたところだけど、今日は止めておくでしょう。」

気が変わった。イエーガー大尉もいるし、それに…ここには大勢の人がいるしね…」

中空で展開されていた氷刃が消え、彩月は踵を返した。

「待て……ぐ」

崩れ落ちるように、儀國は片膝を地面に着く。

「止めといた方がいい、今日は見逃してあげるんだ…人の好意は素直に受け取るものだ。」

それに、そんな状態で挑んだところで…オレに勝てるとでも思っているのか？」

「あ、彩月……テメエ！」

「今日は勘弁しておいてあげるよ、でも忘れないことだ…オレは必ずお前を殺す。」

それまでに魔術が使える状態になっておくようにね。それと…情は一切捨てること。  
躊躇いや甘さは死に繋がる、お前のお師匠様の教え…忘れた訳じゃないでしょ？」

悪魔の様な笑みを浮かべる彩月。すると彩月の身体が氷の破片となつて消えていく。

「ま、待て彩」

「バカ！ やめろ儀國！」

追いかけようとする儀國を、あたしは止めた。

アイツが言うように、今の儀國じゃどう足掻いたって勝てない。

儀國と彩月、この二人にどんな過去があつたのか…それはあたしには分からない。

きつとあたしには理解出来ない、何か深い理由があるんだろう。

ただどあたしは止めた。今儀國が追いかけて、アイツに殺されるのなんて…あたしは見たくない。

儀國を止めて、気が付いた時には既に彩月の姿はなかった。

辺りを見回すけど、彩月の姿は何処にもない。完全にこの場から姿を消していた。

…一先ず、儀國が殺されずに済んだ。その事にとりあえず、安堵の溜息を漏らす。  
けど、問題が残っている…。

一部始終を見ていた野次馬達がヒソヒソと話し合っている。  
今の男は何者か、さっきのは魔法か…等。

そしてその視線はこっちにも向けられている。

「マズイな…どうす」

「…はい、今日の撮影はここまでです！  
皆様、撮影のご協力有難う御座いました！」

いきなり良い笑顔を浮かべて、儀國は野次馬達に頭を下げる。

「ぎ、儀國？ お前いったい何を」

「イエーガー大尉も本日はお忙しい中映画の撮影にご協力して頂き、

有難う御座います。

皆様、今回は映画にリアルを…より現実感を出す為とは言え、何もお知らせせず撮影を行ったことを深くお詫びいたします。

ですが、皆様のご協力もありいい映画が作れそうです。本当に有難う御座いました！」

儀國がそう言うのと、皆は映画の撮影かと納得し始める。

「おい、撤収撤収！」

儀國が建物に向かって叫ぶ。

そこに視線を向けるけど誰も居ない。けど儀國はまるで誰かに話しかけているように指示を出している。

「シャーリー…行くぞ」

「えっ？」

「皆様、今回の映画はあの「扶桑海の閃光」をも超える超大作となる予定です。完成した日には是非ご鑑賞下さい。ではっ！」

儀國に手を引かれるまま、私は走った。



人気のない場所まで走る。

儀國は辺りに誰もいない事を確認して、そして崩れるようにその場に片膝を着いた。

「儀國！」

「上手くいくかどうか自信なかったけど…なんとか上手く誤魔化せたな」

「ッ！ お前、まさか…」

「下手に言い訳とかするより、こう言った方が現実味があるだろ？ CGですとか何だと言ったら、大抵の漫画…：：：娯楽本じゃあ上手く誤魔化せるんだよ。」

「マジで成功するもんなんだな、コレ」

私は感心した。

あの状況の中での咄嗟の判断、現に一般人も皆納得している様子だった。

確かに、ああ言った方が変に誤解を生まない。

それに儀國の演技力もある。真実の口の時に見た演技力は酷かったけど、あの時の儀國の演技力は正にプロ並。

彩月の氷刃を受けて身体は傷付いているというにも関わらず、あくまで演出上の物だと思わせる程の自然とした態度。その演技力も合わさって、野次馬達は皆信じた。

やっぱり、儀國は凄い奴だ。改めてそう私は思った。

「か、考えたな…ってそれよりも大丈夫なのか!？」

「少し身体が痛いだけだ、後は問題はない。それよりも…シャーリ」

ポケットから何かを取り出し、それを私に手渡した。それはあのバイクのキーだった。

「今の俺じゃ満足に運転出来そうにないから、お前に運転頼んでいいか？」

事故でもしてシャーリーに怪我させたら俺が隊長殿に怒鳴られるかな…」

「儀國……………」

「どうした？やっぱり乗るのが怖いかな？」

「……………何言ってるんだ！　あたしに任せておけ！」

こんな形で念願の儀國のバイクに乗れるなんて思わなかった。  
儀國のバイクに乗れたのは嬉しい、けど…それよりも今は儀國の方が心配だ。

口では大丈夫だって言ってるけど、あれだけ渋っていたバイクの運転を私に頼むくらい、今の儀國は傷付いている。  
早く基地に帰って宮藤に治療してもらわないと。

「ああ、それと…」

「……？」

「…さっきは、悪い。引き止めてくれてな…」

「…いって別に。ところでさ、バイク……何処だっけ？」

「…あ、さっきの場所だ」

Act 16：かつての先輩「壱」（後書き）

Act 16「壱」でした。

あ：近日、重大じゃないけど軽少とも言い難いような…微妙なお知らせがあります。

まあまたお知らせするッス。

すわっ！

**A c t 1 6 : かつての先輩「弐」(前書き)**

A c t 1 6 「弐」です。

たつた今書き終わりました！

## Act 16：かつての先輩「武」

シャーリー      side

基地に急いで帰還する。

後に傷付いた儀國を乗せて基地まで走る。

儀國のバイクの操作性と速度はかなりのものだった。

もっと速度を出したいって欲も出てきた。

けど、あたしの後ろには彩月の攻撃を受けて傷付いた儀國が乗っている。

大丈夫だと本人は口にはしているものの、その表情からは明らかに大丈夫でないことがハッキリと分かる。

今でも苦しそくに表情を歪め、呼吸は乱れていた。

だから儀國に負担にならない様に、かつ急いで基地へと戻った。

そして今は、医務室で宮藤の治療を受けている。

エイラとサーニヤ、リーネとペリー又は心配だからと付き添って医務室にいる。

…基地へ帰って来た時、傷付いた儀國を見て皆驚いてた。  
特に中佐とエイラが酷く動揺していたと思う。

宮藤の治療が終わるまでのその間、あたしは街で起きた事を中佐達に話していた。

彩月と名乗ったあの男のこと、儀國とは何かの“仕事”の先輩であること、そして…儀國と同じ魔術師であり、氷を操るということ…。

街で起きたこと全てを皆に話した。

「儀國の先輩に当る者が…儀國の命を狙っているだど？」

少佐が眉を顰めて私が言ったことを聞き返してきた。  
その聞き返しにあたしは頷いてから答える。

「ああ、その理由は儀國にあるらしいんだけど…。詳しくは私も…」

「そうか、しかし…氷を操る魔術師とは…。その男、強いのか？」

「強いも何も…幾ら魔術が使えない状態だからって、あの儀國が  
手も足も出ない程だったんだ。メチャクチャ強いのは確かだよ」



そう言うと、少佐はそうか…、と静かに答えた。

「…騎士型ネウロイに続き、儀國の先輩と言ひ彩月と名乗る男…か。次々と問題が増えてくるばかりだな…」

バルクホルンが静かに口を開いた。

アイツの言う通り、あの騎士型ネウロイも彩月も儀國の命を狙っている。

騎士型ネウロイですら手一杯の所に、今度は儀國の先輩まで出てきた。

そして儀國が恐怖し、手も足も出ないぐらいの実力者。下手をすれば騎士型ネウロイよりも遥かに強い。

このままじゃ儀國はどちらかに殺されかねない。

それを防ぐにも、今のあたし達じゃこの二つの存在を斃すことはまず不可能。

儀國を護ることは勿論、援護することすら叶わない。かえって儀國の足手纏いになるだけ…。

と、同時にドアが開く。治療をしていた宮藤がそこに立っていた。

「儀國さんの治療終わりました」

「そうか、ご苦労だった宮藤。

それでは行こう。彩月という者の事については、儀國の口から聞かねば分らんからな」

皆頷いて儀國がいる医務室へと向かう。

儀國は…大丈夫なのか…？

医務室へ向かう。

一床のベッドの上、そこに儀國は座っていた。

彩月の雷撃を受けた傷は、宮藤の治療魔法によって綺麗に治癒されていた。

顔色もいいし、呼吸も乱れていない。元気そうにしている。

「もう大丈夫なのか？」

「ああ、宮藤のおかげでな。シャーリー、運転悪かったな」

少しすまなそうに儀國が言ってくる。

「気にしないでいいよ、あたしもバイクに乗れたから満足さ」

「そうか。まあ運転技術は問題なかったし…乗るのは許可してやるが！解体だけは絶対に許可しないからな？」

「分かってるよ」

本当に大丈夫そうだ。とりあえず安心した。けど、話はここからだ。

「儀國、シャーリーから色々と話は聞いている。その彩月という者は、いったい何者なのだ？」

少佐が儀國に尋ねる。儀國は面倒臭そうにベッドに横になり、そしてゆっくりと口を開いた。

「昔の…ちよつとした先輩だ。初めて10歳の時に逢って、二ヶ月ほど指導を受けていた感じた。性格は結構いい加減。食うこと寝ることが大好きで、飯はバカみたいに食う寝る時は半日以上どんな手を尽くしても起きないわ…そんなヤツ」

話を聞いている限りでは、あの彩月ってヤツは結構グータラな人間らしい。  
何処かハルトマンと似ている部分もある。

バルクホルンのヤツもあたしと同じ事を考えたのか… お前みたいだな、ってハルトマンに向かって言っていた。  
言われている本人は そうかなあ？、と…相変わらず呑気な態度でいる。

「けど…」

そこで、儀國の眼が変わる。

「それでもアイツは誰よりも強かった。それだけは間違いない」

「そ、そんなに強いんですか…？」

「…ああ。魔術が使えるようになったら少しは勝てる確率が上がるだろうけど…それでも半々ってところだな」

その言葉を聞いて、質問した宮藤は啞然とした表情を浮かべていた。宮藤だけじゃない、この場にいる誰もが同じ様にしている。

…あたしは信じられなかった。この基地の中で空を飛べないという事を抜けば最強の部類に入るあの儀國が、勝てるかどうか分からないと、そう言ったからだ。

「そんなに強いのかよ、あの彩月ってヤツ…。そこに氷の魔術も使うん」

「あれは魔術じゃない」

あたしが言い切る前に、儀國が割って入る。

「アイツの氷は魔術によるものじゃない。もっと別の力…言うなれば超常能力。」

アイツは魔術師じゃないからな…」

「そ、そうなのか？」

「ああ。」「絶対皇権<sup>EMPEROR</sup>の証」の力って言う名前は初めて聞いたが…あれは魔術じゃないのは確かだ…」

「…しかし、分からんな。何故かつての先輩が、お前を殺そうとしている？」

その事にはあたしも気になっていた。

彩月は殺される要因は全て儀國にある、そう言っていた。

…あたし達は儀國の過去をよく知らない。

いったい儀國と彩月との間に、何があったんだ？

儀國は少佐の問いに暫く考える様な仕草を見せた後、ゆっくりと口を開いた。

「……さあ。アイツ気紛れなところあったし…それなんじゃねえの？」

嘘だ…儀國は何が原因か分かっている。  
何となくだけど、今の儀國の雰囲気からは嘘を言っているとは思えない。

ただ、それをあたし達の前で言おうとしないだけ。  
あたし達に知られたくないから…儀國は嘘を言っている。

「おい儀國！ 何で嘘吐くんだよ！？  
どうしてか分かってるなら、あたし達に言っても  
」

「兎に角だ。何にせよ、降りかかる火の粉は徹底的に払わせてもら  
う。  
相手がかつての先輩だろうと誰だろう…教え通り沈めてやる、それ  
だけだ」

儀國はあたしの問いに答えようとしなかった。  
それを見ていた少佐は中佐と顔を見合わせた後、ゆっくりと口を開  
いた。

「……今日はゆっくりと休め。いいな？」

「あいよ、サンキューな。ああそれと…何があっても彩月に手を出  
すな。

あいつは…彩月は俺が相手をする。それだけは憶えておいてくれ」

「「「……………」」」

納得の行かないまま、あたし達は医務室を後にした。

医務室を出た後、少佐が中佐に話し掛ける。

「…どう思う？」

「ええ、儀國さんは何か隠しているわね…」

どうやら少佐達も儀國の嘘には気付いているようだ。

「やはり、そう思うか…。しかし、本人が語りたくないんだ。

儀國が話してくれるまで、無理に聞くのは止めておくでしょう…」

少佐の言う事も一理ある。

本人が言いたくないから嘘を言っているのに、無理矢理聞き出すのも気が引ける。

ここは、儀國があたし達に話してくれるまで…待ってよう。



夜、あたしは部屋で機械弄りをしていた。

「……………」

壁の服掛けに掛けた服を見る。その胸元には今日儀國に買ってもらったブローチが。

たまたま通ったアクセサリー店、そこであのブローチに目が留まった。

なんとなく、いいなあ…って思った。けどあたしには似合わないし。そう思った直後、儀國が店の中に入り店主と何やら話し合う。気になって店の中に入ると、そこでは安くしろと店主と交渉していた。

五分ぐらいの交渉の結果、店主が負けて半額の値段まで下げることになった。

儀國は勝利の不敵な笑みを、店主は敗北に涙目を浮かべていた…。

新たに知った儀國の一面、向こうの世界でも…こうして生きてきたんだなあと、ふと思ってしまった。

それよりも何をそこまでして安くしたのか…、すると儀國はあたしがいいなと思ったブローチを購入した。

そう、儀國はあたしがあのブローチに目が留まったのをしっかりと見ていた。

あたしの為に…儀國が　　。

機械弄りを止めて、ブローチを見つめる。

並行世界から来たって言う…魔術師の儀國。儀國は面白いヤツだ、少佐や中佐に対してもあの態度。

上官という立場なんか関係なく、呼び捨てなんかも当たり前。言ってしまうえば友達感覚で呼び合っている。

普通なら考えられない行動を、儀國という男は平気でする。

そんな儀國だけど、一度も誰からも咎められたことはない。あのカールスラントの堅物軍人であるバルクホルンですらも、儀國に対し何も言っていない。

だから私も気にしないで、普通に喋っている。

儀國とは…そう、友達みたいなものだ。何となく気は合うつし、今日

だつて結構楽しかった。

ただ、あの彩月って奴が来なかったら…よかつたんだけど。

「…まったく、全然集中出来ないコリヤ」

機械弄りを止めて、そのままベッドに寝転がる。

見慣れた天井を見つめ、私は儀國のことを考える。

彩月は儀國を殺そうとしている。けど、今の儀國は魔術が使えない状態。

今日は見逃してもらえた。けど、次に会う時までに儀國が魔術を使えないと…彩月に殺されてしまう。

もしそうなった時、あたし達が儀國を護らないといけない。

弱いのは承知の上、だけど儀國はこの隊の一員、あたし達の大切な仲間だ。

なら、仲間を護るのは当然のこと。

儀國からは手を出さなって言われたけど、その約束は護れそうにない。

「あたし達は仲間…だろ？ 儀國……」

天井を見つめながら、ポツリと呟いた。

「……………」

レザージャケットをクローゼットの中へと片付ける前、ポケットから一通の封筒を取り出す。

あの後、ハンガーに赴いた。ミーナの許可を得てハンガーにバイクを停めることになり、そして念の為にバイクの様子を見に行った。

特に変わったところなし、傷一つ付いていない。ホッと一安心し帰ろうとした際、バイクのパーツの隙間に一通の封筒が入っていることに気付いた。

バイクを停めている時に誰かが入れたのか…。  
それとも彩月か…。

そして今、封筒の中身を早速開けて中を確認する。  
封筒の中身は綺麗に折り畳まれた紙、それを取り出し中を開く。

「……ッ！これは」

Act 16：かつての先輩「弐」（後書き）

Act 16「弐」でした。

さてさて、ここから如何に第二キャラクターである彩月を絡ませるか…。

色々と妄想が浮んできて…こ、困ってしまいます（笑）。

ふ、ふふ、ふふふふふふ…。

そんなこんなで、失礼します。

すわっ！！

Act 17: 迷走「壱」(前書き)

Act 17「壱」です！

な、何とか間に合いました…！！  
出来立てホヤホヤですよ、ええ！

## Act 17：迷走「壱」

??? Side

真っ赤な炎が燃え上がっていた。

何処が見知らぬ森、空は曇りで雨が降っている。

ここは…何処なのだろう？

そう自問したと同時に、視界に映し出されている景色が変わっていく。まるで誰かの眼を通してその光景を見ている…そんな気分だった。

そして燃え盛る森の中を突き進んでいくと、そこには地獄絵図が広がっていた。

全焼し見る影もなくなった建物、今も尚炎が燃え上がっている家もある。

何処かの村…のようだった。

そして、辺りには無数の死骸が無造作に転がっていた。

胴体が切り離され内蔵を露出させている者、全身に扶桑刀が突き刺さっておりハリネズミのようになっていている者も…。



そして老若男女、年齢層問わず。中には本当に小さな子供の姿まであった。

更に奥からは断末魔のような叫び声が聞こえてくる。

助けて、痛い、死にたくない…そんな声が私の耳に響いてくる。

この地獄絵図の様な光景から眼を背けようにも、未だに聞こえてくる悲痛な叫び声を聞きたくないから耳を塞ごうとも…私の身体はまったく言う事を聞かなかった。

何故、私はこんな夢を見ているのか…。

今私が目になっている地獄絵図…森も村も、この酷い出来事も私は知らない。

と、またも景色が変わる。叫び声が聞こえてくる奥の方へと進んでいく。

嫌、行きたくない                   ！

そう強く願っても、私のその願いは届かず。  
強制的に身体が奥の方へと進んでいく…。

奥へと進む、そこには一人の少年がいた。

齢5歳程度の、本当に小さな男の子だ。その男の子の手には、その小柄な体格には似付かない一本の扶桑刀が握り締められている。

その刀身は赤く染まっていた。よく見ると、少年の身体も赤く染まっている。

その赤い液体が何を意味しているのか、即座に理解できた。

けど、とても五歳の子供がするような眼ではなかった。冷たく激しい、慈悲すらも感じさせない冷酷な死神の眼…そんな眼をしている。

そしてその少年の周りには数多の死体が転がっている。死体は皆銃を手にし、死んでいる。誰がやったのか、どうやって殺されたのかは…一見にて理解させられる。

この少年は何者なのか…五歳程度の幼いこの男の子が、視界一杯に広がる地獄絵図のような光景を、本当に生み出したのか…。

そう思ったと同時に、私の意識は急速に薄れていった。

「…………ハッ！！」

ふと眼を覚まし、掛けていた布団を勢いよく捲りながら上半身を起こす。

「…………夢？」

視界に入った景色は炎が燃え盛る森でも村でもない、いつもの見慣れた部屋。

少しして、自分の部屋なのだと理解する。

今の夢はいつたい何だったのか、どうしてあんな残酷な夢を見てしまったのか…。

ここ最近立て続けに色んなことが起こり過ぎた、それらに対するストレスが原因なのかもしれない…。

私は小さく息を吐いて、もう一度身体を横たわらせる。

朝までまだ時間はある、それまでにしっかりと睡眠を取っておこう…。

目の前では、激戦が繰り広げられている。

「くっ…!!」

「……………ッ!!」

いつもの様に坂本さんと儀國さんが試合をする。  
儀國さんの魔力回路はまだ治っていない。ある程度は治って、後ちよつとで完全に修復されるって、儀國さんは言ってた。

だから今日も魔力回路が修復されるまで、儀國さんは扶桑刀を手  
坂本さんと試合をしている。

けど、今日はいつもの試合風景と違っていた。

「ッ!!」

坂本さんが大きく飛び退く。そして上空、ストライカーユニットを装着し、訓練用の機銃を手にしたシャーリーさんとルツキーニちゃん  
儀國さんに向けてトリガーを引く。

「げっ!マジかよ!?!」

「雅史すっごくいい!!」

シャーリーさんとルッキーニちゃんの機銃から放たれたペイント弾を、儀國さんは信じられないスピードでみんな正確に斬った。

銃弾を見切れることは…私も出来る。

ネウロイのビーム攻撃だってちゃんと避けられるし、銃弾も同じ様に避けられる…等。

儀國さんは避けずに、全部斬っていた。扶桑刀を振るそのスピードは、正に高速…或いはそれ以上。兎に角、物凄く速い。

「くっ！生意気な!!」

儀國さんの後方からペリーヌさんがペイント弾を撃つ。だけど儀國さんはまるで分かっていたかのように振り向きながら扶桑刀を払って、ペイント弾を全て斬って落とした。

今日の試合は一对四形式、儀國さんが坂本さん、ペリーヌさん、シャーリーさん、ルッキーニちゃん一度に相手にしている。

坂本さんは扶桑刀、後の三人はストライカーユニットと訓練用の銃

を装備している。

勝敗条件は坂本さんの扶桑刀が離れること、儀國さんはペイント弾が一発でも当たるか逆に扶桑刀が手から離れるか。

三人は坂本さんの援護射撃を行う、という内容だった。

今日は一對四で試合をしようと、いきなり儀國さんが言い出した。

坂本さんだけじゃつまらなくなってきた、俺に勝てばその場で絶対に知りたいことを教える。そう儀國さんが言つて、ペリー又さん達が参加して、今に至る。

そして儀國さんはあの凄い居合いは使わないで、完全に鞘から扶桑刀を出した状態で模擬戦を行っている。

「儀國のヤツ、今日はあんまり攻めないな」

エイラさんがポツリと言った。

言われてみればそうだ、さっきから儀國さんは殆ど攻撃していない。主に防戦態勢で闘っている。

たまに攻撃態勢に移ってるけど、殆どが防御行動。坂本さんの扶桑刀を受け流したり、シャーリーさん達が放ったペイント弾を斬って落としている。

「凄い…まるでエイラさんの固有魔法を使ってるみたい」

「あれも魔術の類か？いやしかし、儀國はまだ魔術使えなかった筈…」

リーネちゃんの言葉に、バルクホルンさんが言葉を繋げる。

今、儀國さんは目隠しをした状態で試合をしている。

流石に皆無茶だと、ペリーヌさんは遊びじゃないって怒ってた。

けど、儀國さんは何も見えない状態なのにヒラリ、ヒラリと全て避けている。

後ろを捉えられて射撃されたのにも関わらず、まるで予めそう来る事が分かっているかの様に…振り向かなくても完璧にペイント弾に斬っていた。

それは正にリーネちゃんが言う通り、エイラさんの固有魔法…未来予知を使っているみたい。

「くっ…！」

「どうした？もう終わりか？まだ俺は一発も当たってないぞ？」

坂本さんは全く儀國さんに歯が立たない状態だった。

一度も儀國さんに当てられないまま、時間だけがただ過ぎ去っていく。

「ふわぁ……凄い」

私は思わず呟いていた。

儀國さんはとても強い、それはこの基地にいる皆知っている。

そして剣術の腕前も。坂本さんが今まで試合を挑んでも一度も勝てなかったことも、皆分かっている。

だけど、扶桑刀を手にした儀國さんは何処か違っていた。

「ソードサマナー剣極の調」で作った剣を振るっている儀國さんと、扶桑刀を振るっている儀國さんの動きが全く違う。

扶桑刀を振るっている方がスピードも速いし、パワーもある。



それに…

「…なんだか、お兄ちゃん怖い…」

横で見ていたサーニヤちゃんが不安そうに言った。

そう、儀國さんがとても怖いって感じる。まるでネウロイと闘っている様な感覚…今の儀國さんを見ると、そんな風に感じてしまう。

目隠しをして、扶桑刀を構えた瞬間から…儀國さんの雰囲気が変わった。

今の儀國さんからは、あの優しい雰囲気は放たれていない。

恐怖…その雰囲気だけがただ放たれていた。

「……………」

ミナ中佐は、ただジッと試合を見ていた。でもよく見ると、試合を見ていると言うよりは儀國さんを見ていた気がする。

真剣な表情で、一言も喋らずに…ただジッと扶桑刀を振るって闘う儀國さんを見ていた。

「ふっ！！」

儀國さんが扶桑刀を振るう。大きな金属音が響き渡ったと同時に、坂本さん扶桑刀が手から大きく弾かれた。

「はい終了つと。なかなか楽しめたぞ」

不適な笑みを浮かべて、儀國さんは扶桑刀を腰の鞘に収める。僅かに遅れて、坂本さんの扶桑刀が砂浜に突き刺さった。

そして恐怖一色だった雰囲気、いつもの優しい雰囲気に戻った。目隠しの布を取って、あの優しい眼が私達の前に曝け出される。

それを見ていたサーニヤちゃんも安心して、嬉しそうに笑みを浮かべていた。

「ぐっ…四人掛かりでも勝てないとは…」

「魔術を一切使っていないのに…なんでそんなに速く動けるんだ？」

「基本鍛え方が違うからな…まあ仕方ないって。」

修行の賜物ってやつ、そりやもう…デスクイーン島ばりにヤバイ修行をしてたからな…。

何かもう…うわっ、うわあああ！…って感じだな」

落ち込む坂本さんを儀國さんは慰めて、シャーリーさんには質問に答える。

デスクイーン島って…聞いたことのない島の名前。でも名前からして、とても怖そうな所だって想像出来た。

「ねえねえ！目隠ししてるのに何で見えるの！？」

「見えるんじゃないくて、感じるんだよ。相手の殺気や敵意、空気の流れから色々と。

兎に角これも、修行の賜物だな」

儀國さんの答えに、ルッキーニちゃんは凄いとはいでいる。修行するだけで、そんな事も出来るんだ…私も頑張れば出来るのかな…？

「申し訳ありません坂本少佐！ 私が不甲斐ないばかりに…」

「ああ、本当にそうだなツンツン眼鏡」

「キイイイイイツー！！！」

ペリー又さんを挑発して楽しんでいる儀國さん、挑発されたペリー又さんはいつもの様に怒っている。それを見て更に楽しんでいるみたいだった。

そんな様子に私達も笑う。

やっぱり、私は優しい雰囲気放っている儀國さんが大好き。

何で扶桑刀を持っている時、あんなに怖く感じたのか：分からないけど。

でも、やっぱり儀國さんは儀國さんだ。

「……………」

そしてミーナ中佐は、何か言いたそうな顔で儀國さんをジッと見つめていた。

## A c t 1 7 : 迷走「壺」(後書き)

A c t 1 7 「壺」でした。

いやいや、何とか今日中に投稿することが出来てよかったです…。

実は…仕事関係で少し東京の方へ行くことになりました。

従って、次回の更新は再来週…2月 2～3日ぐらいになると思います。

楽しみにして下さっている…かどうかは、云々は置いておいて読者の皆様には本当に申し訳ありませんが、ご了承下さい。

すわっ!!

Act17：迷走「弐」（前書き）

Act17「弐」です！

急いで仕上げて投稿しました！

## Act 17：迷走「弐」

その日の夜、九時過ぎ

皆眠っている、静寂が支配する夜。

今日はサーニヤは夜間哨戒が無い日だ。だから今頃は自室…或いは  
エイラのベッドでグッスリと眠っている頃だろう。

「そろそろ行くか…」

私服に着替えて、扶桑刀を手に部屋を出る。

今日はお気に入りの白いレザージャケットを羽織って、だ。

…確かめなければならぬことがある。

真実か偽りか…、この目で確かめなければならぬ。

向う先はハンガー。そこに置いてある俺のバイクに用がある。

静かに、そつと部屋を出てハンガーへと足を運んだ。

昼間は多くの整備兵で賑わう声が溢れているこのハンガーも、夜になればガランとし物寂しいハンガーへと姿を変える。

今日の夜勤者は…いない。

よく見ると一人は完全に熟睡していた。もう一人は…恐らくトイレか何かだろう。

その方が好都合だ。ハンガーから愛車のバイクを外へと運び、ローマへと続く出入り口まで押していく。

皆とうに眠っているし、何よりコイツのエンジン音は結構煩い。流石にここでは皆の安眠妨害になる。

だから音が響かない所まで押していく必要があった。

「さてと…もういいかな？」

基地裏側通路、そこでキーを廻しエンジンを掛ける。流石にここならば安眠妨害にはならないだろう。



アクセルに手を掛け、そして回そうと

「こんな時間に、何処に行くのかしら？儀國さん」

「のおおっ！？ミ、ミーナ…！？」

後ろを振り向く。そこにはミーナが立っていた。

ブラックスマイルを浮かべている、お怒りモードのようだ。

「わ…悪い、安眠妨害でもしたか？」

「いいえ、偶然貴方がハンガーから出て行くのを見たの。  
それで、私服を着て何処に出掛けるつもり？」

「ちょっと街まで夜のドライブ、たまにはいいかなってな」

「そう…」

ミーナは相変わらずブラックスマイルを浮かべたまま。  
あの顔は…絶対に信用してない。嘘だって確実にバレてるな…。

「それで、本当の目的は？」

「だ、だから夜のドライブって言ってるだろ？」

「正直に言いなさい？ 儀國 雅史さん？」

ヤバイ…ブラックスマイル通り越して、本気の怒りモードに突入し掛かっている。

本気で怒った時のミーナはマジで怖い。

どうしようか、正直に言った方が身の為か？

そう考えている時だ、ミーナが何故かバイクの後ろに乗り始めた。

「ちよつ、おま…何勝手に乗ってたんだ！ 降り」

「私も一緒に行くわ」

「えっ!？」

「ドライブなんでしょ？ だったら私も一緒に同行させてもらおうと思ったの。」

「今日もなかなか眠れないのよ」

「そ、そう言う時は豚か蛙を数えながら根性出して寝るんだよ！  
いいからさっさと寝て来い！ 明日に響くぞ！」

「…そこは普通羊じゃないのかしら？」

ミーナと一緒に連れて行くわけにはいかない。

ここから先、危険が伴うのかもしれない。そんな中を、ミーナと一緒に連れていけない。

自分ひとりならばまだしも、ミーナも一緒となるとかなり辛い。  
今の俺は魔術が使えない、そんな中ミーナも一緒に連れている時に  
敵の襲撃にでもあつたら…。

何とかミーナをバイクから降ろさなければ…！

「さっさと降りろよ！ このババ」

「ババ……何かしら？」

「…馬鹿野郎」

危なかった…。

危うくババアと言いつうになつてしまった。

…巷では年増、ババア扱いされているミーナ。19歳なのにババア呼ばわり、だからそれに便乗しつつ口走りそうになつた。

口走る前に留まれたことに、思わず安堵の息が漏れる。

ミーナの背後、某マンガの様に「ゴゴゴ…」、という効果音が何故か見える。

それぐらい、今のミーナはブラックスミイルを浮かべている。

もしあそこで言い切っていたら…そう考えると心底恐ろしい。

しかし、ミーナは一向に降りる様子を見せない。

もう一緒に行く気充分、降りて欲しければ正直に自白しろと眼が物語っている。

どうしたものか…、そうこうしている内にポケットに入れていた封筒が地面に落ちた。

しかも最悪なことに、ミーナの目の前に落ちた。

「この封筒は？」

「あ、それは…！」

慌てて拾おうとするよりも速く、ミーナが封筒を拾い中身を見始めた。

プライバシーもへったくれも無い、落とし主が目の前にいると言うのに無許可で封筒の中を開けて、中身を取り出した。

「あ………」

「ッ……これは………」

ミーナが手紙を読んで、驚愕の表情を浮かべた。そして直ぐに手紙からこっちに顔を向ける。その顔はブラックスマイルではなく、完全に怒りモードだった。

「儀國さん……どういうことかしら？」

「……………」

「この手紙……いつ貰ったの？」

バレてしまった以上、正直に話すしかない。

もうミーナは完全にお怒りモードだ、言い訳しても無意味に終わる。

「前にシャーリーと出掛けた日だ。基地に帰って、バイクに傷付いてないかハンガー見に行った時に、なんかあった…」

「どうして黙っていたの!？」

「……兎に角、このことは黙っててくれ。他のヤツ等にもだ。それから、これは俺一人に行かせてほしい」

手紙の内容、それは“騎士型ネウロイについて教えよう、但し一人で来い”…と、その一文と日時と落ち合う場所が書かれてあった。

彩月のものじゃない、それは断言出来る。

この手紙に書かれている字は、彩月の字じゃない。だから差出人は別の人物。

何者か分らないが、あの騎士型ネウロイについて知っている。それに：“異世界の魔術師へ”、と書かれてあるから相手は俺の事も知っている。

敵か味方が分からないが…敵として見た方がいいだろう。物事は全て疑って掛かれ、不明な者なら尚更疑え、それがお師匠様の教えの一つ。

それに、この手紙の内容が真実とも限らない。或いは罠かもしれ無い。

そんな中を、ミーナと一緒に連れて巻き込ませたくない。

今の俺はまだ魔術が使えない、しかし俺一人ならば何とかなる。危機的状況に陥っても一人の方が活路を見出しやすいし、行動しやすい。

「…駄目です、行くのなら私も一緒に同行します。これは命令です」

「ミーナ……悪い!!」

ミーナを置いてバイクを走らせる。

幸い、手紙を取る時にミーナはバイクから降りている。その隙に一気にアクセルを回した。

「あ、儀國さん！ 待ちな

」

後ろで何か言っているが気にしない。一気にローマの街を目指して愛車を走らせた。

夜のローマの街を走る。目的地である、真実の口へ…。

「ここか…」

真実の口のまえでバイクを停車。約束の時間まで後一分。

周りに誰かの気配は感じられない。この場にいるのは今現在は自分ただ一人。

少しずつ、時が迫っていく。そしてついに、約束の時間が訪れた。

五分経過

「誰も来ねえし…」



約束の時間が経過しても、誰も来る気配なし。

あれから更に五分待ってみたが、それでも手紙の送り主が現れることはなかった。

「んだよ…ガセか！？けど、相手は俺の事知ってるみたいだしなあ…」

何はともあれ、すっぱかされたのならここにいる必要は無い。

それよりも心配すべきは明日だ。  
仮にもミーナの命令を無視してしまった。明日隊長室に呼び出されて、坂本の二人でシメられるかもしれない…。

基地へと向けてバイクを走らせる

「ん？」

真実の口から何か物音が聞こえた。

見ると、口から何かが出ている。近寄って見るとそれは一通の封筒だった。

封筒には“異世界の魔術師へ”、と書かれてある。  
早速封筒を手に取り、中身を確認する。と、中から出てきたのは一通の手紙と黒い汚れの付いたネックレスだった。

「このネックレス…」

十字架の形をしたネックレス、黒い汚れ…これは恐らく、血だ。いったい誰の物なのか…。血で汚れたネックレスを見つめると、その時だった。

「なっ…!!」

頭の中に何かが流れ込んできた。

何処かの研究所、そこに白衣を着た数人の男達と、一人の女性。姿からして博士、または研究者と見受けられる。

そして部屋の奥、寝台の上に眠っている二人の少女。眠っている…  
と言うよりも、まるでそれは死んでいる様に見えた。

一人の男性の研究者が、男達の中で唯一女性の研究者に話し掛けて

いる。

内容までは聞こえない、何かを喋っているが…肝心の声が聞こえない。

まるで台詞が入っていないアニメを見ているような気分だった。

男性研究者と女性研究者は激しく言い争っている、そんな風に見取れた。

と、その女性研究者が懐から一丁の拳銃を取り出す。その銃口が向けられている先は…男性研究者の心臓。

驚愕の表情を浮かべる男性研究者、そして女性研究者は涙を流し何かを叫びながら…手にした拳銃のトリガーを静かに引いた。

一発の銃声が鳴り響き、血が吹き出る。

心臓を貫いた銃弾はそのまま壁に着弾、そして貫かれた男性研究者は血を流しながら、ゆっくりとその場に崩れ落ちた…。

「……はっ!」

ふと、我に返る。

「今のは…このネックレスの残留思念が見せたのか?」

手にしていたネックレスをもう一度見る。

凶弾によって倒れた男性研究者、その首元にはこのネックレスが映し出されていた。

ではやはり、このネックレスはあの男性研究者の？

しかし分からない、何故このネックレスが自分宛にと封筒の中に入っているのか。

差出人はいつたい、俺に何を求めている…？ 何を望んでいる…？

「…とりあえず、帰るか」

時間はとつくに10時を回り、11時になろうとしていた。

そろそろ寝ないと身体がヤバイ。手紙は明日読むことにしよう…。

ネックレスを封筒の中へ。そしてバイクを基地へと向けて走らせた。

## A c t 1 7 : 迷走「弐」(後書き)

A c t 1 7 「弐」でした！

今週最後の投稿となります、次話は2月初旬辺りに：東京から戻り次第投稿したいと思います。

修正等も、2月初旬：帰ってきてから行おうと思いますので、どうかご了承下さい。

それでは皆様、2月初旬にまたお逢いしましょう！

その時はまた、夢幻遊戯をよろしく願います！！

すわっ！！

A c t 1 8 : すれ違い「壺」(前書き)

一週間ぶり(?)の更新、A c t 1 8 「壺」です。  
タイトルは…半分適当です。

Act 18: すれ違い「壱」

??? Side

またあの夢を見た。

降り頻る雨、炎が燃え上がっている森と村。  
無造作に転がっている沢山の死骸。その先…血に染まり扶桑刀を握り締めた、死神の眼を宿した小さな男の子。

地獄絵図が広がる、眼を背けたくなるこの光景。  
でも、今日も私の足掻きは虚しく終わる。

強制的に見せられるこの地獄、早く目が覚めてほしい…。ただそれだけを強く願った。

けど、今日は夢に少し変化が起きた。

『おやおや、まさか…こんなチビガキがコイツ等を殺ったなんてなあ…』

何処からか、女性の声が聞こえた。

それと同時に視線が勝手に声が聞こえた方へと向けられる。

森の中、そこから姿を見せた一人の女性。

外観年齢は凡そ30代、腰には普通の扶桑刀より少し長め。スーツの上に扶桑の服装の一つである着物を羽織っている、独特な資格好をしていた。

女性は栗色の長髪を靡かせながら、男の子を見据える。

その顔は不敵。人を見下し、まるで見定めているかのような眼を向けている。

と、男の子は死神の眼を女性に向け、血に染まった扶桑刀を構える。

『おっ、いつちょ前にやるってか？面白い、お前の命私が貰ってやる…全力で掛かってきな！！ガキンチョ！！』

腰に差した扶桑刀を鞘から払う。それと同時に、男の子は女性に飛び掛った。

そこで眼が覚める。

眼を開けば見慣れた天井が視界に映し出される。



「また…あの夢」

ゆっくりと身体を起こし、窓へと寄る。

空はまだ暗い、アドリア海の上には綺麗な星空が広がっている。

…また、あの不思議な夢を見た。

あの地獄のような、惨劇が広がっていた光景。何故あの様な夢を見るのか…全く検討が付かない。

それに、今日は夢に変化があった。

森の中から現れた一人の女性、そして男の子と女性が扶桑刀を以って闘おうとし…そこで夢から目が覚めた。

「あの男の子…」

ふと…あの男の子について考える。

夢で見たあの男の子…正確にはあの死神の眼、に私は見覚えがある。それはそう遠い昔のことではない。

あの眼を、私はこの基地で見ている。

扶桑刀を携え神速を繰り出す…あの時の彼の眼。

一瞬にだけ、その時に見せる彼の眼と、私が夢で見た男の子の眼と

似ている…。

いや、全く同じだった。

何故彼があの子と同じ、死神の眼をしていたのか…。

或いは、あの夢に見た男の子が彼そのもの… 幼少期の姿なのか。

……聞いてみよう、彼に。

どの道、今日は彼に聞かなければならないことがある。その時に一緒に聞けばいい。

そう結論を出し、私は再びベッドへと身体を横たわらせた。

今日の検査結果

身体機能：異常なし、性能83%

魔力回路：91%修復完了、修復作業終了まで約一時間。

「後一時間…か」

一息吐き、ベッドから腰を上げる。  
ようやくここまで魔力回路が回復してくれた。後一時間で魔力回路の修復作業が終わる。

長かった…。「終焉の蒼」CODE…BLUEを使ってから、どれだけの時間が経っただろう。

後一時間で魔力回路が修復され、魔術が使えるようになる。

魔術さえ使えれば此方のもの、あの騎士型ネウロイが現れたとしても満足に闘える…筈だ。

「さてと、後の問題は……」

机に置いた、一通の封筒に眼を向ける。

昨晚、ローマの真実の口にか入れられていた代物。

宛先は今回も異世界の魔術師へ…、即ち自分だ。送り主は以前と不明。

問題はその手紙の内容。騎士型ネウロイの詳細については何も書かれていない、ただ目的と俺に対する行動についてだけ、そこに記されていた。

「……………」

…一つ、考えがあった。

それはあの騎士型ネウロイを斃す為でもあり、ウィッチ達を…この基地にいる全員を護る為でもある。

こうさえすれば、全員に危険が及ばない上に被害も最小限に抑えられる。

あの手紙にも書かれてあった通り、こうした方がいいと…自分の中では思っている。

それに、彩月の件もある。あの男がこの世界に何故いるのか、それはまだ分からない。

だが、自分がこの場にいることでミーナ達にも被害が及ぶ。

あの男は対象者に対しては無慈悲を以って殲滅する。その反面、誰よりも命を大切にしていた。

そんな男が、ミーナ達に危害を加えるとは思えないが…。

兎に角、実行に移すならば早めの方がいい。

時間が長引けば長引くだけ皆を危険な目に合わせる。

一応、その考えを実行する為の用意だけは昨晚の内にした。  
軍というシステムがよく分からないが、とりあえず自分が知る方法でやってみる。

徹夜で仕上げたが故に内容はメチャクチャだが…形としては出来ているから問題ない。  
あくまで、多分だが…。

「さてと、飯でも食いに行くか…」

これが、最後の飯になるのか…。  
そんな事をふと思いながら、安藤たちがいる食堂へと足を運んだ。

朝食後、いつもの様に坂本と砂浜にて試合を行う。  
これも今日で最後となる…だから今日は特別に試合ではなく、一つ手解きをしてやることにした。

すると意外そうな顔を浮かべていた。  
急にどうした？ 熱でもあるんじゃないか？…っと、坂本に凄く心配された。

それぐらい坂本にしてみれば意外だったそうだ。

まあ以前までずっと頑なに教えることを拒否していたから、仕方ないと言えば仕方ない。

「で、何を教えてくれるんだ？」

眼を輝かせながら坂本が尋ねて来る。

まるで新しい玩具を買ってもらった子供みたいな目だ。

そんなに嬉しいのかと問いたくなったが、しないでおいた。何か可愛かったし。

「教えるのはあの居合いのネタ晴らし……とでも言おうかな」

「ネタ晴らし？やはり魔術を使役しているのか？」

「いや、魔術を使っていないのは事実。問題はどっやって人の身だけで行えるかについてだが」

「失礼します！坂本少佐」

と、そこに安藤が現れる。

「どうかしたのか？」

「はっ！ミーナ中佐が儀國に用があるので至急来るようにと」

「…そうか。有難う、直ぐに行く」

「ああ、早く行けよ儀國。何だか知らないが、今日の中佐…凄く機嫌が悪そうだったぞ」

「ああ、やっぱりか…」

昨晚のこと、やはり怒っているらしい。  
まあ平謝りすれば何とかなるだろう。

ご苦労と坂本がいい、それに対し安藤は敬礼を返してハンガーの方へと向って走っていった。

「悪い坂本、ちよっくら行ってくるわ」

「分かった、では後で頼むぞ」

「ああ

ああ、その前に坂本」

不機嫌なミーナが待っている隊長室へと向う前、坂本に向けて口を開いた。

坂本     s i d e

今日大変珍しいことが起きた。

あの儀國が…面倒臭がり屋の儀國が、私に技を教えてくれるというではないか。

その言葉を聞いて、私は啞然としてしまった。  
あの儀國が特別に教えてやると言ったからだ。思わず熱でもあるのでは、と心配してしまっただが、本人は至って普通だと答えている。

儀國の言う通り。風邪を引いている様子もなければ、以前のようにふざけた態度も嘘を言っている様子は見られない。  
本気で…私に技を教えてくれようとしている。

何故、急にそんな事を言い出したのかは分からない。  
だが、儀國から初めて技を教えてもらえる。その事が私はとても嬉



しかった。

そして教えてもらえる技はあの居合いのネタ晴らし、らしい。どうやって魔術の行使もなしに人の身のみで出来るのか、それを教えてくれるそうだ。

抜いた瞬間さえも見えない、正に神速によって繰り出される儀國の居合い。

あの技を習得できれば、今後ネウロイと戦う時に大いに役に立つ。岩すらも真つ二つに切り裂く程の威力を持つと言う宮藤の証言もある、絶対に習得しなければ…。

と、そこに整備兵がやってきた。

ミーナが儀國を呼んでいるとのこと。ミーナから呼ばれているのなら仕方が無い、訓練よりもそちらを優先しなければならない。

そして儀國がミーナの待つ執務室へ行こうとして

「ああ、その前に坂本」

不意に、私に声を掛けた。

「どうした？」

「…これを教えるのは一回きり、そしてその後はお前次第。恐怖に挑むも挑まないのも、全て…。それだけは忘れるな」

「う、うむ…」

それだけ言うと、儀國は走って砂浜を後にした。

「儀國……」

あの時の儀國の眼、とても真剣な眼をしていた。と、同時に寂しさを感じた。

何故あの様な眼をしたのか…全く分からない。ただこの時、私は胸騒ぎがしていた。そう、まるで儀國が遠くに行ってしまうそうな…そんな感じがした。

儀國はこの基地に、この部隊に必要な人間だ。それは戦力的な意味でもあり、人間的な意味でもある。儀國 雅史  
と言う男は…欠かしてはならない。

「お前は…何処にも行かんだろう？儀國…」

既に立ち去った儀國に向けて、私はポツリと呟く様に尋ねた。

## Act18：すれ違い「壱」（後書き）

Act18「壱」でした。

さて、今週から一週間に一話の更新とさせていただきます。  
詳しくは活動報告の方をご覧ください。

さてさて、忙しくなるぞー！！

すわっ！！

Act 18: すれ違い「弐」(前書き)

Act 18 「弐」です。

なんか微妙に長い…です？

## Act 18: すれ違い「弐」

ミーナからの伝令を伝えにきた安藤。

来たか…、ポケットに入れたアレを取り出しながら執務室へと急いで向う。

「ウィース」

一応ノックをして、執務室のドアを開ける。

「来てくれたわね」

机に座ったミーナが出迎えてくれる。

…今のところ、ブラックスマイルも浮かべてない。いつもの優しい笑みを浮かべている。

本当に不機嫌なのか…それとも隠しているのか。

とりあえず、今は安心していいだろう。問題はこれからミーナがどうなるか、だ…。

「そりゃ勿論、中佐からの命令ですから…で？何の用？」

「貴方に確認したいことがあるの」

「確認したいこと？」

「まず一つ目、魔力回路の具合は？」

「それなら後一時間程度で治る筈だ」

ここは正直に答える。別に隠しても嘘を吐いても何のメリットもない。

そう答えると、ミーナは安堵の笑みを浮かべた。

「そう、よかったわ…。そして二つ目、昨晚…あれから何があったのかしら？」

ここでブラックスマイルを浮かべてくる。さつさと答えるよと、ブラックスマイルが返答を急がしてくる。

正直言つて、このブラックスマイルだけは何時まで経っても慣れそうにない。

いや、きつと永遠に慣れはしないだろう…。

「……………これが真実の口の中に入ってたただけだ」

昨晚真実の口についての間に入れられていた一通の封筒。  
それを机の上に置く。

隠していても仕方が無い、どの道提示しなければこれから起こす行動について納得してもらえない。

封筒を机の上に置くと、ミーナは無言でそれを手に取り封を開ける。

「こ、これは……ッ!？」

手紙を取り出し、眼を通した途端ミーナは驚愕の表情を浮かべた。  
そこに続けてアレを机の上に置く。

「つーわけでだ、ハイこれ」

「これは……？」

「辞表」

会社を辞める時でも何にしても、辞表を書かなければならない。

映画やドラマでしか見たことがないからよく分からなかったが、と



りあえず辞めさせてもらうつという内容の手紙と一緒に封筒をミーナに渡した。

「今日付けで、俺はこの基地を…以前に軍そのものを抜けさせてもらうつ」

「えっ!？」

「言葉通りの意味だ。俺は、今日でここを抜ける」

「な、何を言っているの!? 抜けるって…」

「その手紙に書かれてあることは…まあ本当なんだろうな。現に、坂本達が交戦したあの騎士型ネウロイも、俺の名前を出したら反応したんだろ?」

騎士型ネウロイの目的、それは俺の命を狙っているということ。手紙に書かれてあることは、恐らくは真実。以前の坂本達の話を読まし合わせれば、尚更真実味が増す。

詳しくは記されていない、だが…理由さえ分かればそれで充分。だからこそ考えた、ここを抜けることを。

自分がこの基地からいなくなること、周囲に被害が及ぶ心配はない。

あの騎士型ネウロイ達の相手は…自分一人ですればいいことだ。

狙われているのは俺自身なのだから、俺が相手をするというのが道理。

「と、言うわけだ。納得してくれ」

「こ、こんな事認められる筈がないでしょ！  
何故貴方が一人犠牲になる必要があるの!？」

ミーナは認めようとしない。

まあ、これも想定の範囲内のこと。

「簡単な話だ。あいつ等は、俺一人で殺る」

「ダメです！ 幾ら貴方が強くても…あの騎士型ネウロイは二機もいるのよ!？」

それを…貴方は一人で闘うつもり!？」

「ミーナ…てめっ、いい加減にしろよッ!！」

「ッ…！」

ここからだ。ここからがミーナを認めさせる為に一芝居しなければならぬ。

例えば相手が傷付こうとも、嫌われようとも…全てはここにいる全員を護る為に…。

「アイツ等の狙いは俺、どんな理由でかは知らねえけどな。だからこそ、俺がこの基地を離れた方がいいんだろ！」

「儀國さん…！」

「俺がここにいることでお前等に被害が及ぶ。だからこそ、俺が離れることでその危険性を回避出来るんだぞ！？なんでそれが分からねえんだよ、このバカ！」

よくよく考えれば、我ながら恐ろしいことをしているものだ。

周りに人がいたら…確実に俺は軍法会議に掛けられるだろう。仮にも上官に対し怒鳴り、拳句バカと言っている。

処刑されても可笑しくないこの行動。

けれども、これもミーナ達のことを思ってたことだ。今は…心を鬼にしよう。

「十の内、一である俺が抜ければ九のお前達が無事でいられるんだ。余計な被害が出なくなるんだぞ。隊長なら、それぐらい理解しろ！」

「だ、だからと言って！貴方一人が全て背負う必要は、何処にも

」

「まだ分からねえかよ、ミーナ……お前等じゃアイツを斃せねえんだよ！」

「ッ！！」

ここぞと事実を、現実をミーナに突き付ける。

ミーナ達では、あの騎士型ネウロイを斃す事は絶対に出来ない。理由も勿論ある。

「坂本達が闘った時、相手が一機に対して六人で何とかの状態だったんだぞ！？

現に坂本のヤツも言っていただろ！？

そんなヤツが後一機いる、いや…もつといるかもしれない。

そいつ等が一斉に攻めてきた時、お前達はどう対処するつもりだ！

？」

「そ、それは…」

「倍の数用意するか？無理だろ、それに…倍の数を用意したことで勝てるとも限らない。」

「いや…絶対に勝てないだろう、それぐらいあのネウロイは強い。だからこそ俺一人で充分だ。俺なら…あいつ等をぶっ殺せる、確実に」

ミーナは黙って聞いている。否、突き付けられた現実に対しショックを受けている。

俺の言っていることもちゃんと聞き取れているやら…。

「…お前らはいつもの様に普通のネウロイを斃していればいい。だが、アイツは…あの騎士型ネウロイだけは俺が必ず斃す。俺にしか、あいつ等は…斃せない」

そろそろ引こう、長居は無用だ。

ここまで言ったら、ミーナも流石に納得する筈だ。仮にもミーナは隊長だ、今はこんな状態だがすぐに冷静な判断が下せるだろう。

「…あの時の約束は必ず護る。だからこそだ、理解してくれ…」

今だショックを受けている様子のミーナを置いて、隊長室を後にした。

「…ふう。悪いな、ミーナ…」

ドアを閉めて一息、そしてミーナに対し呟くように謝った後自室へと向う。

「ぎ、儀國さん…」

「ん？宮藤…？」

そこには、宮藤が立っていた。  
表情からして、隊長室でのやり取りを聞いていたようだ。

「…少し、場所を変えるか」

宮藤 side

たまたま、本当にたまたま聞いてしまった。

儀國さんに用があつて、それで坂本さんに教えてもらつて隊長室に向つていた時だった。

隊長室から聞こえてきたのは、儀國さんの怒鳴り声。

今までに聞いたことがないぐらい、怒りを孕んだ大きな声に私はビツクリしてしまった。

気になった私は、悪いとは思いつつもドアに耳を立てて会話の様子を聞いていた。

そこで、信じられない言葉を聞いてしまった。

儀國さんが…ここから、居なくなる？

会話の内容、それは儀國さんが基地から出て行つてあの騎士型ネウロイ達を一人で相手にするという内容だった。

自分が狙いならば、ここにも被害が及ぶ。だから自分が出て行くことで基地へと被害を回避させ、自分が全て一人で相手にすればいい、そう儀國さんは言っていた。

私は信じられなかった。

あの優しい儀國さんがあそこまで怒鳴り声を挙げていたこともそうだけと…。

私の中では、儀國さんがここから居なくなるという事の方が一番信じられなかった。

そんな時、儀國さんが隊長室から出てきた。

ドアを閉めた後、凄く悲しそうな…後悔している顔を浮かべて、ミナ中佐に謝っていた。

そこで私に気付いて、今は屋上に居る。

場所を変えようと儀國さんが言い、屋上へと移動した。

「で…盗み聞きか？よくないぞ」宮藤イ…」

「そ、そんな事より、どういう事なんですか！？  
儀國さんが…ここを出て行ってくて！」

「聞いていたなら分かるだろ？ あの言葉の通りだ」

「一人で闘うつもりですか！？」

「そつだ、俺一人で闘う」



儀國さんが答える。その顔にはいつもみたいにふざけている様子はなかった。

真剣な眼、真剣な表情で…儀國さんは言っている。

「危ないです！ それに、儀國さん一人じゃ」

「心配すんなよ、後ちよつとで魔力回路の修復作業も終わる。そうすればこっちのもん…次出会ったら速攻で片付けてやる」

「私達じゃ…ダメなんですか？」

私は儀國さんに尋ねた。

私達じゃ、あの騎士型ネウロイを斃すことは出来ない…。

ミーナ中佐に言っていた、儀國さんのあの言葉が頭から離れない。

確かに、あの騎士型ネウロイがとても強いのは私だって…皆だって分かっている。

だけど、だからと言って儀國さん一人に全てを任せていい筈がない。

「確かに、私は儀國さんみたいに強くないです…。でも私にも…私達にもきつと、出来ることがあります！」

弱いけど、何か必ず出来ることがある。

だから一緒に戦わせて欲しい、何処にも行かないでほしい。

儀國さんがこの基地から居なくなるなんて…考えたくない。

寂しいし、悲しい。お兄ちゃんって慕ってるサーニャちゃんだって絶対に悲しむ。

「宮藤…気持ちだけは受け取っておく。だがな、気持ちや意気込みだけじゃどうにもならないんだよ、かつての俺のようにな…」

「えっ？それって…」

その時、基地に警報音が鳴り響いた。

「け、警報!？」

「襲撃…か、どうやら敵さんのお出ましのようだな。」

行って来い宮藤、それと他のヤツ等にも伝えておいてくれ。騎士型ネウロイが来たら、手を出さずに基地まで…俺の居るところまで通せってな」

そう言って儀國さんは屋上から出て行った。

「儀國さん……ッ！」

本当なら儀國さんを追い掛けて、出て行かないでと引き止めたい。けど、ネウロイが現れたのなら、私はやるべき事をしなくちゃならない。

このまま儀國さんを追い掛けたら、優先順位を考えろって絶対に怒られる。

だから早くネウロイをやっつけて、基地に戻ってもう一度儀國さんを説得しよう。

私は急いでハンガーへと向った。

## Act18：すれ違い「弐」（後書き）

Act18「弐」でした。

さてさて、今回ここで少しお知らせを…。

今彩月編（今命名）ですが…彩月編以降より、少し文章の書き方を変えと思っています。

と言うのも、新作執筆してるに辺り…「こっちの方が書きやすいし見栄えがいい？」と思ってしまったわけです。

まあまだ実用化するかは分かりませんが…。  
もし実用化した場合、今作完結後彩月編終了までの話を一気に大修正する可能性もあります。

その時はまたよろしくお願い致します。  
以上、夢幻遊戯でした。

すわっ！

Act19：氷魔再来「壱」（前書き）

Act19「壱」です。

## Act 19：氷魔再来「壱」

宮藤 side

ネウロイが現れた。この基地へと真っ直ぐ向かって来ているのと。  
と。

坂本さんの魔眼を見ると、大型のネウロイみたい。

騎士型ネウロイじゃなくて、とりあえずよかった。

私はリーネちゃん、坂本少佐、シャーリーさん、ルッキーニちゃん、  
ペリーヌさん、バルクホルンさん、ハルトマンさん…と一緒に撃墜  
に向った。

ネウロイとの距離を縮めている間、私は隊長室でミナ中佐と儀國  
さんとの会話の内容、そして儀國さんがこの基地から出て行くこと  
をしているという事を皆に話した。

「何だと！？儀國は…確かにそう言ったのか！？」

バルクホルンさんが怒った様子で尋ねてきた。  
納得がいかない、そんな顔をしている。

「は、はい…。俺一人この基地から出て行けば、私達を危険な眼に合わせることはないって、そう…言っていました。説得したんですけど、儀國さんは……」

「儀國…ちょっと勝手すぎるんじゃないかなあ…」

バルクホルンさんの隣を飛んでいたハルトマンさんも同じく、怒った顔を浮かべていた。

「なるほど…道理で可笑しいと思ったんだ。急に技を教えると言ったのは、そういうことか…！儀國のヤツめ…！」

坂本さんとても怒っていた。

皆、怒っている。儀國さんがこの基地から出て行くつもりとしていることに、たった一人で闘おうとしていることに。

「全くあの人は…本当に身勝手過ぎますわ…！」

ペリーヌさんも呆れた顔を浮かべているけど、声は怒っている。最初の頃は儀國さんを凄く敵視してたけど、最近は仲良く話しているのを見かける。

それを言つと、ペリーヌさんは頑なに拒否しているけど…。

でも、儀國さんと喋っているペリーヌさん、とても楽しそうにしているのを知ってる。

リーネちゃんや坂本さんだって、皆知ってる。

「あたしはまだ魔力回路開いてもらってないぞ、儀國」

「雅史の話とっても面白いのに、どこかに行っちゃうなんて寂しいもん！」

シャーリーさんとルッキーニちゃんが言う。

シャーリーさんもルッキーニちゃんも、儀國さんとは大の仲良し。親友、そんな感じがする。でも、休日の日からシャーリーさんと儀國さんの感じが変わった気がする。

いつもなら友達と話すようにしているシャーリーさんだったのに、あの日から少し照れ臭そうに話している。

何があっただろう…シャーリーさんに言っても教えてくれないし。ルッキーニちゃんも知らないって言ってた。



ルッキーニちゃんはよく儀國さんに遊んでもらってる。  
儀國さんの世界の話を聞くことが、ルッキーニちゃんは面白いから  
好きだって言ってた。

「芳佳ちゃん、私も一緒に儀國さんに説得する。  
一緒に説得したら、きっと儀國さんも考え直してくれる筈だよ」

「リーネちゃん…、うん！そうだね！」

皆、私と同じ気持ちだった。それを見て安心した。  
私一人じゃ、きっと儀國さんを引き止められない。でも皆で引き止  
めれば…きっと儀國さんも考えを改めてくれる。

「ならば、早くネウロイを斃して基地に戻るとしよう……見えたぞ  
！」

坂本さんが叫ぶ。

前方に視線を戻す。そこには一機的大型ネウロイがゆっくりと飛来  
してるのが、肉眼でも捉えられた。

「各自戦闘態勢！素早く撃墜するぞ！」

「了解！！！！」

早くネウロイをやっつけて、基地に戻らないと…。  
皆で儀國さんを説得して、儀國さんを引き止めよう！！

宮藤達がネウロイを撃墜しに出撃した。  
相手があの騎士型ネウロイじゃないことだけを祈っている。

ああは言ったものの、絶対に宮藤達は約束を護らないだろう。  
何があってもあの場で絶対に撃墜する、みたいな事を考えて行動する  
のが眼に見えている。

「まあ、いいか。とりあえず荷造りしとくかっ」と

整備兵の服を脱ぎ捨て、私服に着替える。今日は気分でワイン色の  
レザージャケットを羽織った。そして他の衣類は全て鞆の中へ、シ  
ヤリーと共にローマの町へと買い物に出た際に購入した手頃のい  
りリュック。

それに必要なもの全て詰め込み、そして肩へと担ぐ。

そして忘れてはいけないもの、それはあの砂浜で見つけ坂本の手により手渡された扶桑刀。

何かあつてからでは遅い。今は…今だけは封印を解こう。

全てはあの騎士型ネウロイを倒す為、そしてミーナ達を護る為…。

「さてと…行くか」

部屋を出る。と、直ぐにエイラと出会った。

呼吸が乱れ、肩で息をしている…全力疾走した後ということが伺える。

「ハア…ハア……ぎ、儀國！よかった、ちゃんというな…」

俺を見た途端、エイラの表情は安堵の笑みを浮かべた。

「エイラ、お前何をそんなに慌てて

」

「い、いや…変な夢見ちゃってさ…」

「夢？」

「ぎ、儀國が…この基地から居なくなる夢だった」

「…ッ」

タイミングが悪すぎる。何故エイラはそんな夢を見たんだ？

エイラの固有魔法「未来予知」は、夢で未来を視る事も可能なのか？

いずれにせよ、その夢の内容はあっている。

現にこれから、ココを出て行くこととしているのだから。

「って…なんで…お前……」

安堵の笑みから一変、今の資格好を見て驚愕…信じられないと言いたげな表情へと変わる。

「お前…そんな格好して、何処に行くんだ？」

「…エイラ、夢で見た内容は事実だ。俺は今日、ここから出て行く」

事実をエイラに伝えた。

## エイラ side

今日は嫌な夢を見た…。

夢の内容は、テラスで皆とお茶会をしているというもの。

リーネのお手製のスコーンやお菓子があって、美味しい紅茶がある。

皆楽しそうに話しながら、ネウロイとの戦闘の事を忘れて休息の一時を過ごしている。

だけど、その中でたった一人の姿が見えなかった。

私とサーニヤのテーブル、そこにいる筈のもう一人の姿がない。そう、儀國の姿がなかった。

儀國は何処に行ったんだろう…、辺りを見回していると儀國を見つけた。

けど、何故か儀國は私服を纏っている。そして肩には大きな鞆を提げていた。

その格好はまるで旅に出るような…ここから出て行くような、そんな風を感じ取れた。

『…元気でやれよ？エイラ』

そう、儀國は言つてテラスから静かに出て行く。その時の儀國は、とても悲しそうな笑みを浮かべていた。

私は慌てて席を立つた。何でそんな事をいきなり言い出すのか、私には理解できなかった。  
けど、ここで追い掛けないと…二度と儀國と逢えない、そんな気がした。

テラスを飛び出し、儀國の後を追いつける。

息を切らしながら、胸が苦しくなるのを我慢しながら…必死に儀國を追いつける。

そして基地の外へと飛び出す。

『儀國…！！』

私は儀國の名前を叫んだ。

遠くに見える儀國の後姿。ローマの街へと続く道を、儀國は歩いて

いた。  
歩いているだけなのに…その距離は私から既に1km以上も離れている。

私もその後を追いかけて走った。  
けれども距離は縮まるところかドンドン空いていく。

私は何度も儀國の名前を叫んだ。  
しかし、儀國はその私の叫びに振り返ることなく歩き続け、やがては完全に姿が見えなくなった。

そこで目が覚める。  
慌てて飛び起きて、直ぐに周りを見回した。

見慣れた光景が広がる、私の部屋。  
私の隣には、夜間哨戒任務から明けで帰ってきたサーニヤがグッスリと眠っている。

とりあえず、私は安堵の息を漏らした。  
けど、同時に言いようのない不安が押し寄せてくる。

何であんな夢を見たんだろう。儀國がこの基地から出て行く夢、実際にそんなことありえないのに…何で？  
そう思った時、私は服を着替えていた。

気になって仕方がなかった。絶対にありえない、そうに決まってるのに不安がドンドン大きくなっていく。

着替え終わった後私は急いで儀國の部屋へと向った。

そして儀國はいた。部屋に着いたと同時にドアが開いて、儀國が出てきた。

なんだ、やっぱりちゃんといるじゃないか…。

私は安堵の息を漏らした。けど、儀國の姿を見て私の中にあつた不安は急激に膨れ上がった。部屋から出てきた儀國の姿、それはあの時夢で見た姿と全く同じだったから。

「お前…そんな格好して、何処に行くんだ？」

私は恐る恐る尋ねた。

そんな筈は無い、きっと気のせいだ。

儀國はまた街にでも出掛ける、それだけなんだ。



そう心の中で、何度も復唱しながら…。

「…エイラ、夢で見た内容は事実だ。俺は今日、ここから出て行く」

儀國は静かに言った。

その顔には嘘の雰囲気は出ていない、儀國は…本気で言っていた。

Act19：氷魔再来「壺」（後書き）

Act19「壺」でした。

いやあ、なんか低クオリティな感じですよ…っていつもでしたね（悲）。

そんなわけで、失礼します。

すわっ！！

## お詫び

えっと…夢幻遊戯です。

既に活動報告にて申し上げました通り、『ストライクウィッチーズ 私、恋しちゃってます』を全面修正致します。

よって、此方はこれで連載終了という形で終わらせて頂きます。お気に入り登録して下さっている方々や、感想を下さった方々、本当に申し訳ありません。

修正verで前作となるこの作品と何処を変更しますかと言つと…。

壹：文章。

貳：儀國の能力。

参：新規シナリオの追加などなど。

前作よりボリュームアップ…かどうかは言い切れる自信はありませんが、兎に角頑張つて執筆していきます！

修正版『ストライクウィッチーズ 夢幻協奏曲』をどうか、応援の方よろしくお願い致します。

それでは。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1232p/>

---

ストライクウィッチーズ 私、恋しちゃってます

2011年3月5日00時35分発行